

赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の漫画作家。
『アストロノイト!』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。
本作・武蔵学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

◎こぶいち

※デジソフト原案の監修担当。
代表作は『おらばん!』『EXE』『夏空カナタ』。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
<http://iyatsune.blog87.fc2.com/>



MF文庫
J

あ-09-05



緋弾のアリアII

赤松中学

MF文庫
J

580



ISBN978-4-8401-2600-7
C0193 ¥580E



定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

MF文庫
J

緋弾のアリアII 燃える銀氷

東京武偵高校。そこは武力を行使する探偵——通称「武偵」を育成する特殊な学校。
強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアと、そのパートナーに選ばれて
しまった（普段は）ただの一般人・通山キンジの今回の使命は、超能力捜査研究科
の期待の星で、キンジの幼なじみでもある白雪を誘拐魔・デュランダルから護衛す
ること、つまりボディガードだ。しかしキンジの目には白雪が狙われているよう
には見えず、やがてアリアとの仲に亀裂が入り……。忍び寄る敵!! 緑色の巫女に
秘められし力が魔剣を斬り裂く、大スケールアクション&ラブコメディー第2弾!!

MF文庫
J

赤松中学の本

アストロノイト! [イラスト: bom]

アストロノイト!2 [イラスト: bom]

アストロノイト!3 [イラスト: bom]

緋弾のアリア [イラスト: こぶいち]

緋弾のアリアII 燃える銀氷
[イラスト: こぶいち]

赤松中学 (あかまつ・ちゅうがく)

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の漫画作家。
『アストロノイト!』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。
本作・武蔵学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

◎こぶいち

◆ソフト屋裏の裏裏顔。
代表作は『おらばん!』『EXE』『夏空カナタ』。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら戦争ゲームばかりをプレイ中。
<http://ityatsune.blog87.fc2.com/>



緋弾のアリアII

赤松中学



ISBN978-4-8401-2600-7
C0193 ¥580E



定価: 本体580円(税別)
メディアファクトリー



緋弾のアリアII 燃える銀氷

東京武偵高校。そこは武力を行使する探偵——通称「武偵」を育成する特殊な学校。
強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアと、そのパートナーに選ばれて
しまった(普段は)ただの一般人・通山キンジの今回の使命は、超能力捜査研究科
の期待の星で、キンジの幼なじみでもある白雪を誘拐魔・デュランダルから護衛す
ること、つまりボディガードだ。しかしキンジの目には白雪が狙われているよう
には見えず、やがてアリアとの仲に亀裂が入り……。忍び寄る敵!! 緑色の巫女に
秘められし力が魔剣を断り裂く、大スケールアクション&ラブコメディー第2弾!!

★ 人気を先取りする ★

MF文庫J
comic
alive

★ セロの使い魔 ★
★ ふいふい! ★
★ かのこん ★
★ 嘘からマモル! ★
★ 鼻と拳銃とティベア ★

★ あそびにいくヨ! ★
★ タバサの冒険 ★
★ けんぷファー ★
★ えむえむっ! ★
★ 鼻と拳銃とティベア ★

MF文庫Jの人気作も大好評連載中!! <http://www.mediafactory.co.jp/comic-alive/>

MF文庫J

仲間にならないと
風穴あけるわよ!!

早くも
大ヒット 人気爆発!!

MF文庫J

580

風穴あけられたいの?

神崎・H・アリア

遠山キンジ

普通じゃないんだよ
武偵高は

星伽白雪

キンちゃんのこと信じてるから

私は一発の銃弾

レキ

MF文庫J

毎月25日発売!

MF文庫J公式HP

▶ 新刊情報 ▶ 立ち読み ▶ 雑誌、ケータイ待ち受けダウンロード
<http://www.mediafactory.co.jp/bunkoj/>



ケータイでもCHECK!

MF文庫Jモバイル

▶ 毎月5日・15日・25日更新!
<http://mobile.bunkoj.com/>

緋弾のアリアII
燃える銀氷

緋弾の アリア

Red the Scarlet Hime



肥満のARIA

作：こぶいち



※この作品は「緋弾のARIA」本編とは関係ありません。

MF文庫



MF文庫Jは、毎月25日発売・609円(税込)
www.mediafactory.co.jp/bunkoj

緋弾の刃

燃える銀氷

IV

Aria the Starline

赤松中学



かんざき H Ania
神崎・H・アリア

「半端な刀流を使い、
常に絶滅専行の凄腕武偵
名探偵の遺伝子を受け継いでいる」
強襲科





探偵科
トキヤミ

元・盗撮科で、格付けは最低のDランク
しかし、ある特殊体質のせい、でアリアの
パートナーに選ばれてしまった

とおやま

遠山キンジ

Kimji Tokiyama



Shirayuki Hotoori

星伽白雪

武蔵高の生徒会長で、キリンの地を、
代々継ぐ星伽神社の巫女で、鬼道術を使う

超能力捜査研究科



レキ
Reki



スライダの狙撃の天才。新口で無差別
名字を知る者はなく、本人も知らないらしい。

狙撃科

「お前は星伽^{ほとぎ}を裏切れない。

それがどういいうことを意味するか、
分かつているならな」



P11 1弾 武装巫女

P31 2弾 真剣白刃取り

P76 3弾 かごのとり

P141 4弾 人工なぎさ

P170 5弾 銀氷

P266 最終弾
あの一閃は、誰が？

P285 エピローグ
Go For The NEXT!!!

Contents

緋弾のARIAⅡ

ダイヤモンド

燃える銀氷

赤松中学

MF文庫



口絵・本文イラスト●こぶいち

編集●笹尾明正

1弾 武装巫女

ほとぎしらゆき やまとなでしこ
星伽白雪は、大和撫子だ。

つやつやした黒髪ロングの、おしとやかで慎ましい、古き良き日本の乙女。
炊事・洗濯が上手で、誰にでも優しい、良妻賢母のタマゴなのだ。

……本来は。

鬼の形相で日本刀を振り上げて、

「ア、ア、アリアを殺して私も死にますうー！」

なんて叫ぶことは、決してない子なのだ。

……普段は。

「だから何であたしなのっ！ 人違いよ！」

名探偵シャーロック・ホームズ卿の4世、神崎・H・アリア様にも、この巫女さんがな
んで自分の命を取りにきたのか、分からないらしい。

そりゃそうだろうな。

幼なじみの俺にも分からないんだから。

俺は急遽、今までの流れをおさらいしてみる。



・合宿から帰ってきた白雪しらゆきの携帯から俺おれの携帯に、『女の子どうせいと同棲どうせいしてるってホント?』に始まる49通ものメールが突入してきた。

・直後に白雪本人が突入してきた。

・で、アリアを見つけるなりこうなった。

以上。

……ダメだ。

分かん。

白雪が逆上する理由が全くわからんっ！

「白雪！ お前、なに勘違いしてんだっうおっ!？」

がすっ！

セリフの途中で、俺の背中をアリアが思いっきり蹴けっ飛ばしてきた。

俺は廊下の壁にぶつかり、転倒してしまう。

「キンジ、なんとかしなさいよ！ あんたのせいでヘンなのが湧わいたじゃない！」

「お、俺のせいじゃねえよ！」

「そう！ キンちゃんのせいじゃない！ キンちゃんは悪くない！ 悪いのは——アリア！

アリアが悪いに決まってる！ アリアなんか、いなくなれえーっ！」

い、いかん。

白雪は——怒りで我を失ってる。

実は……どういふシステムなのかは未だに不明なのだが、白雪は子供のころからたまにこの発作を起こすのだ。

こうなると経験上、もう誰にも手がつけられない。なんで自分が襲われるのかも分からない被害者——たいてい、女子——が、ボッコボコになるまで。

「天誅—— ツ!!」

金切り声をあげた白雪は、下駄をカカカツと鳴らして突進し、ぶうんっ！

いきなり、アリアの脳天めがけて刀を振り下ろした！

あ、ありえん！

これ、本気で殺る気だぞ！

「みやつ！」

ネコ科の珍獣みたいな声を上げたアリアは、ばちいいいっ！

白雪の日本刀を、左右の手で挟んで止めた。

（——し、真剣白羽取り！）

実戦で使用するのを初めて見たっ。

アリア、さすが格闘術の達人だな。

などと感心してる場合じゃないだろ俺^{われ}よ。

「この、バカ女！」

アリアは刀をホルドしたまま、だんっ！ がしっ！

スカートを思いつきり跳ね上げつつジャンプして、両脚^{りようあし}で白雪の右腕^{しらくみ}を挟^{はさ}んだ。そして、ぐぎいー、とその腕をねじり上げにかかる。

「バーリ・トゥードね——!?」

アリアの流派を一瞬で見抜いたらしい白雪は、即座に、カツンッ！ また下駄^{げた}を鳴らして床を蹴^けり——ばすんっ！

アリアを腕に絡^{から}みつかせたまま、バックドロップを決めた。

おっ、おいつ、床が思いつきり凹^へんだぞ！

「う~~~~いなくなれ！ いなくなれ泥棒ネコっ！ キンちゃんの前から消えろっ！」

白雪は両足でアリアを思いつきり蹴^けつとばす。

「きゃうっ!?」

アリアは、ごろごろっ、がしやしゃー！

居間のソファをガレキに変え、その下に埋もれてしまった。

「や、やめろ！ やめるんだ2人ともうおっ!?」

ばすんばすん！

叫んだ俺の眼前を、ガレキの下から。

とうとうアリアがブツ放した、二丁拳銃の弾が飛んでいく。

ギギンッ！

白雪はその拳銃弾を、さも当たり前のように刀で弾き飛ばした。

「キレた！ も~~~~キレたっ！——風穴あけてやる！」
ぽんっ！

カタパルトで射出されたかのように、ガレキの下からアリアが飛び出す。

弾倉がカラになるまでばかりかすか連射しつつ駆け寄るが——白雪が弾を全部弾くので——
じゃきじゃきつ、ギイイインッ！！

双剣双銃の二つ名通り、今度はクロスさせた2本の小太刀で白雪の平突きと切り結んだ。
そして、ぎりぎり、ぎりり、ぎりりりりいー！

鎧迫り合いになる。

「キンちゃんこの女を後ろから刺して！ そうすれば全部見なかったことにするよ！」

「キンジ！ あたしに援護しなさい！ あんたあたしのパートナーでしょ！」

2人ともから加勢を求められた俺は——

もう……何が何だかで。

「……勝手にしろ。心ゆくまで戦えよ」

痛い頭を押さえながら、トボトボ……と歩いた。

そして睨み合う2人の横を通り過ぎ、窓を開け、ベランダに出る。
なぜ、ベランダなのかって？

ここには物置があるからだよ。
防弾製のな。

「キンちゃん！」

「キンジ！」

2人の声を背に、物置を開け……ロッカーみたいなそこに入る。

バーサーカーの白雪しらゆき。

戦いくさの申し子、アリア。

この怪獣決戦が、平凡な、いち高校生の今の俺おれにおさめられるか？

答えはNoだ。

だから……俺は。

物置の扉を閉めて、この、ありえない現実から逃避することにした。

情けないと思わば思え。

誰だれだって、命は惜しいだろ？

星伽の巫女は、武装巫女だ。

どこの神社でも神主や巫女は多かれ少なかれご神体をお守りするものだが、白雪の実家こと星伽神社は、長い歴史の中で何をどう間違えたのかそれを武装して守っている。

で、あの白雪の女傑っぷりを見れば分かるように……星伽の巫女は、強い。

今の白雪も、拳銃弾を日本刀で弾くような芸当を平然とやってのけた。あんなこと、ヒステリアモードの俺でも1度しかやったことがないのに。

彼女の強さの源は、説明されてもよく分からないし実際見ても分かりにくいのだが、どうやらあれ……鬼道術とかいう『超能力』の一種らしいのだ。

……

………超能力。

こんな話、うさんくさすぎて誰も信じないだろう？

俺だって信じたくないよ。

でもどうやら超能力者というやつは実在していて、各国の特殊機関で密かに研究・育成されているらしい。武偵高でいえば、超能力捜査研究科がそれにあたる。

で、白雪はそこでも優等生として、目下ああいう超人能力を開発中らしいのだ。

なお超能力を有する武偵は『超偵』と呼ばれ、うさんくさがられながらも日に日にその存在感を武偵業界で増している。

はあ、と、俺は深い溜息をついた。

——普通じゃない。

いずれは一般の学校に転校して普通の学園生活を送り、平凡な大人になりたい……いまでも、そう願ってるのに……

アリアのせいで、どんどん普通じゃない世界に巻き込まれてるな。最近の俺は。

戦争映画みたいな音がようやく止んだので……

俺は現実逃避のため映画サイトを見ていたケータイを閉じてポケットにしまい、そ……つ、と、防弾物置から出た。

部屋の光景に、気が遠くなる。

壁には至るところに弾痕やら斬撃の跡ができ、お気に入りだったあれやこれやの家具は破片となって床に散らばっている。

まるで地震と台風がいつぺんに来たみたいだな。

で、その地震娘と台風娘だが、お互い髪の毛はバサバサ、服は乱れに乱れ、汗やホコリにまみれて、東西の美少女が台無しというカッコで力尽きていた。

「はあ……はあ……なんて……しぶとい、どろ、ぼう、ネコ……」

白雪は日本刀を杖のようにしてなんとか立ち、ぜーはーと荒い息をしている。

だから床に刀を刺すなって。

「あ、あんたこそ……とつとと、くたばり、なさいよ……はふ、はふう……」

アリアは床に尻しりをつき両膝りようひざを立て、上体が後ろに倒れるのを腕で支えている。

「……で、決着はついたのか。見たところ引き分けっぽいんだが」

刀折れ矢尽きた後は、第三者による和平調停というのが世界のルールだろう。

と思った俺は、2人に対話での交渉うながを促す。

「——キンちゃんさまっ！」

俺が出てきたことにいま気付いたららしい白雪は、刀をがしやんと脇わきに置き、よろよろとその場に正座し直した。

そしてその黒曜石こくようせきみたいにキレイな瞳ひとみをうるうるつと潤うるませ、両手で顔をおおう。

「しっ、死んでお詫わびしますっ、きっ、キンちゃんさまが、私を捨てるんなら、アリアを殺して、わ、私も今ここで切腹して、お詫わびしますっ！」

なんだか二重にも三重にもワケの分からない事を言い出したな。

ていうか何だキンちゃん様って。

接尾辞せうびじが2つついてるぞ。

「あ、あのな……捨てるとか拾うとか、なに言ってるんだ」

「だって、だって、ハムスターもカゴの中にオスとメスを入れておくと、自然に増えちゃ

うんだよー！」

「意味が分からん上に飛躍しすぎだっ」

苛いらついた声を出す俺おれに、白雪しらゆきはガバツと泣き顔を上げた。

「あ、あ、アリアは キンちゃんのこと、遊びのつもりだよ！ 絶対そうだよ！」

「ぐえっぐえ襟首えりくびをつかむな！」

「私が悪いの、私に勇気がなかったからキンちゃんは外についていうか内に女を……」

「それ以上勇敢になられても困るわよ」

横から憎にくまれ口を叩たたいたアリアめがけて、

「キ、キンちゃんと恋仲になったからっていい気になるなこの毒婦どくふ！」

白雪は俺を床に放り投げると、じゃらっ！

袖そでに仕込んでいた鎖鎌くさりがまをアリアめがけてブン投げた。

「こ、恋仲!？」

アリアが盾たてにした漆黒しつこくのガバメントと左手に、じゃりじゃり！ と鎖がからみつく。

そしてそのまま、ぎりぎりり。

2人は思いつきり力のこもった顔で鎖を引っ張り合った。

「ば、バカ言うんじゃないわよ！ あ、あああたしは、恋愛恋愛なんか、どうでもいい!!」

ラブ関連の話題がニガテなアリアは、ぶわああああ。

一気に真っ赤になりながら、アニメ声で絶叫する。

「恋愛なんか——あ、あんな時間のムダ、したこともないし、するつもりもない！ あ、憧れたことだつてないんだから！ 憧れたこともない！ 憧れたりしない！」

なぜ3回も言う。

「じゃあキンちゃんはアリアの何なの！ 恋人じゃないの!？」

「そういう関係じゃないイー！」

声を裏返らせるアリア。

「キンジはあたしのドレイ！ ドレイに過ぎないわ！」

「どっ、どっ、ドレイ……!？」

それを聞いた白雪は顔面蒼白そうはくになって、あんどりと口を開けた。

そして何を想像したのか、こんどは火がついたように真っ赤になる。

コイツも忙しいヤツだな。

「そ、そんな……イケナイ遊びまで、キンちゃんにさせてるなんて——！」

「な、ななな、なにバカなこと言ってるのよ！ ちがうわよ！」

「ちがわない！ わ、私だつてその逆のは頭の中で考えたことあるから分かるもん！」

「ちがうちがうちがうちが——が——う——！ キンジ！」

ぎろ！

アリアは白雪しらゆきと鎖で綱引きをしつつ、赤紫色カメリアの瞳ひとみでこっちを睨にらんできた。
な、なんでしょう。

「このおかしい女が湧わいたのは、1000っパーセントあんたのせいよ！ 何とかしなさい！ そうしなきゃ後悔させてやるんだから！」
もうしてるよ。

「……えーっとだな。おい……まず白雪」

「はいっ」

呼ばれた白雪は鎖鎌くさりがまをぱっと放して俺おれの方に正座し直した。
どてっ。

反動でアリアが両足を真上に向けてひっくり返ったがそれはとりあえずスルーだ。

「よく聞け。俺とアリアは武偵ぶてい同士、一時的にパーティーを組んでるに過ぎないんだ」
「……そうなの？」

「そうだぞ白雪。お前、俺のあだ名を知ってるだろう？ 言ってみろ」

「……女嫌い」

「だろ」

「あと、昼行灯ひるあんどん」

「それは今関係ない」

「は、はい」

余計なあだ名まで出すなよ。話がこじれるだろ。

「というわけでお前のそのよく分からない怒りは誤解であり無意味なんだ。だいたい俺がこんな小学生みたいなチビと」「風穴」「そんな仲になったりするワケがないだろう？」

セリフの途中でアリアの声が割り込んできたが、それも無視だ。

どうせ弾切れしてるだろうしな。

「で、でも……キンちゃん」

ん？

従順さが取り柄の白雪が、珍しく口答えしてきた。

「なんだ」

「それ……」

と、白雪はその白魚しらうおのような指で俺のズボンのポケットを指す。

そこには……この間UFOキャッチャーで取ってきた、謎なぞのネコ科動物『レオポン』のストラップが露出ろしゅつしていた。

このヌイグルミは微妙に大きく、携帯をポケットに入れると外にはみ出すことがある。

だが……これが何だっただけ？

つつつ……と、白雪の指は、起きてきたアリアのスカートのポケットに移り。

そこにも——レオポン君が『やあ』という感じに頭と手を出していやがった。

「ペアルックしてるううう——!!」

叫んだ白雪は、ぶわあああー、と噴水みたいに涙をほとばしらせた。

「ぺあるつく?」

昭和ムード漂うその死語を知らないらしく、アリアがピンクの眉を寄せる。

「ぺ、ペアルックは好きな人同士ですることだもん! 私、私、何度も夢見てたのに!」
「だーかーらー! あたしとキンジはそういうんじゃないのよ! こんなヤツとなんて、

1ピコグラムもそういう関係じゃない!!」

ああ……

和平交渉が振り出しに戻ってしまった。

というかピコグラムって。

「こら白雪」

俺は白雪に向き直り、両肩をつかんで目をのぞきこむ。

「お前、俺の言うことが信用できないのか」

ちよつとシリアスに言うと、白雪はぼろぼろこぼれる涙を手の甲で拭いながらも……

「そ、そんなじゃないよ。信じてる。信じてますっ……」

再三の否定により、ようやく、態度を軟化させてくれた。



そして、ひんっ、ひんっ、としゃくり上げつつ俺とアリアを見回して、

「じゃあ、じゃあ、キンちゃんとアリアは、そういうことはしてないのね？」
と、少しだけ落ち着いた声で聞いただしてくる。

「そういうことって何だよ」

「キ、キス、とか……」

キス。

ですか。

キスですか。

「……」

「……」

俺とアリアは顔を見合わせ、同時に石化してしまう。

アリアは赤信号みたいに真っ赤になって、わぐ、わぐ。

絶句した口を開閉させながら、ぎろつと俺を睨んだ。

こ、こら。俺に振るなよ。

えっ——とだな——事実だけ思い起こせば答えは『した』ことになるんだろ？があれは理子との戦いの中での緊急措置というか何かであって決して恋愛感情からのキスではなくてだ

「……し……た……の……ね……」

眩つばやいた白雪しらゆきの瞳孔どうこうが、すーっ、とかっぴらいていく。

その顔はみるみる内に表情を失い、ノドの奥からは、ふふ、ふふふ、うふふふと虚うつろな笑い声まで聞こえてきた。

お、おい白雪！

今のおまえR指定だぞ！

「そ、そ——そういうことは、したけど！」

ざしゅっ！

反対側ではアリア嬢が、なんでもかご起立なされた。

そして、ぐぐい！

寄りも上がりもしない偽装胸を、思いつき張り張ってみせる。

「で、でも、だ、だ、だ、大丈夫だったのよ！」

大丈夫？

「昨日分かったんだけど！ こ、ここ、こ」

——こ？

「子・供・は・で・き・て・な・か・つ・た・か・ら・!!」

アリアのセリフに続いて、

……チーン……

という、お葬式の音が聞こえた。

ような、気がした。

……なんだ……子供……って……

アリアは力いっぱい腕組みして仁王立ちし、「どうよ!?!」という顔をしている。

ひゅう。

白雪しらゆきのカラダから、白雪のカタチをした何かが抜けていった。

「——白雪っ!?!」
どて。

白雪はとうとう、座ったまま真後ろに倒れてしまう。

「あ、アリアっ! お前なツ——なんで、子・供・なんだよ!」

「こっ……こっ、この無責任男! あたしはあれから人知れずけっこう悩んだのよ!?!」

「何に悩むんだよ！」

「だ、だってキスしたら子供ができるって、小さい頃、お父様が——」
この——！

ホームズ家の皆さま！

娘の性教育ぐらい、ちゃんとしとけよ！

「あんな事で子供ができるわけねーだろ！ 今どき小学生でも知ってるぞそんなこと！」

「なによなによ！ じゃあどうやったらできるのよ！ 教えなさいよ！」

「お、お、教えられっかバカ！」

「どうせ知らないんでしょ！」

「知ってる！」

「じゃあ教えなさいよ！」

「教えるかこのバカ！」

と、真っ赤同士の俺たちがお互いに詰め寄り、ぐぬぬぬうー。

額と額が引っ付き合いそうなぐらいの距離で、睨み合っている間に。

いつの間にか意識を取り戻したらしい白雪は——

部屋から、ケムリのように消えていた。

おいおい……

どうなるんだよ、コレ。

2弾

真剣白刃取り

エツジ・キヤツ・チンダ

その後のアリアと白雪しらゆきがどうなったかというところ、これは明暗がハッキリ分かれた。

『何事も自ら調べ自ら学ぶ』がモットーのアリアは生命の神秘についておしめしべレベ
ルから図書館で自学自習し、自らの保体知識が天動説並に間違っていたことを認めたら
しい。その後しばらく俺おれを見るたび赤くなって硬直する不可思議な挙動きやうどうを繰り返してはいた
が、切り替えは早いタイプらしく、今は大した理由もなく俺を踏んだり蹴けったり銃をぶっ
放したりする元のやんちゃなアリアに戻っている。カンベンしてくれよ。

一方……白雪は、あれから俺たちをあからさまに避けるようになった。

今まであれだけ鬱陶うつとうしく俺の身の回りの世話をしたがっていたくせに、アリアとの対戦
以降、俺を見るなり警戒心の強い小動物みたいに姿を隠すようになってしまったのだ。

そんなある日の——昼休み。

「遠山君とおやま。ここ、いいかな？」

がやがやとうるさい学食の中、俺がハンバーグ定食を、アリアが持ち込みのももまんを
食ってたら、目の覚めるようなイケメン面の男が、話しかけてきた。

ニコッ。



と優男やさおとこスマイルをしたコイツは、強襲科アサルトの不知火亮しらぬいりよう。

昔、俺おれとよくパーティーを組んでいたクラスメートだ。

武偵ぶていランクはA。このAにも色々あるのだが、不知火はバランスがいい。格闘・ナイフ・拳銃けんじゆう、どれも信頼がおける。拳銃はLAMレーザーサイトつきのSOCOMソックムとこちらも信頼性抜群だ。

不知火はクラブサンドを乗せたトレイを机に置いた際に少しズレた俺のトレイを、ちゃんと元の位置に整えた。ゴメンよ、と会釈えしやくすることも忘れない。ほんと、マメな男だよ。

……ちなみにこの不知火、モテる。

そりゃそうだ。イケメンだし。武偵高ぶていこうには珍しい人格者だし。

だが不思議なことに——アリアに付きまとわれる前の俺と武藤むとうと不知火はよくつるんで放課後を過ごしてたんだが——カノジョとか、そういうのはいないらしいんだよな。

「聞いたぜキンジ。ちよつと事情聴取させる。逃げたら轢ひいてやる」

反対から俺のトレイを押しつけるようにしてトレイを置いたツンツン頭は、武藤剛氣ごうき。車輛科じゆうしやの腕っこきで、乗り物と名の付くものなら汽車から原潜までなんでも操縦できる乗り物オタクだ。

ちなみにコイツの拳銃はメンテが楽だからという理由で回転式弾倉りころばーのコルトパイソン。装弾数は少ないし減音器サブレッサーはつけられないし、武偵の銃としては論外だ。

なお、武藤むとうはモテない。悪いヤツじゃないんだけど、ガサツだからな。

「なんだよ事情聴取って」

「キンジお前、星伽ほときさんとケンカしたんだって？」

……さすが武偵高。

情報、というかウワサが広まるのが異常に早い。

ていうか武藤お前、なんでそんなにムツツリしてんだよ。

「星伽さん沈んでたみたいだぞ？ どうしたんだ」

「白雪しらゆきとはどうしたも何も……っていうか武藤。お前、白雪を見かけたのか？」

「今朝けさ、温室で花占いしてたのを不知火が見たって言うからよ」

「なんだよ花占いって」

「ポピュラーじゃないか」

不知火が、形のいいまゆ毛をまゆ和ませて言う。

「知らねーよ。アリア聞いたことあるか」

俺が聞くと、正面のアリアは「しらない」という感じに首をふりふりした。

ピンクの長いツインテールが、でんでん太鼓みたいに揺れる。

ちなみにアリアは今もまんをほお頬張るように食っているところなので、しばらく静かである。

「遠山君とおやまも、きつと知ってる。花から花びらを1枚ずつちぎって、スキ・キライ・スキ・

キライ……ってやるやつだよ」

あー。あれか。

今どきそんな昭和なことをやるヤツがいるとは。

ホントに天然記念物だな。あの^{やまとなでしこ}大和撫子は。

「僕に見られてるのに気付いたのと、1時間目の^{よれい}予鈴が鳴ったのとで……占い自体は中断してたけど。なんか、涙ぐんでるみたいだったよ？ ……で、なんで別れちゃったの？ もう、愛が^さ冷めちゃったとか？」

うきゆうっ、とアリアがももまんをノドに詰まらせる音がした。

……だから愛とか言うなよ。

お子さまが過剰反応すんだろ。

「あのなあ……どこでどう話がこじれてそうなってるんだ。そもそも俺と^{おれ}白雪^{しらゆき}はそういう関係じゃない。ただの幼なじみだ」

「幼なじみ、かあ。はぐらかし方としてはポピュラーな言葉の選択だね。ウワサでは^{かんざき}神崎さんがヤキモチをやいて、^{ほとぎ}星伽さんに発砲したって聞いたよ。だから僕の読みは^{とおやま}遠山君と^{アサルト}神崎さんがうまくいって、女子2人が決闘して……ってセン。だって神崎さん強襲科でも遠山君の話ばかりしてるもんね。しかもすっごく楽しそうに」

きゅきゅうもきゅー！



かんざき ホームズ
神崎・H・アリア嬢は真つ赤になって一気にももまんを飲み込むと、

「こつ、こつ、このつ——ヘンタイ！」

「ぐっ!？」

どういうわけか俺の顔面にパンチを入れてきた。

おい。おかしいだろ。

殴るなら不知火だろ今のは。

「ハッキリ言っておくけどね。あたしが白雪を追い払ったのは、やつ、ヤキモチとか、

そういうんじゃないの。あたしとキンジはパートナ―。す、好きとかそういうのじゃない。

絶対、絶対、ぜえ——つたい、それはない。これは本当の本心の本音よっ！」

そんな念入りに否定せんでもええやん。

「へえ、そうなんだ。じゃあ遠山君。星伽さんとは復縁の可能性も有りってこと？」

「復縁って何だ復縁って。ていうか不知火。さっきの話だがな——白雪は今朝の予鈴の時

には、俺と一般校区の廊下で出くわして挨拶もせず女子トイレへ逃げ込んでるんだよ。

だから何かの見間違いだ。それに仲直りするしないだなんて、お前の個人的な意見なんて

そもそも求めてないだろ」

「そういえばそうだったね。ごめんよ」

ニコッ。

不知火は神父様みたいな笑顔で謝ると、それ以上は追及してこない。

俺から目を逸らし、アリアに『遠山君、機嫌悪いね』なんて小声で囁いたりしてる。

一方、武藤は……俺に聞きたい事があるけど、ここでは聞かない、という感じのヘンな顔をしている。まあ、武藤の顔がヘンなのはいつもの事だけだな。

「……そういえば不知火」

白雪の件でこれ以上イジられるのもイヤだったので、俺は話題を変えることにした。

「お前、アドシアードどうする。代表とかに選ばれてるんじゃないのか？」

アドシアードとは——年に一度行われる武偵高の国際競技会で、スポーツでいえばインターハイ、オリンピックみたいなモノである。

まあ平和の祭典オリンピックとは違って、こっちは強襲科や狙撃科によるキナ臭い競技ばかりが行われるんだが。

「たぶん競技には出ないよ。補欠だからね」

「じゃあイベント手伝いか。何にするんだ？ 何かやらなきゃいけないんだろ、手伝い」

「まだ決めてなくてねえ。どうしようか」

と、女子なら一目惚れしかねんアンニュイな溜息をつく不知火。

反対では武藤が焼きそばパンをもそもそ頬張り出した。麺が一部、口からハミ出てる。

「アリアはどうすんだ？ アドシアード」

「あたしも競技には出ないわよ。拳銃射撃競技代表に選ばれたけど辞退した」

「じゃあお前もイベント手伝いか。何やるか決めたか？」

「あたしは閉会式のチアだけやる」

「チア……？ ああ、アルカタのことか」

アルカタとはイタリア語の《武器》と日本語の《型》を合わせた武偵用語で、ナイフや拳銃による演武をチアリーディング風のダンスと組み合わせるパレード化したものだ。

武偵高の女子はそれを、臆面もなく『チア』と呼んで憚らない。

「キンジもやりなさいよ、パートナーなんだし。手伝い、どうせ何でもいいんでしょ？」

「あ、ああ……」

この出し物、世間的な印象がイマイチよくない『武偵』という仕事のイメージアップを目的としたものである。

なので見た目がカワイイ方がいいだろうと、踊るのはチアガール姿の女子だけ。

男子はそのバックでバンドを演奏する地味な役だ。

「音楽、か。まあ得意でも不得意でもないし……それでいいか、もう」

「あ。遠山君がやるんだったら、僕もそれにしようかな。武藤君も一緒にやろうよ」
ニコッ、とまた涼風のような笑顔を俺と武藤に向ける不知火。

歯並びいいなーお前。

「バンドかあ。カッコイイかもな。よし、やるかあ」

武藤もついてきた。

こいつら、ホントにいつも行き当たりばったりだな。

まあ俺も人のことは言えないんだが。

「……でも神崎さん、代表を辞退するなんてもったいない。ポピュラーな話だけど、知ってる？ アドシアードのメダルを持つてると、進路がバラ色になるんだ。武偵大も推薦で進学できて、就職にも有利。武偵局にはキャリア入局できるし、民間の武偵企業だって一流どころの内定がよりどりみどりって話だよ？」

「そんな先のことはどうでもいい。あたしには今すぐ、や・ら・な・き・や・い・け・な・い・こ・と・が・あ・る。」

競技の練習なんかに出てるヒマはないわ」

や・ら・な・き・や・い・け・な・い・こ・と・。

声に込められた決意から、それが……

アリアの母親、神崎かなえさんを助けることだと、俺にはなんとなく分かった。

無実の罪を着せられたかなえさんを救い出すため、アリアは数多の真犯人——このあい

だ戦った『武偵殺し』、理子・峰・リュパン4世もその1人だ——を相手に、これからも

熾烈な逮捕劇を繰り広げなければいけない運命の十字架を背負っている。

そしてそれは、パートナ―の俺も——だ。

ハイジャック事件で惜しくも取り逃がした理子^{りこ}は、俺^{われ}の兄さんのカタキでもある。少なくともあの一件は、いずれ決着をつけなければならぬだろう。

それに理子は……殉職^{じゆんしよく}した兄さんを、まだ生きているかのように話していた。俺に本気を出させるためのウソだったのだろうとは思うが、正直、あれは未だ^{いま}に少し気になる。

「アドシアードなんかよりね」

と話を続けたアリアは、ぐぐいと腕組みし、上体を後ろに反^そらした。

座高差のある俺を見下ろす視線を作りたかったらしい。142センチのくせに。

「キンジ、あんたの調教の方が先よ」

「……ちよ、調教？ お前ら、なんかヘンな遊びでもしてんじゃねーだらろ……？」

武藤^{むとう}が頬^ほを引きつらせて、俺とアリアを見回した。

白雪^{しらゆき}と似たようなこと言うな武藤。あとアリア……せめて訓練と言ってくれ、人前では」

「うるさい。ドレイなんだから調教」

さつきはパートナーだったのに。

都合のいいときだけドレイに格下げですか。

「ていうか調教って何をするつもりなんだ。具体的には」

「そうねー……んー。まずは明日から毎日、一緒に朝練しましょ」
げ。

アリアはどうやら朝練などという困った案をいま思い付いたらしく、うん、いいアイデアだわ、などと呟つぶやいてご満悦まんえつ顔である。

くそつ。ヤブヘビだったか。アドシアードの話なんてするんじゃないかな。

翌朝7時。

ゆうべアリアに二丁拳銃けんじゅうを突きつけられて命令された通り、早起きして待ち合わせ場所にいた俺は……

「だーれだ」

と背後から目隠ししてきたアリアに振り返り、一瞬、黙ってしまったか。

カワイイ。

「んもう。こんな簡単に背後を取らせるなんて。甘いわね」

背伸びをストンと解除して、両手を腰に当てたアリアは……

チアガール、の、カッコをしていたのだ。

武偵高ぶていこうのチアガールは、黒を基調にした珍しいコスチュームを着用する。

ノースリーブのトップには胸の上部に穴が空あいていて、穴からはアリアの真っ白な肌がのぞいている。普通はハート型とか星型の穴をあけるんだろうが、銃弾型の穴が空いてる

あたりがとつても武偵高ぶていこうだな。

恐る恐る見下ろしたスカートは、デフォルトでガンチラ（スカート内に隠した拳銃けんじゆうがチラ見えすること。命名・アホの武藤むとう）してるほど短い。

「な……なんだよ、そのカッコ」

「見て分かんないの？ チアよ。あんたモノを知らないにも程があるわよ？」

「お前にだけは言われたくないぞ。ていうか今のは、『なんでそのカッコなんだ』って質問しつもんだ」

「そんならそう言いなさいよこのドベ。これはあんたを調教する間に、あたしがチアの練習れんしゅうをする準備なの。同時にやれば、時間をムダにしないですむでしょ？」

と、アリアは誰だれもいない周囲を満足げに見回す。

ここは——武偵高が乗る人工浮島のハズレに位置する、通称、『看板裏』。

レインボーブリッジに向けて立てかけてある巨大な看板の裏であり、体育館との間に挟はさまれた細長い空き地あちだ。

いつも人けの少ないここをアリアは転入生のくせに目ざとく発見おれしていて、俺との特訓場にしたわけである。ついでに自分の課題もやろうって腹らしい。

「……で、俺は。何をすればいい」

「おほん」

チ・ア・リ・アはもったいぶって姿勢を正すと、咳払い^{せきばら}するフリをした。本当にコドモっぽいな。こういう仕草。

カワイイにはカワイイが、同時にイラツとくる。

「あたしの中では、あんたはSランクの武偵^{ぶてい}だわ」

「お前の中でだけはな」

「余計な口を挟まないの」

二丁拳銃に手を伸ばしたアリアに、俺は身の安全のため沈黙。

「強襲^{アサルト}科のSランクっていうのは、『1人で特殊部隊1個中隊と同等の戦闘力を有する』って意味の評価なのよ」

んなムチャな。

「あんたはそれだけの才能を持つてる、やればできる子なの。だけど、その力を自由には使えてない。だから必要なのは、あんたを覚醒^{かくせい}させる『鍵^{かぎ}』だわ」

アリア教授は得意げに語る。

自分がその『鍵』だとは夢にも思うまい。

「で、ハイジャックの後、あたし調べたの——二重人格^{ふたへうかく}ってものをね」
二重人格、か。

ふふん。そいつはハズレだぞ。

ヒステリアモードは、心因性の獲得形質じゃない。神経性の遺伝形質だ。

つまり、二重人格なんてものは全く別物なんだよ。

だが……俺はさも感心したような態度で、相づちを打っておくことにした。

「そうなのか。よく分かったな」

アリアよ。今後も見当違いな研究を続けるがいいさ。

「本とかネットで勉強したの。なかなか興味深かったわ。で、あんたにはたぶん幼少期のトラウマによる別人格があって、戦闘時のストレスによってそっちに切り替わるのよ」

「なるほど」

「自転車ジャックの時も、ハイジャックの時もそうだったもんね」

「そうだなあ」

「だから——あんたを戦闘のストレスにさらしまくるのが、特訓の第一段階」

と言うとアリアは、

ぞろり。

いきなり、こんなカッコでも背中に隠していたらしい寸詰まりの刀を抜いた。

「——お、おい待てっ！」

「なによ。拳銃戦はあとでやるから安心しなさいよ」

「そうじゃねえ！ そんなもんでお前に斬りかかれたらバラバラになっちまうだろ！」



「あのねえ。あんたの頭にも脳みそつてもんがスプーン一杯ぐらいは入ってるハズなんだから、少しは考えなさいよ。モノには流れつてもものがあるでしょ？」

カチンと来る言い方で、アリアは溜息ためいき混じりに言う。

「これはバカキンジモードのあんたにストレスを与えて覚醒かくせいさせて、覚醒後の反撃までの流れを作る訓練なの」

「反撃……？」

「まだ分かんないの？　しょうがないわね。じゃあ段取りを説明してあげるから、うれし泣きしつつ耳の穴をかつぽじってちゃんと聞きなさい？」

うれし泣きしながら耳掃除してるヤツがいたらアブないと思うが。

「その1。バカキンジモードのあんたがいる。その2。戦闘時に覚醒。その3。その場で反撃。これがあたしが考えた、理想の流れなのよ」

そんだけかよ。

恩着せがましい割にはアホほどシンプルだな。

これでコイツ、かの世界的名探偵シャーロック・ホームズの4世だと言うんだから……イギリス政府は国の名誉のためにDNA鑑定とかをした方がいいと思うぞ。本当に。

「だからあんたが覚えるべき技は、カウンター技なの」

「カウンター技……って何だよ」

「まずは真剣白刃取り」
エツジ・キヤツチンク

言うとアリアは、刀を振り上げた。

「待——」

て！ と俺われが叫ぶより早く、

ヒュッ!!

という空気を斬る音が、左耳のすぐ脇わきで鳴った。

今、見えないほどの速さで、アリアが俺の肩に刀を打ち下ろし——

——かけたところで、寸止めしたらしい。全然、見えなかったが。

ふわ。

アリアの動作で起きた風に乗る、例のクチナシみたいな香りが微かすかにした。

「はい。今のタイミングを500回、まずは頭の中でイメージする。制限時間10分」
絶句している俺を、アリアはその赤紫色カメリアの瞳ひとみで見上げる。

「……イメージ？」

「そう。まずは今の動きを元に、刀を挟み取るイメージを作るのよ。シャドーボクシング
みたいに、実際に手を動かしてもいいわ」

ひゅら、くるっ、ちゃき。

流れるような動作で刀を背中さやの鞘にしまうアリア。

「要するに……ただのイメトレか」

「なんなら今からタンコブ量産する？」

「分かった分かった、やりますよ」

俺は深く溜息をつくと、しぶしぶ、アリアの刀を挟み取る想像を始めた。

アリアはその様子に満足げにうなずいてから、

「うんうん。言うこときくキンジはいいキンジ。いい子よ。ママに冤罪を着せたイ・ウー

には剣の名手もいるらしいし、対ナイフ術は武偵の基本。しっかりやるんですよ？」

お姉さんぶった口調で言い、にこっと笑うアリア。

コイツに子供扱いされちやおしまいだ。

「はい、もうカウントダウンしてるからね。9分59、58」

「やるやる。やってる」

「ムダ口叩かないっ。はいペナルティーで30秒マイナス！」

なんだそのアリアルール。

独裁者なみに勝手なヤツだな。

（……でも、まあ……付き合ってやるか）

俺は小さく溜息をついた。

ヒステリアモードの鍵うんぬんはおいておくとしても……

一応、俺の腹はこの間の一件で決まってるからな。

俺は、正義の味方になんかならない。

でも——もう少しだけ、コイツの味方にはなつてやろうって。

(アリアがやりたいことには、付き合つてやるさ)

ただ、自分に言い聞かせておきたいところだが、これは決してコイツが可愛いかわいからとか、好きになったとか、そういう理由じゃないだろう。

単に『一度決めたことは曲げない』っていう、当たり前のことをしてるだけなんだ。

だから、他ほかにも決めていること——来年武偵高ぶていこうから一般校に転校すること、普通人になつて普通の人生を送ること——その計画も、変えるつもりはない。

などと考えながら、俺がイメトレをしていると……

アリアは、スカートの内側からiPodを取り出して操作し始めた。

横目で見れば……タッチパネルも兼ねたその小さな画面の中で、動画が再生されている。動画は、チアことアルカタの模範演技ムービーだ。アリアに言われてバンド担当に登録していた俺にも、今朝、アドシアード準備委員会から同じ動画が来ていた。

「ふうん……かわいいかも」

と独り言ひとりごしたアリアは、俺から少し離れて背を向け……
びっ。

びっぴっ。

いきなり、なにげにサマになってるダンスを始めた。

お。コイツ。

けっこううまいな。

チアなんて興味がないから詳しくは知らないが、しゃしゃつ、とピンクのツインテールを揺らしながら踊り始めたアリアの動きは、素人目に見ても立派なチアリーダーだ。

動きは普通のチアっぽいのから始まって——バツ、ババツ。

武道の『型』^{カタ}の動作を入れた、勇ましいもの^{いさ}に変わる。

まあそれでも、ちっこかわいいアリアがチア服でやると……キュートなんだが。

ナイフから拳銃^{けんじゅう}へと武器を持ち替えつつ踊ったアリアは、ぽん、と脚^{あし}を高く上げてその場で片脚^{かたあし}バック宙まで決めた。

アンダースコートは下着じゃないから恥ずかしくないもーん、って事らしいが、それはどうでもいいとして、コイツ、やたらうまいぞ。

びっぴっぴ。びっぴっぴ。

アリアはポンポンを拾い、『キラッ☆』ってカンジの笑顔まで作りやがる。

普段ツリ目でツンツンしてるから、こういう時はたとえ演技のスマイルだとしても効果が2倍だ。何の効果かは俺^{おれ}も知らんが。

だがそんな一方で……チアの練習をしているアリアは……

こうやって見ている分には、本当に、普通の女の子っぽく感じられた。

一般の高校にいても、別に誰もおかしいとは思わないだろう。ただの、ちょっとチビでワガママな、どこにでもいる元気な女子高生――

「っていうか……キンジ？」

急に、ダンスが止まる。

しゅる、とピンクのツインテールをなびかせてアリアが振り返った。

「さっきからなにジロジロ見てんのよ。やらしいわね」

アリアは、ぷん！ とポンポンを両腰にあてる。

そして自分のスカートがちよつとズリ上がり気味になったことに気がついて、ぱす、とポンポンで払って整えた。

「――見せ物じゃないのよ？」

なんかいまさら恥ずかしくなってきたのか、膨らました頬ほおをちよつと赤らめている。

「見せ物だろうチアは。本質的には。ていうかお前なんか別に見たくもない」

確かにアリアをガン見しすぎていた俺も、少し気まずくなつて視線を逸そらす。

「じゃあなんで見てたのよ」

「それは、そんな事、お前に関係ないだろ」

「……そりゃ、そうだけど」

「……」

あー。

なんだよ、この空気。

「それよりあんた、ちゃんとイメトレしてるの？　あと5分したら峰^{バツク}打ちで練習始めるんだからね？」

「峰打ちって」

あれはあれで凄^{すご}く痛いんだぞ。

要するに、金属棒でブン殴られるワケなんだから。

「最初はゆっくりしてあげるから、怖^{こわ}そうな顔しないの。でも、徐々に速くするけどねー」
ニヤリ。と、アリアは実に邪悪な笑^えみを浮かべるのであった。

「痛^いってえ……」

俺^{おれ}は放課後の今でもまだズキズキするタンコブをさすりながら、探偵科^{インケスタ}の校舎を出た。
ちくしょう。サドアリアめ。峰打ちとはいえ、ポコポコ殴りやがって。

なんか英単語とか歴史の年号をいくつか忘れたような気もするぞ。

「キーンジ」

アリアが、とてて、と夕焼けの中を駆け寄ってくる。

また、探偵科棟の前で待ち伏せしていたらしい。

「言っておくが放課後は訓練なんかしないぞ。俺は一般科目の宿題をやるんだからな」

「まだ何も言っていないじゃない」

「あと強襲科にも戻らないからな。あんな死ね死ね団に戻ってんなら、パートナ―は解消だ。俺は来年転校するまで探偵科で平和に暮らす」

「まだ何も言ってない」

アリアは俺のトゲトゲしい声などどこ吹く風で、とてて、とバス停に向けて歩いてく。そして、ひまわりみたいな笑顔で振り返った。

「でも朝練は明日もするからね」

……まあ、それぐらいは付き合ってやるか。

一応、パートナ―なんだし。

それに3回続けて否定的なことを言うと、3段オチのオチには『風穴』が待ってるだろうしな。

「あのねキンジ、今日、強襲科で対・投げナイフ技の練習をしたんだけどね——」
などと聞きたくもない物騒な話を楽しげにぺらぺら話すアリアは、最近、見てのとおりゴキゲンである。

理由は明らかだ。

俺が、そこそこパートナーっぽく振る舞っているからだろう。

かの名探偵シャーロック・ホームズ氏にジョン・H・ワトソン氏がいたように、アリアの一族——ホームズ家の人間には、その実力を発揮するためのパートナーが必要だ。

で、かつて『独唱曲』……ひとりぼっちだったアリアは、それを探し回っていた。比喩表現ではなく、世界中で。

そしてようやく、この東京武偵高で見つけたのだ。

——ヒステリアモードの、俺——

常時その力を発揮することはできないまでも、天才の自分に合わせられる助手を。

「ねえキンジ」

「なんだ」

「ふふ。なんでもなーい」

「うっざ」

道すがら時々こうやって振り返り、俺がいるのを確認してはランランとセーラー服のスカートをはひらつかせて道に戻るアリアに、ゲンナリしてくる。

「お前さあ、俺以外のパートナーはもう探さないのか……？　せめてもう2、3人仲間を加えて、パーティーを組んだ方がいいんじゃないか？」

そしてそいつらにはこのガキンちよのお守り役になって欲しいところだ。

「仲間なんかいらなない。みんなで何かやるのって、ニガテだもん」
よく分かります。

「そもそもあたしは1人でも戦えるし、あたしについてこれるパートナーがいればそれでいいの。あんたの調教が仕上がれば、それで十分。あんただけ、いれればいいの」
チクシヨウ。

てことは、コイツの面倒は俺が見続けなきゃなんないのかよ。

その事実、俺は……

「……頭痛がしてきた。お前にポコポコ叩かれたせいだ」

「アスピリンでも飲めば？」

「俺は頭痛とかカゼには大和化薬の『特濃葛根湯』しか飲まねーんだよ」

「とくのう？ なにそれ」

「生薬の成分を濃縮した、って意味だ。葛根とか麻黄とか、漢方薬がいろいろ入ってる」

「じじむさ。じゃあそれ飲んでおきなさい。明日もまたぼこぼこする」

「ちようどいま切らしてんだよ……あれはアメ横にしか売ってねーし。けっこう面倒なんだよ、あそこまで行くの。上野と御徒町の間ぐらいの薬屋で、どっちの駅も遠いし」
「キンジっ」

と、急に。

やっぱり俺おれのボヤキを聞いてなかったらしいアリアが、教務科の前で立ち止まった。

「これ見て」

「……何だ」

びしっ、とアリアが指す掲示板をのぞき込むと……

『生徒呼出 よびだし 2年B組 超能力捜査研究科 星伽白雪 ほときしらゆき』

白雪が、教務科に呼び出しを受けていた。

……珍しいこともあるもんだな。

偏差値75の優等生で生徒会長で園芸部長で手芸部長で女子バレー部長、生活態度も先日のアリア襲撃事件を除けばのせ完璧な模範生の白雪が……呼び出しとは。

「アリア。お前、このあいだ白雪に襲われたのをチクったのか？」

「——あたしは貴族よ」

きろっ、とアリアが紅い瞳あかひとみで睨にらんできた。

「プライベートな事を教師に告げ口するような、卑怯ひきようなマネはしないわ。いくら売られたケンカでもね。バカにしないで」

ほほう。

アリアにしては殊勝しゆしょうな心がけだな。

と少し感心する俺のそばで、アリアは口元にちんまい指をあてて少し考えてから、

「キンジ、これはあの凶暴女を遠ざけるいいチャンスだわ」

と、自分の凶暴性を棚どころか天井裏まで上げて、俺をアゴの下から見上げてきた。

「——この件を調査して、あいつの弱みを握るわよ！」

お前いま、貴族は卑怯なマネしないと云ってなかったか？

「弱みって……なんでだよ。白雪はあれから来てないだろ」

「来てるじゃない！」

え。

「最近、あたしが1人だとあちこちでドアの前に気配がしたり、物陰から見張られてるカ

ンジがしたり、電話が盗聴とうちようされてるみたいに断線したり——」

……………。

「一般校区でも渡り廊下から水がかけられたり、どこからともなく吹き矢が飛んできたり、落とし穴に落とされたり！」

……おいおい……

「『泥棒ネコ！』って書かれた手紙が送られてきたり。ネコのイラストつきで」

それはなんか半分カワイイが。

「——とにかく！ あたしはあの女に嫌がらせを受けてるのよ！ 気付いてないなんて、ほんつとキンジはどこまで鈍感なの！ この無能！」

「そうだったのか……」

「それだけならまだいいわ」

……いいのか？

「こないだなんか、女子更衣室のロッカーを開けたらピアノ線が仕掛けてあったのよ！ あたしが——その、まあ、身体的な理由によって——ロッカーの奥に潜り込まないと服を取れないのが分かって、首の位置に仕掛けてあったんだから！」

それは……笑えないな。

ちびアリアがロッカーに潜り込んだら、スパツ、か。

そんな凶悪なトラップ、強襲科の3年か課報科じゃないと習わないようなヤツだぞ。

「キンジ。この白雪が指定されてる呼び出しの時刻、一緒に……」

プリプリ怒るアリアは、眉をひそめていた俺に——

出会ってから今までで、最も恐ろしい指示を下すのだった。

「教務科に、潜入するわよ！」

東京武偵高は隅から隅まで危険きわまりない高校だが、その中にも『3大危険地域』と呼ばれる物騒なゾーンがある。

アサルト
強襲科。

ジャンクシヨン
地下倉庫。

マスタース
そして、教務科だ。

教師の詰め所にすぎない教務科が、なぜ危険なのか？

答えは簡単だ。

武偵高の教師が、危険人物ばかりだからである。

そりゃそうだ。こんな普通じゃない学校の先生なんて、普通じゃない大人に決まってる。

というか俺が知っているだけでも、前職が各国の特殊部隊、傭兵、マフィア、ウワサで

は殺し屋……などなど、聞かなきゃよかった経歴の持ち主が大集合している。

まあもちろん探偵科や通信科などの教師にはマトモなものもいるが、それは悲しいかな、

少数派に過ぎない。

「キンジ。手、届かない。抱え上げて」

と無声音で言うアリア様と、ドレイこと俺は……

その虎の穴・教務科に、今、潜入してしまっている。

「……はいはい」

まあ、潜入を断ったらアリアにボコボコに痛めつけられた上で風穴だろう。

それなら、ひと思いに殺してくれそうな教師どもの方がまだマシだ。

そんな悲しい理屈で俺はもうやけっぱちの精神。忍び込んだ教務科の廊下で、天井裏のダクトへアリアの手を届かせてやりにかかる。

抱きかかえるとまた強狼きようわうがどうのとか言われそうだったので、子供を持ち上げるように、両脇りょうわきを両手でつかんで持ち上げてやった。

「ほーれ。たかいたかーい」

ヤケクソついでに無声音で言うのと、

「風穴っ！」

ごすっ！

黒ニースのおひざが俺の鳩尾みぞおちにめりこんだ。10センチほど。

「……う……っ……お……！」

俺の悶えもたを無視しつつ、アリアは懸垂けんすいの要領で天井裏に上がる。目の前をニースとスカートの間（たしか武藤むとうが『絶対領域』とか言ってた生足の部分だ）が通過したと思ったら、ぐしっ。俺の頭を踏んでダクトに上がっていきやがった。

アリアに手を引かれて俺もダクトに上がり、ゴソゴソと匍匐ほく前進で進む。

ツインテールを引きずりつつのご主人様がスカートのまま先へ行ってしまったのには少

少ヒステリア化の危険性を感じたが——ダクトの中が暗くて助かった。スカートどころか、絶対領域とやらもよく見えん。

ゴソゴソ。

ゴソゴソゴソ。

前を見れば……

シャカシャカシャカシャカ。

アリアは、這^はって進むのが異様に速い。

角を曲がるアリアに、俺はなんとか追いつくカンジだ。

「アリア」

「なに」

「おまえ、匍匐前進速いな」

「得意なの。強襲^{アサルト}科の女子で一番速いわ」

「だろうと思ったよ」

「なんで」

「ジャマになるものがないからな」

「なにが？」

「胸だ」

ごすっ！

俺おれの側頭部に、角の向こうからアリアのカンガルーキックがめり込んだ。
10センチほど。

白雪しらゆきを——見つけた。

呼び出しをしていた教師の、個室にいたのだ。

俺たちは狭い通気口から、部屋の内部をうかがう。

都合、アリアと俺は頭と頭をほとんどくっつけた状態でノゾキをするハメになった。

こういう、身体接触というかなんとかを……アリアが嫌がったり怒ったりしたら、こっちも気まずい。ので、俺は少し頭を離しつつ横目で……チラ、とアリアを見た。

至近距離から見たアリアの横顔は、通気口から漏れ入る光に照らされていて……

——ああ。

クソッ。

と舌打ちしてしまいそうなくらい、かわいかった。

認めるのが腹立たしいことだが、アリアの顔立ちは本当に愛らしい。

お人形さんみたいに整ってて、それでいて表情も豊かときている。

笑顔も悲しそうな顔も、今みたいに集中している顔も、どれもこれも胸にグツと来る、

ハリウッドの子役女優みたいな力を持ってるんだ。ズルイよな。そういうの。

「星伽ほとぎいー……」

女にしては低めの、白雪を呼ぶ声。

室内では2年B組の担任で尋問科タギユラの教諭——綴先生つづりが、黒い革張りのイスで編み上げブリツの足を組んでいた。

白雪は向かいのイスについて、少しうつむいている。

「おまえ最近、急うーに成績が下がってるよなー……」

ぷは、とタバコの煙を輪っか型に吹いた綴は、室内でも真っ黒なコートを羽織はおっていた。そのコートの着方が、マンガとかに出てくるだらしない博士の白衣みたいにだらしない。腰には黒革のホルスターとそこに入った真っ黒な拳銃けんじゅう、グロック18が丸見えだ。

綴は——教師の中でも、アブないのの筆頭みたいな女である。

まず目がいつも据すわっている。年中ラリってるようなカンジだ。ていうかあのタバコ、明らかに市販のものとは違う草っぽい臭においがするんだがそれは日本国内で吸って大丈夫なモノなのか。

綴は黒くて薄い革手袋の手で、タバコ(?)を灰皿に押しつけた。

「あふあ……まあ、勉強はどおーでもいいーんだけどさあ」
こら。先生がそんなこと言うな。

だから武偵高の平均偏差値が50を超えないんだぞ。

「なーに……えーつと……あれ……あ、変化。変化は、気になるんだよね」

そんな単語を忘れる脳みその状態が心配になってしまいうこの綴は、無気力と額に書いてありそうな顔つきはともかく、実はある一点において恐ろしく有能な武偵である。

尋問。

その技術に於いて、コイツは日本でも五本の指に入る名人らしい。

何をされるのかは不明だが、綴に尋問されると、どんな口の堅い犯罪者も洗いざらい何でも白状する。その後おかしくなつて、綴を女王とか女神とか呼ぶようになるらしいが。

綴はおかつぱ頭の黒々した髪を揺らして、かぶりを振った。

「ねえー、単刀直入に聞くけどさア。星伽、ひよつとして——アイツにコンタクトされ

た？」

「魔剣、ですか」

白雪の言葉に——

ピクツ、とアリアがその眉を動かした。

魔剣。

周知メールで見ただけだが……俺も、その名前は覚えている。

たしか、超能力を用いる武偵・『超偵』ばかりを狙う——誘拐魔。



だが魔剣は、その実在自体がデマだと言われて久しい。

というのも、その姿を見た者が誰もいないのだ。誘拐されたとされている超偵も、実は別件での失踪だったんじゃないか？ という見方の方が今や多数派である。

今じゃ真に受けるヤツもいない、都市伝説みたいな犯罪者なのだ。ソイツは。

「それはありません。と言いますか……もし仮に魔剣が実在したとしても、私なんかじゃなくてもっと大物の超偵を狙うでしょうし……」

「星伽いー。もっと自分に自信を持ちなよオ。アンタは武偵高の秘蔵っ子なんだぞー？」

「そ、そんな」

白雪はぱつっん前髪の下で恥ずかしそうに視線を落としている。

「星伽い、何度も言ったけど、いいかげんボディーガードつけろってば。諜報科は魔剣がアンタを狙ってる可能性が高いつてレポートを出した。超能力捜査研究科だって、似たような予言をしたんだろ？」

「でも……ボディーガードは……その……」

「にやにやう」

破った英和辞書らしい紙で妙な草をモゾモゾ巻いた綴は、べろ、とそれをツバで留める。

「私は、幼なじみの子の、身の回りのお世話をしたくて……誰かがいつもそばにいと、その……」

「星伽、教務科はアンタが心配なんだよお。もうすぐアドシアードだから、外部の人間もわんさか校内に入ってくる。その期間だけでも、誰か有能な武偵を——ボディガードにつけな。これは命令だぞー」

「……でも、魔剣なんて、そもそも存在しない犯罪者で……」

「これは命令だぞー。大事なことから、先生2度言いました。3度目はコワイぞー」
タバコに火を点けた綴は、プフウーツ。

と煙を白雪の顔面にぶっかけた。
こら綴。

お前はいつでもいいが、白雪がこれ以上トンチンカンになったらどうすんだ。

「けほ。は……はい。分かりました」

煙に目を細めつつ、白雪はとうとう首を縦に振った。

(……)

今の会話から、俺は白雪が呼び出された理由を把握しにかかる。

超偵の白雪は、『魔剣』に狙われているかもしれない……と、最近学校から警告を受け

ていたらしい。

なので教務科は、白雪に護衛をつけろと命じた。

しかし、白雪はそれを断り続けてきた。

……それ自体には、実は俺も納得できるといえることができる。

武偵高では、よくこういった警告が生徒に出されることがある。

が——実際に誰かがその通り襲われた事は、ほとんど無いのだ。

超能力捜査研究科の予言なんてそもそも眉唾モノだし、諜報科はガセが多くて有名だ。

しかも敵は、存在すら怪しまれてる魔剣。

つまり——

これは、教務科の過保護ってヤツで。

優等生の白雪は教務科的には期待の星ってやつだから、その身に万が一でも何かあつてはいけない。なので不確かな情報にも過剰反応して、ボディガードをつけろと命令しているのだろう。

かわいそうなのは白雪だな。大人の都合に振り回されて、迷惑だろうに。

と、俺が口をへの字に曲げた時……

がしゃん！

と、アリアが。

通風口のカバーをパンチでぶち開けた。

「ちよっ……！ おまッ！」

ブラウスのスソを握る俺の制止を、ぽこ、ぽこここ！ とキックで振り切ったアリアは——ひゅらっ！

ダクトから飛び降り、豪快にスカートを翻^{ひるがえ}しつつ室内に降り立った。
目を丸くする、白雪と綴^{つづり}。と俺。

ていうかここからは見えなかったが、今のあれ、スカートのかなりアウトなめくれ方してなかったか？ いや、何がアウトなのかは知らんが。

「——そのボ・デ・ィ・ー・ガ・ード、あたしがやるわ！」

着地と同時に放たれたアリアのセリフに、俺は、驚きのあまりつい身を乗り出し——ズルッ、ズルルッ、

「う……うおっ!?」
べちゃ。

真下にいるアリアめがけて、落っこちてしまった。

「うおっ!?」

「むきゅ!?」

アリアは一瞬せんべいみたいに潰れたが、ぼんつ、と俺をはね除けた。

「き、きき、キンジ！　ヘンなどこにそのバカ面つけるんじゃないやうにゆえ！」

赤くなつて怒鳴るセリフの途中で、綴にネコづかみされて持ち上げられるアリア。起き上がった俺も——グッ。襟首をつかまれて持ち上げられ、だんっ。だだんっ。

アリア共々、壁際に投げ捨てられた。

な、なんてバカ力だ。綴。

「んー？　——なにこれえ？」

俺とアリアの顔をしゃがんでのぞき込んだ綴は、

「なんだあ。こないだのハイジャックのカップルじゃん」

すーつ、とタバコを一気吸いすると、こき、こき。なんか薄ら笑いを浮かべて、ナナメ上を見つつ首を鳴らした。あ……アブネーな。コイツ。こういう仕草。

ていうかカップル言うな。

「これは神崎・H・アリア——ガバメントの二丁拳銃に小太刀の二刀流。二つ名は『双剣

双銃』。欧州で活躍したSランク武偵。でも——アンタの手柄、書類上ではみんなロンドン武偵局が自分らの業績にしちやったみたいだね。協調性が無いせいだ。マヌケえ」

綴はアリアのツインテールの根本を片方つかんで顔を確かめながら、ペラペラとプロフィールを語り出した。

「い、イタイわよつ。それにあたしはマヌケじゃない。貴族は自分の手柄を自慢しない。たとえそれを人が自分の手柄だと吹聴ふいちようしていても、否定しないものなのっ！」

アリアは綴のアヤシさにも怯ひるまず、犬齒けんしをむいて答えている。

「へー。損なご身分だねえ。アタシは平民でよかったあー。そういえば欠点……そうそう、アンタ、およ……」

「わあ——！」

何か言いかけた綴の言葉を、アリアは両手をバタバタさせつつ大声でジャミングした。しかも急に真っ赤になって、口をあわあわせ出したぞ。

およ……って何だ。

「そぞ、それは弱点じゃないわ！ 浮き輪があれば大丈夫だもんっ！」
なるほど。

アリア、自爆したな。

突然の出来事に茫然自失ぼうぜんじしつしてる白雪しらゆきはピンと来てないみたいだが、俺は分かったぞ。

お前——泳およげないのか。

ははっ。いいこと聞いちまったな。

綴、ここはグッジョブだ！

「んで——」

綴は慌^{あわ}てるアリアから手を放すと、じろ。

子供用プールであっぴあっぴ溺^{おほ}れるアリアを空想していた俺^{われ}の方を、見た。

「こちらは、遠山^{とおやま}キンジくん」

「あー……俺は来なくなりましたが、アリア^{コイツ}が勝手に……」

「性格は非社交的。他人から距離を置く傾向あり」

思い出しつつ語る綴の頭には、どうやら全生徒のデータが入ってるらしい。

「——しかし、強襲科^{アサルト}の生徒には遠山に一目置いている者も多く、潜在的には、ある種のカリスマ性を備^{そな}えているものと思われる。解決事件^{コンプリート}は……たしか青海^{あおみ}のネコ探し、AN A 600便のハイジャック……ねえ。何でアンタ、やることの大きい小さいが極端なのさ」

「俺に聞かないでください」

「武装^{えもの}は、違法改造のベレッタ・M92F」

ぎく。

「3点バーストどころかフルオートも可能な、通称・キンジモデルってやつだよなあ？」

「あー、いや……それはこの間ハイジャックで壊されました。今は米軍払い下げの安物で間に合わせてます。当然、合法の」

「へへえー。装備科^{アムド}に改造^{イジリ}の予約入れてるだろ？」

じゅっ！

「うわちっ！」

笑いながら怒るといふ顔芸かおづいを見せた綴が、俺の手にタバコを押しつけやがった！
あ、ありえんっ。一瞬やけどだったから火傷はしなかったが、先生が生徒に根性焼きつて、
ていうかチクショウ。なんでも知ってやがるなコイツ。

「でえー？ どういう意味？ 『ボディーガードをやる』ってのは」

黒いおかつば頭を向けた綴の前で、アリアは勢いよく立ち上がった。

「言った通りよ。白雪しらゆきのボディーガード、24時間体制、あたしが無償で引き受けるわ！」

「お、おいアリア……！」

な、なんで白雪のボディーガードなんかにな乗りに出るんだよ？

むしろお前まへが襲う側のくせに。

と目で訴えるが、アリアの意志は固いようだ。

「……星伽ほとぎ。なんか知らないけど、Sランクの武偵ぶていが無料ロハで護衛してくれるらしいよ？」

黒いコートの裾すそを揺らして振り返った綴に、白雪は、

「い……いやです！ アリアがいつも一緒だなんて、けがらわしい！」

ぱつっ前髪の下まゆげの眉毛をつり上げ、予想通りのリアクションを見せた。

「——あたしにボディーガードをさせないと、コイツを撃つわよ！」

じゃき！

アリアは臙脂色えんじいろのスカートからいきなり白銀のガバメントを取り出すと、俺おれのこめかみにゴリツと銃口を当ててきた。

お、おい！ 武偵法ぶてい9条！ 9条！

武偵は人を殺しちやダメなんですよアリアさん！

「き……キンちゃん！」

はわっ！ と両手を口に当てて慌あわてる白雪しらゆき。

計画通り——といったカンジの、邪悪な笑えみを浮かべるアリア。

「ふうーん……そおかあー。そおいう人間関係かあー。で？ どーすんのさ星伽ほときは？」

綴つづりは何が面白いのか、この状況をニヤニヤ見ている。

そうじゃないだろ。

止めるよこの拳銃けんじゆうだけでも。

「じ、じよ、条件があります！」

両腕をぴんと真下に伸ばし、涙目をぎゅーっと閉じて、白雪が叫んだ。

「キンちゃんも私の護衛をして！ 24時間体制で！」

綴の部屋に響く、白雪の涙声。

「私も、私も、キンちゃんと一緒に暮らすうー！」

俺の体からは……

ひゅう。

と、俺の形をした何かが出ていくのであった。

3弾 かこのとり

ボディーガードは、武偵^{ぶてい}にとって最もポピュラーな仕事の1つだ。

通常は政治家・有名人・会社役員などのVIPおよびその子供などに付き添い身辺を警護する仕事だが、命を狙^{ねら}われている武偵^{ぶてい}を他の武偵^{ぶてい}が守ることも、間々ある。

で、この仕事、たいていは相手の家に住み込みでやるものなのだが……今回は依頼人、つまり白雪^{しろゆき}の強い希望により、逆に白雪^{しろゆき}が俺^{おれ}の部屋に来ることになった。

まあ俺もヒステリアモード地雷がゴロゴロしているであろう女子寮なんかに住むつもりはさらさらないので、まだマシといえばマシなのだが……

依頼の翌日すぐに引越してくるというのは、いかがなものか。

「武藤^{むとう}くん、本当にタダでいいの……？　せめてガソリン代だけでも……」

「いやーいいんすよ！　こんぐらいマジ朝飯前っすから！」

白雪を乗せてきた車輛^{くるま}科^かの軽トラからは、同級生なのになぜか白雪に敬語で喋^{しゃべ}る武藤が降りてくる。そして、キモいぐらい機敏な動作で積み荷を降ろし始めた。

……武藤って、あんなに勤労意欲あるヤツだったっけ？

「あの……でもここ、オレの記憶が正しければ、第3男子寮じゃないスカね」



「あ……うん」

「空き部屋を荷物置き場にするとか……っすか？　んなら女子寮に戻す時もまた遠慮なく呼んで下さいっす！　で……この後とか、ど、どーすかね。軽うーくお茶とかメシ——」

「あっキンちゃん！」

ロビーから出てきた俺を見つけて、ぱあっ、と白雪が顔を明るくする。

何か言いかけていた武藤は白雪を見て、俺を見て、また白雪を見て、ツンツン頭の上にハテナマークを浮かべた。

「キン……遠山？」
とおやま

「あ、あのね武藤くん。私、今日からキンちゃ……遠山くんのお部屋に住むの」

「——き、キンジのっ？」

「言っておくが、仕事だからな。俺は白雪のボディガードにさせられちゃったんだよ。アリアのせいだな。言いふらすんじゃないぞ」

と説明すると、武藤は口をあんぐり開けて絶句した。

……なんだよそのリアクション。

絶句したいのは、こっちなんだからな。

一触即発の怪獣娘2人と、これから暮らさなきゃいけないんだから。

戦場跡みたいになったままの我が家に戻ると、居間ではアリアが窓に何やら細工をして
いるところだった。

眉を寄せて見れば、購買部で売ってる赤外線探知器を設置している。

「何やってんだ」

「見れば分かるでしょ。この部屋を要塞化してるのよ」

「すんなよ!」

「なに驚いてるのよ、武偵のくせに。こんなのボディガードの基礎中の基礎でしょ?
アラームをいっぱい仕掛けて、依頼人に近づく敵を見つけられるようにしておくの。ちよ
うどいろいろぶっ壊れたし、やりやすいわ」

「ぶっ壊したんだろ」

「OK。あとは天窓ね」

アリアは俺の抗議を華麗にスルーし、手を伸ばして棚の上にある窓に探知器をくっつけ
ようとした。が、背が142センチなので届かない。うーん、うーん、とムリして手を
伸ばしたら棚の上から金ダライが落ちてきてがいんと頭を直撃した。ざまあ。

玄関からは――

「おじゃ、ま、しまーす……」

セリフを囁きまくりながら、白雪が部屋に上がってきた。

脱いだ武偵高指定のストラップシューズをきちんと揃え（そろ）ると、白雪はロングの黒髪にできたツヤの輪みたいなのをきらめかせて、ぺっこり。

90度ぐらいの、深あーいお辞儀（じぎ）をした。

「こ、これからお世話になります。星伽白雪（ほとき）ですっ」
知ってるよ。

「ふ、ふつかつか者ですが、よろしくお願いしますっ！」

「あのなー……なにテンパってんだ、今さら」

「あ……キ、キンちゃんのお部屋に住むって思ったら、緊張しちゃって……」

あは、とはにかむように苦笑（にがわら）いする白雪。

緊張（緊張）って。

お前こないだここで日本刀振り回してたろ。

「あの、お引越（ひきこ）しついでにお掃除（そうじ）もするね。そもそも散らかしちゃったの、私（わたし）だし」
なんて言いながら入ってきた白雪は……

……じろり。

早速、今度は台所の窓に防犯カメラを設置しているエリアを三白眼（にら）になって睨（にら）んだ。

「ふふっ。粗大（そだ）ゴミも処分（しぶん）しなくちゃね」

くるっ、と普段通りの笑顔で振り向いた白雪の、鈴の音のような美声。

……ノーコメントだ。俺は。

と思ったが、

「……ピアノ線とかは、やめるんだぞ？」

アリアのロッカーに仕掛けてあったという殺人罠を思い出し、一応、注意しておく。
すると白雪は、きよと、と長いまつ毛の目を丸くした。

「ピアノ線？ なんのこと？」

……トボケやがって。

だがまあ、こいつらのバトルにこれ以上首を突っ込むのはやめておこう。
この俺の、かけがえのない命のために。

家事と名のつくことを一切やらない貴族様とは大ちがいで、白雪の家事スキルはもはや神がかっていた。

片付ける気力すら湧かなかった俺の部屋からせつせとゴミを出し、テキパキと掃除機をかけ、壁や床の弾痕をパテで塞ぎ、カーペットを敷き替え……ものの3時間もしないうちに、あらかたキレイにしてしまったのだ。

仕上げに、霞草と温室栽培の撫子を使った見事な生け花まで飾ってやがる。

「……すっげ……」

眩つぶやきながら、俺は寮のロビーから運んできた白雪の桐きりタンスを壁際に設置する。
なにか手伝おうとすると白雪は「キンちゃんにそんなことさせられないよ！」と仕事を
取ってしまうので、俺がやれそうなことといえはこういう力仕事ぐらいだ。

……と。

白雪が台所に入ったのを見たアリアが、とてと俺の元にやってきた。

「キンジ。あんたそのタンスもチェックしときなさいよ？ 危険物が無いかどうか」

「危険物って。これは白雪の私物だぞ」

「移動中に誰だれかに何か仕込まれたかもしれないでしょ？」

「あのなあ……そういうの、疑心暗鬼っていうんだぞ」

「武偵憲章7条。悲観論で備そなえ、楽観論で行動せよ。あたしはこれからベランダに警戒線
を張るから忙しいの。あんた、ちゃんと調べとかなないと後で風穴まつりだからね」
なんだその物騒な祭りは。

「……はいはい」

「『はい』は1回！」

と工具箱を手にはベランダへ出ていくアリアにジト目を送りつつ……

俺は仕方なしに、一応、タンスの周囲をチェックした。

……当然、危険物など付いていない。

がら、と引き出しを開けると化粧品やなんかが入っていた。

別の段の引き出しを開けると――

「……？」

そこには、なんだか分からない小さな布がたくさん入っている。

布は1つ1つふんわりきちんと折り畳んであり、オリヅメになった色とりどりのお菓子みたいに整頓せいとんされている。小さなリボンつきのもある。

「……？」

布は『ふつう』『勝負』と書かれた白木しらきの札で分けられており、『ふつう』はどれもまぶしい純白。『勝負』は、黒だ。

『勝負』――？

ってことは、武装の一種か？

と思った俺おれはその不審な布を1つつまみ上げてみた。

それは光沢こうたくから絹きぬ100%と思われる黒布で、ヒモのように細い。

布が広がった三角形の部分は、華麗なトーションレースになっている。

向こう側が透すけてみえるようなそれを、ぴら、と左右に広げてみて……

「――！」

ばん！

俺は黒布をタンスの中に突っ込み、引き出しを閉めた。

危険物……

あつたな。

正確には『俺にとっての』危険物だが。

この引き出しの中の布は、全部、全部……下着、だったらしい！

それもおそらく——兄さんが生きてたころ教えてくれた事があるから、知っている——
Gストリングとか、ローライズなどと呼ばれる、おとな大人向けの過激なランジェリー類だぞ。

し、白雪しらゆきのヤツ。

いつもお淑しとやかで慎つつましい大和撫子やまとなでしこのそぶりをしてるクセに……陰では、あんな下着をつけてるのか。

そういえばいつだったか胸元を見てしまった時も、優等生らしからぬ黒をつけてたな。
い、いかん。

なるなよキンジ。

こんなのでヒステリアモードになってたら……まるで変質者じゃねーか！

「あつ……キンちゃんごめんね。タンス運ばせちゃったんだね。私の荷物なのに……」
後ろから声をかけられて、ハッ、と俺は振り返る。

いつの間にか近くには白雪が来ていたらしい。クリーム色のミトンをいそいそ外す白雪は、

掃除の次は料理をするつもりなのか制服の上にフリルつきのエプロンを重ねていた。

「あ、い、いや。いいって。力仕事ぐらい手伝わせろよ」

「ありがとうキンちゃん……やっぱりキンちゃんは力持ち。男の子だね」

どうやらさっきの俺の行為を見ていなかったらしい白雪は、嬉しそうに目を細める。

その、エプロンとスカート――

女っぽい優美な曲線を描く腰の丸みに、つい、目が行ってしまう。

未発達なアリアと違って、白雪のプロポーションは高校生ばなれしていることで密かに有名だ。

水泳の授業を盗み見たクラスのアホどもの話によれば、水着姿などは、まさにグラビアアイドル並だとか。

い、いかん。

今の『勝負』の方で、白雪の下着姿を想像してしまいそうだ。

そんなのを思い描いたら、いくら幼なじみとはいえアウトだぞ。

そう思った俺は、焦りつつ――

「……あ……えつとだな。ボディガードは、しばらくアリアに任せる。俺はちよつと外に行ってくる」

「えっ、どこに？」

「そ、外は外だつ。どこでもいいだろ」

「あつ……はい。余計なこと聞いてごめんなさい。ごめんなさいっ」

早くこの場から逃げ出したい俺が少し焦って言うのと、白雪は慌ててぺこぺこ謝った。
まあ、従順なヤツで助かるよ。こういうときは。

別に行くところもなかったので、俺は学園島で唯一のファミレス『ロキシー』で時間を
つぶすことにした。

アドシアードの閉会式でやるアル・カタの曲を、ケータイで聞いていたら……

「こおーらあー！」

ごち。

ちっこい拳が、いきなりゲンコツをくれた。

イヤホンを外しつつ顔を上げると、テーブルの横にアリアが仁王立ちしている。

「なにサボってんの、キンジっ！」

「これはその……事情があったんだよ。お前こそ出てきやがって」

「あたしは買物物についでに脱走兵狩りにきたのよ。正当な理由があるわ」

じゃり、とスカートから手錠を2個も出してくるアリア。

ラテン語の呪文らしきものが表面に彫られた純銀製のそれは、対超能力者用の手錠だ。

前に購買で見たが、やたら高額で引いた覚えがある。そんなもんまで買ったのか。

「脱走兵って。ていうかボディガードはどうしたんだよ」

「見張りはレキに任せてるわ」

「レキ？」

「あたしが頼んだの。遠隔から部屋を守らせてる」

すとな、とアリアは向かいの席につく。

レキ。

名字不明。

その時点でもう爆発的にアヤシい上に、無口・無表情・無感情の三拍子揃ったあのメカみたいな女子は——先日のバスジャックを、緒に解決した、狙撃科の生徒である。

能力的には1年の時からSランクという天才児^{えたい}なのだが、学校の屋上で一日じゅう体育座りしてたり、いつもでかいヘッドホンで得体の知れない音を聞いたり、アリア以上に何を考えているか分からないヤツだ。

……レキも巻き込んだのか。

アイツが見張りつていうと、なんかスコープで白雪^{しらゆき}に常に十字を当ててそうなイメージだな。

「とはいえ、腕^{パート・タイム}の時間貸しだけだね。あの子、狙撃競技^{スナイピング}の日本代表でアドシールドに出る

からいろいろ忙しいんだって。使えるのは、ほんの限られた時間だけよ。それに狙撃手は本来ボディーガード向けじゃない。だから基本、あたしとあんたがしつかり白雪を守らなきゃダメなんだからね？ はろはろー!? きーいーてるのー!?」

「み、耳を引っぱるな！ ちょっとレキのこと考えてただけだ、聞いてるっ。それに……誰だれも白雪なんか狙ねらってないだろうからな。誰でも好きに雇やとえよ」

「マジメにやりなさいキンジ。これは正式な任務なのよ」

「ていいうかなあ。なんでお前、急に白雪のボディーガードをやるなんて言い出したんだよ」昨日からの疑問を逆ギレ気味にぶつけると、アリアは――

ぱち。ぱちぱち。ぱちち。

と、左右の目を何度かウインクさせ始めた。

――マバタキ信号。

武偵ぶてい同士が人に聞かれたらマズい情報を伝達する際に使う、信号だ。

モールスみたいなそれを解読すると……

――デュランダル ノ トウチヨウ キケン

デュランダル
魔剣まけんの、盗聴とうちよう、危険？

なんだそりゃ。

アリアがこいこいと手招きするので、俺おれが仕方なしにテーブルに身を乗り出して耳を寄

せると——アリアは俺の耳に息がかかるぐらいの距離から、ヒソヒソ話を始めた。

くそつ……コイツ。息まで甘酸っぱい、いいニオイがするな。

「魔剣は——あたしのママに冤罪を着せてる敵の1人なのよ。この間の朝練で話した、剣の名手つてのが多分それなの。迎撃できればママの刑が残り635年まで減らせるし、うまくすれば高裁への差戻審も勝ち取れるかもしれない」

ああ。

なるほど……な。

そういう事情があったのか。

どうりで、教務科で魔剣の名を聞いた途端に人が変わったようになったわけだ。

と、俺が一応納得していると——

まるで本当に会話を盗み聞きされてたかのように、ケータイが鳴った。

「？」

レオポンのストラップを引っぱってケータイを見ると——

なんだ、白雪か。

「……もしもし」

『キンちゃん。ゴハン、もうすぐできるよ。今日は中華にしてみたの』

「ああ。分かった。もうすぐ帰る」

『うん。待ってるね。でもお友だちか誰かと一緒にいるんなら、遅くしてもいいよ』

『あー……』

アリアと一緒にいるとか言うのと、また機嫌を損ねそうだな。

『いや、1人だから。すぐ帰るよ』

『あたしがいるじゃない』

『キ……キンちゃん？ いま、アリアの声が聞こえたんだけど』
ぐ。

アリア空気読め。

『あ、えーっと。アリアは今ここを通り過ぎただけだ』

『何言ってるの。あんたさっきからあたしと喋ってたでしょ。バカなの？』

『——キンちゃん——』

白雪のなんだかコワイ声に続いて、
ざく。

包丁で大根か何かを切る音がした。

『——どうしてウソつくの？』

な、なんだこのホラー映画みたいな声！

『あーはいはい！ 今すぐ帰りますよ！』

俺はケータイをパン！と閉じ、KYツインテールの片方をぐいっと引っぱってやった。きや、なんてアリアが女の子っぽい声を上げるから少しは気も晴れる。まあ、数秒後に報復の高空ドロップキックを喰らわされたんだが。

部屋に戻ると、食卓には中華料理の皿がズラリと並んでいた。

カニチャーハンにエビチリ、酢豚に餃子にミニラーメンに、アワビのオイスターソース和えまで揃ってる。これはもう満漢全席だな。しかも俺の好物ばかりだ。

白雪はお盆に乗せた茉莉花茶も運んできて、制服エプロンのまま、テーブルについた俺の横に楚々と立った。俺が振り向くと、クセなのか前髪をせっせと整えてる。

「た、食べて食べて。ぜんぶキンちゃんののために作ったんだよ」

俺が食べるまでは食事に手をつけないつもりらしいので、お先に酢豚を失礼すると……うん。うまい肉だ。いかにも肉って肉だ。

そして舌をやわらかく包みこむ、この芳醇な甘酢の味。

白雪の料理能力は、まさにオールラウンドだな。

こないだ目玉焼きを作ろうとしてタマゴで手をドロドロにし、しかも結局作れなかったアリアとは天と地、いや、成層圏と日本海溝ぐらいの差がある。

「お……おいしい？　ですか？」

「うまいよ」

と答えると、それだけで白雪は幸せいっぱいといったカンジになって、お盆で顔の下半分を隠した。

何を妄想しているのか『…うれしい、あなた…』などと小声で呟つぶやいているが、どなたのことだろうか。

ていうか……

せっかくうまいのに、そうやって注目されてたら食べた気がしないんだが。

「ほら、白雪も食べるよ。いつもなんで俺の世話ばかり焼くんだ」

「そ、それは……キンちゃんだから、です」

「答えになってないだろ」

「……そ、そうかも」

てへ、と苦笑にがわらいしながら、席につく白雪。

その横では……腕組みしたアリアが、ヒク、ヒク、とこめかみを震わせていた。

「で？　なんであたしの席には食器がないのかしら？」

「アリアはこれ」

どん。

急に絶対零度の声になった白雪が、アリアの前に井とんがりを置いた。

井には、盛った白飯しろめしにワリバシが突き立っている。しかも割ってない。

「なんでよ！」

「文句があるんなら、ボディーガードは解任します」

つーん、とソッポを向く白雪しらゆきに、アリアは、ぎりぎりぎりい——。
犬歯けんしを食いしばってから、がしゅがしゅとご飯をかつ込むのであった。

日曜洋画劇場を見たい俺おれと、どうぶつ奇想天外2時間スペシャルを見たいアリアが互いの顔面をつかみ合いながらチャンネル争いをしていたら……

リビングに、白雪がカードゲームみたいなものを持ってきた。

「キンちゃん、あのね、これ……巫女みこせん占札おみっていうんだけど……」

「——みこせん……？ 占いか？」

「うん、キンちゃんを占ってあげるよ。将来のこと、気にしてたみたいだから」

「ふーん……じゃあ、やってもらうか」

コイツの占いはよく当たるので、聞いておいて損はない。

アリアも生物学的には女なので占いとかそういうものには興味があるらしく、なにそれ、なんて言いながらHDDレコーダーに動物番組を録画セットしながらテーブルについた。

お前、録画でいいなら最初から意地張るんじゃないよ。

「キンちゃんは、何占いがいい？ 恋占いとか、金運占いとか、恋愛運を見るとか、健康運を占うとか、恋愛占いとかあるんだけど」

「じゃあ……数年後の将来、俺の進路がどうなるのか占ってくれ」

と注文すると白雪は「チッ」と一瞬舌打ちのような音をさせてから天使のような笑顔になつて「はい」と答え、カードを星形に伏せて並べ、何枚かを表に返し始めた。

……俺は、ちゃんと真人間になれるのか。

一般の高校に転校し、平凡な会社か役所あたりに就職できるのか。

その辺は、占い程度でもいいから知っておきたいところだ。

「どうなのよ」

横からアリアが尋ねたので、白雪の顔を見ると……少し、険しい表情をしている。

「どうした」

「え、あ……うん。総運、幸運です。よかったねキンちゃん」

「おい。それだけかよ。何か具体的なこと分かんないのか」

「え、えっと、黒髪の女の子と結婚します。なんちゃって」

ニッコリ笑って答えた白雪の表情は、かなり作り笑いっぽい。

なんだよ。

本当は何だったんだ。気になるな。

「はいじゃあ次はあたしの番！」

ウズウズしていたらしいアリアが机に乗り出し、流れ的に、俺の占いは早くも終了してしまつた。

アリアは札を白雪しらゆきの方に寄せつつ、早く占いなさいよと急せかす。

「生年月日とか教えなくていいの？ あたし乙女座よ」

「へー似合わないね」

と言う白雪にアリアはカチンと来た顔をするが、とりあえず正座して結果を待つ。

白雪はすごく渋々っぽい顔で札を並べ、ぺら、と1枚開き、

「総運、ろくでもないの一言につきます」

適つ当——なカンジに言つて、占い札の片付けにかかった。

占つてないな、これ。明らかに。

「ちよつと！ ちゃんと占いなさいよ！ あんた巫女みこでしょ！」

「私の占いに文句言うなんて……！ 許さないよ、そういうの」

「——闘やろうつての？」

ぎろり、ぎろり。

と、2人が視殺戦を開始した。

い、いかん。

「アリアが戦いたいんなら、私は受けて立つよ。星伽に禁じられてるから使わなかったけど、この間はまだ、切り札を隠してたし」

ぱっつん前髪の下のまゆ毛をツリ上げる白雪に、アリアは立ち上がる。

「あたしだって切り札……えっと、2枚隠してたもんね！」

「私は3枚隠してました」

「じゃあ4枚！」

「5枚」

「いっぱい！」

「あーもう静かにしろ！　なんでお前ら占い1つ平和にやれないんだよっ！」

やはり戦争は未然に防ぐのが今後の国際社会のあるべき姿だろう。

俺は手がつけられなくなる前にと、2人を左右の手で引き離す。

「ふーんだ！」

アリアは、アッカンベー。

ペロを出すと、ふてくされて自室に閉じこもってしまった。

そして、ぴーががが。不審な電波がこの部屋の周囲に飛んでないか調べるため、この間通信科から借りてきた無線機みたいなのを稼働させ始める。

ぼっーん、と残された俺は、後ろ頭を掻きながら……白雪に向き直った。

白雪は、ぷすーん。むくれている。

「……悪口は言いたくないんだけど」

白雪は札を手際よく片付けながら、

「アリアって可愛い子だけど、うるさいよね。それにキンちゃんのこと何も分かってない。なのにキンちゃんに失礼な態度ばかり取って……男子はみんなアリアのこと可愛いって言ってるけど、私は……キライっ」

と一息に言った。

……白雪から人の悪口を聞くなんて、初めてだな。

白雪は、ちら、と俺を上目遣いに見てくる。

つまり……俺にもアリアについて一言言えと、そういうことらしい。

「アリア、か」

実は、俺は――

アリアと白雪について、ちょっとした発見をしていた。

今それを言うべきなのかどうかは分からないが、少し、探ってみるか。

「なあお前、アリアのこと……本当にキライか？」

「――えっ？」

「いや……なんていうかだな。お前アリアには結構はつきりモノを言うじゃんか。俺には

キヨドるくせに。それに……まあ外的かもしれないんだが……俺、お前が自分の感情をこんな表に出してるの、見たことない気がするんだよ」

「……」

「俺やみんなに對してる白雪より、アリアに對しての白雪の方が、なんか本音の白雪ってカンジがして……な。いや、ケンカしないしてほしいとは思うけどさ。ケンカしながらも、実はある一面では噛み合ったりするんじゃないのか？」

白雪は原則、人の言うことをよく聞く子だ。

それはいいこと、ということになっている。世の中的には。

だから白雪に對する人々の評価は高い。武装巫女モードになった時の本性を知らない先生たちからは当然氣に入られているし、生徒にも男子・女子の区別なく頼られている。

だが、その何事に對しても従順な性格には——問題も、ある。と、思うのだ。

そこには、白雪の意思がないのだから。

だが白雪は、それでもアリアに對してだけは自分の意思でぶつかっている気がする。俺の、勝手な思い込みなのかもしれないがな。

「……キンちゃんは……」

しばしの沈黙の後でそう言うと、白雪は少しだけ顔を伏せた。

ぱつつん前髪の下で、長いまつげの目が伏せられる。

「本当に私のこと、よく分かってくれてるんだね」

「……そりゃまあ、ガキの頃から一緒にいたからな。途中、ブランクもあるけど」

「きつと私以上に、私のことが分かってる」

さつきより少し柔らかな声になった白雪は……ちよつと座り直すようにして……

そつ……と、さりげなく近づいてきた。

「アリアは……私とキンちゃんの世界に、まっすぐ踏み込んできた。まるで銃弾みたいに」
そんな世界あったっけか。

と思うが、話の腰を折らないためにツッコまないでおく。

「そして私の全力を、正面から受けて——歩も退かなかった。キンちゃんの言うとおり
全体的にはキライなんだけど、ある一面では、凄（すげ）い子だな……って、そうも思ってるよ」
ふむ……

やっぱり単純にキライというだけじゃなくて、複雑な感情を抱いてはいるんだな。

「でも、だからこそ……キンちゃんを取られたくないの。あの子は、魅力的だから」

「……取るとか取られるとかって。あの子は、前も言ったが俺（おれ）とアリアは武偵（ぶてい）同士で、仕事
が終わったらバイバイっていうチームメイトみたいなモノなんだよ。幼なじみのお前とは
違うだろ」

「幼なじみ——そうだよねっ」

ぱ、と顔を明るくした白雪は、座った姿勢のまま特殊な動きをしているのか、全く気がつかないうちに俺の真つとなりまで移動してきていた。

お、おい。肩と肩が触れ合いそう、っていうか触れてるぞ。

「キンちゃんはずっと昔から、私のことを知ってくれてるんだもん。私、それがとっても幸せ。星伽神社を出たことがなかった頃の事から、ぜんぶぜんぶ、覚えてるよ……」

うつとりと語る白雪は、今度は微妙に首を俺の方に傾けている。

絹糸きぬいとのように艶つやのある黒髪が、俺の腕にくっついてきた。

微かすかに、香木こうぼくのようないいニオイがする。

「あー……そういえば、そんな頃もあったな」

俺は4〜5歳の頃、兄さんの仕事の都合で青森に住んでいたことがある。

そしてその郊外にある——星伽神社で、白雪と知り合った。

その頃の白雪はどういうわけか神社から出てはいけなと言われ、それを忠実に守っている子だったのだ。

ものすごく人見知りする性格だった白雪は初め俺を怖こわがっていたが、じきに打ち解け、他の小ほかさな星伽巫女みこたちとの遊びに入れてくれたもんだ。

「キンちゃんと一緒に花火を見に行った時は……うれしかったなあ……」

とうとう俺の肩に頭をコトンと乗せてしまった白雪は、思い出話を始めた。

「あの時のキンちゃん、町の花火大会にすっごく興奮してて……私のこと、神社から連れ出してくれたんだよ。物心ついてから星伽神社の外に出たのは、あれが初めてだった」

「あー……あれか。よく覚えてるな、そんなこと」

あのあと俺は大人たちおとなに怒られまくって、白雪はしばらく土蔵から出してもらえなかったんだっけ。

「すっごく怒られたけど、それからキンちゃん、よく星伽に遊びに来てくれたよね」

「兄さんの仕事について行っただよ。近所に同い年ぐらいの子供もいなかったしな」

何して遊んだっけな。俺がやりたかったサッカーは小さな巫女たちの多数決で否決されて、ママゴトとか、折り紙とか、かごめかごめばかりやらされたんだよな。

—— かーごめ かごめ かーごのなーかの とーりいーは ——

あの歌は今でも覚えてる。

兄さんが、白雪たちを『かごのとり』と、哀れむように呼んでいたことも。

『アドシールド準備委員会』の末席で、俺はぼんやりアリアのことを考えていた。

最近あいつは魔剣デユンダールの情報収集に勤しんでおり、あちこちを駆け回っている。夜中でもちよつと物音がしただけで跳ね起き、二丁拳銃けんじゅうを構える警戒っぷりだ。だがその敵の影が見

えない上、姑しゅうとめみたいなの白雪との生活のストレスで、明らかに「機嫌斜めである。

「——星伽さんもぜひ、せめて閉会式のアルカタには出ていただきたいわ」

「ええ。枠も1名分、ちゃんと空あけてありますし」

武偵ぶてい高も一応高校なので、生徒会はある。

だが校則により、生徒会役員は女子ばかりだ。

これはかつて男子たちに任せてたら、部費の取り合いで撃ち合いに発展したせいである。本当にろくでもない学校だよな。

で、このアドシード準備委員会は、ほとんどその生徒会メンバーで構成されている。なんでこんな退屈かつ危険な——女子だらけの——委員会に俺がお邪魔しているのかというと、白雪のボディガードのためというかアリアの命令のせいである。

「星伽先輩は美人だし、報道陣も好印象を持っています」

「あたしもそう思うな。武偵高、ううん、武偵ぶてい全体のイメージアップになるはずだよ」

「今回の振り付けを考えたのだから、星伽さんですし……アルカタのチアは、自分でもできますよね？」

などと言う役員たちの声に、俺は少し、委員会長の白雪を見る。

「は、はい。でも、私はその——あくまで裏方で貢献させてください」

上目遣うわめづかいで俺を頼るようにチラ見してきた白雪に、もういいからとっと切り上げてく

れよと心の中で呟く。もう主な議題はみんな終わって、雑談っぽくなってきてるしな。

それが以心伝心したのか、

「——では今日はもう時間ですし、これで会議を終了したいと思います」

白雪はよく通るキレイな声で、一同にそう宣言した。

こういう時の白雪は本当に言葉の発音がキレイで、なんだか頼もしい。

アリアが声優なら、白雪は女子アナだな。

そんな事をぼんやり考えながら、俺は大きなアクビをしつつ席を立つ。

……お開きになってしばらくすると、女子どもがきやいきやい騒ぎ始めた。

「ねえ、これから台場に行きませんか？」

「あつ、賛成です！」

「行く行く！ マルイ改装したんだよね」

「あたし夏物のミニほしー！」

「台場で思い出した！ エステーラの限定シュガーリーフパイ、今日発売だよー！」

「でた、色気より食い気！ モテない武偵娘の典型だよーっ！」

きゃはは、うけるー！

だよ。

みんな愛くるしい笑顔なんかしやがって……

イヤだなー、こういうの。

ていうかお前らがモテないのは拳銃^{けんじゅう}ぶら下げてるからだろ。気付けよ。

「星伽^{ほとぎ}先輩もどうですか？ 夏に向けて、私服とか見に行きませんか？」

1年が話しかけると、白雪は、えっ、という顔になった。

「あ、私はこれから帰宅して、S研の課題と、アドシアードのしおり作成を……」
と、うつむいた白雪に女子たちは、

「さすがですね。勉強熱心……」

「疲れを知らないんですね、星伽さんは」

「本当に超人だわ……」

などと、イヤミじゃなくて本気で白雪を尊敬してる模様だった。

そして――

同時に、なんか一歩ひいてるカンジもするな。なんとなく。

夕焼けの道を、白雪と並んで帰る。

委員会をやっていたクラブハウスと男子寮は近いので、徒歩だ。

……女子と帰るなんてイヤなんだが、一応ボディガードだから仕方ない。

1人で帰したりして、あとでアリアにバレたら風穴まつりだしな。

「きよ、今日はキンちゃんが見てたから、緊張しちゃった。私……どうだった？」

体の前に提げた学生鞆がくせいかわばんを両手で持つ白雪しらゆきは、はにかみながら、しかし俺おれと下校するのが心底嬉うれしそうな顔をしている。

「みんなに信頼されてるカンジがしたよ。いいんじゃないか？」

と率直に言つてやると、白雪は、かああ。

顔を緋袴ひはかまみたいに染めて、うつむいた。

「……き、キンちゃんに……ほめ……ほめられちゃった……」

などと小声で独り言ひとりごしている。

おい、前向いて歩けよ。

あーほら、電柱にぶつかった。

「そういえばお前、アルllカタのチアには出ないのか？ みんな、出てくれって言ってたじゃんか」

「だ、だめだよ。出られないよ。チアは……もつと、明るくてかわいい子の方がいいよ。

私みたいに地味な女の子が出たら、武偵高ぶていこうのイメージが悪くなっちゃう」

「お前な……そうやって自分を卑下ひげするの、良くないクセだぞ。チアなんか、やってる時だけ明るい演技すりゃいいだろ。演技してるうちに、本当に明るくなるかもしれないし。で、本番で大勢の人にそれを見せて、自信をつけるんだよ」

「でも……」

「ひよつとして教務科の——魔剣デユランダの話にビビってんのか？ そんなもん、実在しない。狙そ撃げきされたりしねーって」

「うん……分かってるよ。魔剣デユランダなんか、いない……でも、ダメなの」

「なんでだよ」

「星伽ほしぎに、怒られちゃうから」

星伽。

と、こう白雪が言う時は、星伽神社——

つまり、実家を意味する。

「なんで怒られるんだ。そんなことで」

今までも何度か白雪が似た発言をしてたから、なんとなく知っているのだが……

星伽神社は、東京の高校に出た白雪にいろいろ制約をつけている。

格式を重んじるのか、あれをしたらダメこれをしたらダメとうるさい。

「私は——あまり、大勢の人前には出ちゃダメなの」

少し頑かたくなな、白雪の声。

理由を説明するのではなく、否定を二度繰り返した。

何がなんでも、ダメということなのだろう。

「……さつき生徒会の後輩に台場行くの誘われてたのに、断つてたな。あれも、ひよつとして星伽か？」

まさか違うだろう、と思いつつ聞いてみると――

「うん」

「お、おい」

「私は――神社と学校からは、許可なく出ちゃいけないの」

お……おいおい。

いくら実家とはいえ、外出禁止つて。

さすがにひどくないか……っていうか人権侵害じゃないのか？ それは。

あのなあー、と俺が言おうとしたのを察したようなタイミングで、白雪が――

「星伽の巫女は、守護り巫女。生まれてから逝くまで、身も心も星伽を離るるべからず」
まるで独り言のように、言った。

「私たちは代々、本当は一生……星伽神社に在るべき巫女なの。そういう、決まりなの。もちろん他の神社にご用があつて行くこともあるし、現代は義務教育とかもあるけど……あくまで最低限にしなきゃいけないの。私が武偵高に来たのだって、すつごく、すつごく、反対されたよ……」

「でも出てきたんだろ。そんな習わし、素直に守ることない。怒られるのが怖くて高校生

「がやれるか。なに良い子ぶってんだ」

「……………」

「今日は晚メシとか作らなくていいから。今からあいつらのところ行って服でも見てこい」

「ううん、いいの。それに……………なんだか、外は……………こわいよ」

白雪は、しょぼん、と視線を落とす。

「怖いって。マルイがか？ あそこはただの服屋だぞ？」

「でも私、小学校も中学校も、女^め巫校を出たことが無いし……………」

女巫校。

神学校の一種で、裕福な神社の娘たちが通う全寮制の女子校だ。

「ああやって外に出てお買い物とか、買い食いみたいのとか……………一度はしてみたいけど、私、みんなと一緒に外とか人前とかに出て行く自信がないの」

「……………自信？」

「私はみんなが知ってることを何も知らないから。学校の話じゃないと、会話がもたないし……………どんな服を着ればいいのかも分からない。お菓子も、音楽も、テレビも……………流行とかそういうのが分からなくて……………みんなと、理解し合えないの」

「白雪……………」

「でもいいの。私にはキンちゃんがいる。キンちゃんは私のことを理解してくれる。本当

の私に、いつも昔通り、普通に接してくれる。だからいいの。他には何もいらないの」

白雪……

白雪。

お前。

それじゃあまるで……あの頃と同じじゃないかよ。

こんなに星伽神社から離れてるのに——お前、まだ、かごのとおり、なのかよ。

夜、シャワーから出た俺は体を拭き、ズボンをはくと、バスルームの電気を消す。

上半身ハダカのまま……時計を見る。

もう10時だ。

そういえば、アリアはまだ帰ってきてないな。

諜報科に行くとかメールが来てたから、またどうせ魔剣の情報を探してるんだろう。

白雪のボディガードを始めてから朝練はできなくなったのだが、そのかわりアリアは『これからは奇襲するから』などと宣言して本当にちよくちよく奇襲してくる。

俺は白刃取りなんか当然できないから、タンコブが増える一方だ。

などと考えながら、頭をバスタオルで拭いていると——

ばたばたつ。

と、廊下を走ってくるスリッパの音が聞こえた。
何やら慌てた足取りだ。

「？」

何だ？

と、脱衣所のカーテンの方を向くと――

「――キンちゃん!? どうしたの!？」

しゃあっ！

脱衣所のカーテンが――全開されてしまった！

開けたのは、巫女装束みこしやうぞくの白雪。

どういいうわけか血相を変え、つぶらなお目々をまん丸に見開いている。

「は、はっ!？」

俺は面食らって後ずさる。

……っというか、これっ。

このシチュエーション。

普通なら——いや、何が普通なのかは分からないが——男と女が、逆じゃないか!? などとワケの分からない分析をしてしまうぐらい、俺はおれ一瞬でテンパってしまった。

「な、なんだよ急にっ!」

「えっ、だ、だって、キンちゃんが……で、電話」

「——電話?」

「す、すぐ来いって言って、急に、切っちゃったからっ」

「電話なんかかけてねーよ!」

「確かにキンちゃんだったよっ、非通知だったけど——『バスルームにいる!』って!」
ありえん。

幻聴だろうそれは。

「シャワー浴びながら電話がかけられっか!　なんでそんなヘンなことが起きる!」

「で、でも、で、でん、でんでん——!」

白雪は俺が上半身裸なことをようやく認識したらしく、俺の顔から鎖骨、胸、ヘソ……と視線を下げていきつつ、蒼白そうはくだったその顔を下から上へ、何かのメーターが上がるかのように赤く染めていった。

そして、ひゅうっ。

過呼吸?　ってカンジに、大おーきく息を吸い込んだ。

「うっ！」

ご？

「ごめんなさいっ!!」

びょん！

どういう跳躍法なのか想像もつかない珍妙な飛び方で、白雪は斜め後ろに跳ねた。

そして、空中で正座の姿勢になったかと思うと、ひはかま 緋袴と袖をそでばふうと広げつつ、着地と

同時に——べたあー！

土下座した。

「ごごごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

きゆううう、と体を縮め、頭から湯気を出しそうな勢いで耳まで真っ赤にしてる。

がば、と顔を上げた白雪は興奮のあまり、目を渦巻きみたいにさせていた。

「——キンちゃんがオフロだから！ ハダカだから、それを想像してたのは事実です！
き、鬼道術きどうじゆつの練習してたのに、全然手につかなかったのも事実ですっ！」

「き、聞いてねえよそんなこと！」

「でも想像が、したら、それがぶあっぶあのふいで！ お、お許してください！ 白雪は、

白雪は悪い子です！ 良い子のフリをしてるだけの、本当は——いけない空想してる、

いけない子なんです！ 猫を十匹ぐらいかぶってます！ みノふすぎい……# \$ % & !」

やばい。

「お、おい……」

このままだとどこかがプツツンと切れて、元々ちよつとおかしい白雪しらゆきが本気でおかしくなりかねん。

俺おれはとりあえず白雪の前に片膝かたひざをついた。

「ほ、ほら。いいから。マチガイ電話か何かだろ。そんなに謝あやまることも何でもない」と、努つとめて穏やかに言つてやるが……

上半身ハダカのまま、うかつに近づいたのがマチガイだったらしい。

白雪は——ばしい。

両手で思いつきり、自分の両目を覆おおつて隠した。

……指と指の間から、俺の胸板を見てるような気もするが……
そして、

「おあいこ！」

急にまた方向性の分からないことを絶叫しやがった。

両手を顔から外した白雪は、かあーっ、と発熱したかのように真っ赤になっている。ていうかなんか、ホントに暑くなってきたぞ。お前はストーブか。

「おあいこって。何がおあいこなんだ」

と聞くと……

白雪のトンチキな思考回路が、トンチキな演算結果を発表した。

「キンちゃんも私のお着替えを見れば、公平になるんだもん！」

「——はっ!？」

ぐい！ と右手で己のしろこそで白小袖の胸元をつかみ。

しゅら！ と、左手でひはかま緋袴の帯を解き。

白雪は一刻も早くハダカにならなければなりませんといった調子で——

みこしようぞく巫女装束を、脱ぎ始めやがった！

「ま、待て！ それはちつとも公平とかそういうことじゃねえ！ 脱ぐな！」

とつさに、俺は白雪の服を押さえる。

「脱ぐ脱ぐ脱ぐうー！ 平気なの！ キンちゃん様になら見られても平気なの！ むしろ

平気なの！ だから安心してくださいーっ！」

ぬっ、脱がせてなるものか！

例の勝負下着とやらを露わにされた日には、こっちはヒステリアモード確定なんだよ！

と、俺は白雪の襟えりやら袴おきやらを必死に抑える。

「キンちゃんやめて、放して！」

と白雪。

「おとなしくしろ！」

と俺^{おれ}。

「ただいまー」

とアリア。

……

……

……アリア……？

がさつ。

最低最悪のタイミングで帰ってきたアリアが玄関で落つこととした紙袋から……

松本屋^{まつもとや}のももまんが1個^{ひとつ}転げ出て、ころころーん。

俺ともみ合う白雪^{しらゆき}の、白足袋^{しろたび}をはいた足にぽよんとぶつかった。

第三者の出現に、白雪は、あわ、と巫女装束^{みこしやうぞく}を直す。

——その黒い瞳^{ひとみ}は涙で潤^{うる}んでおり、着衣は乱れている。

——んでその服を思いつきり掴^{つか}んでいる俺は、上半身ハダカで。

——さらにさっきの会話。『キンちゃんやめてー』『おとなしくしろ！』

「……こ……こんのおお……」

がる……るるる……と、ライオンがうなるような、アリアの声。



わしゃ。

そのスカートの側面に突っ込まれる、ちっこい両手。

「バカキンジいいいい——!!」

バスバスッ!!

漆黒と白銀のガバメントが、問答無用で45ACP弾をブツ放してきた!

「うおっ!」

足元に命中した弾に、俺は飛び上がる。

ちょー! ちよっと待て!

こっちは防弾制服どころか、ハダカなんだぞ!

「——ちょ、ちょ、ちよっと任せたらこれ!? こ、この! 強^{きようわい}猥^ま魔! 死ね!」

バッ! バリッ! バリリッ! バリッ!

アリアは怒りの叫びと同じリズムで、俺の足元を撃ちまくる。

「ま! 待て! 話せば分かる!」

つま先近くの床を撃たれ、俺は後退、後退、後退——!

「あんたは! ほんとに! ケ、ケダモノ! ウジ虫! バクテリア!」

バスッ! バスッ! バスバスッ!

アリアは二丁拳銃^{けんじゆう}を撃ちつつ、だん! だん! と靴を鳴らして前進してくる。

俺はとうとう、ベランダに追い詰められた。

も——もう後ろがない！

眼下は東京湾だ。

「あ、あああ、あたしに強^{きやうわい}猿^いした挙げ^あげ句^く——今度は白雪^{しらゆき}!? こ、この、どヘンタイ！」
じゃきじゃき！ とアリアは二丁拳銃をとうとう俺本体に向けた。
ど、どうするキンジ!?

防弾物置に逃げ込んでも、物置ごとベランダからぶん投げられるぞ！

「ちっ、違うのアリア！ 負けおしみはもうやめて！」

白雪に妙なことを叫ばれ、アリアはピンクの眉^{まゆ}を寄せて振り返る。

「な、な、何であたしが負けおしみのよ！」

犬^{けん}歯^しをむいたアリアに白雪は、

「あれはキンちゃんがムリやりしてたんじゃないの！ 合意の上だったんだよ！」

「ご、合意——？」

「そうなの、あれは私が自分から脱^{だつ}ごうとしてたの！ だからキンちゃんは悪くない！」

「ぬ、脱^{だつ}ぐって、あ、あああ、あんたら一体なにしようとしてたのよ！」

と慌^{あわ}てるアリアの手から、白雪が「えいっ！」と拳銃を奪い取りにかかる。

い、言^{はな}つてゐることは甚^{はな}だしくアレだが、いいぞ白雪！ がんばれ！

「つて、いうか——た、たたたとえ合意の上であつたとしてもオーっ!!」
 ぽふぽふぷっ! と一氣に赤くなつたアリアは白雪の懷しらゆき ふところ もぐに潜り込むと、ずだんっ!
 一本!

というカンジに、跳ね腰みたいな投げ技で白雪を床にひっくり返した。

「きゃんっ!」

「キンジ! そ、そそ、それはボディーガードの禁止事項よ!」

犬齒けんしをむいて叫んだアリアが、白雪を踏み越えてくる。

「な、仲良しぐらいならまだ大目に見るけど! く、依頼人クライアントと、そ、そ、そういう関係になるなんて——武偵失格! 失格! 大失格う——っ!!」

アリアは窓ガラスを破壊しかねんキンキン声を上げて、

「風穴まつり!」

バリバリバリリリッ!

情け無用の二丁拳銃けんじゆうで、俺おれを撃つてきた!

「——っ!」

俺は男子寮のベランダから飛び降り、ベルトのワイヤーを使って、スパイダーマンみたいに手すりからぶら下がった。

か、間一髪だったな。

と思つたら、

「アタマ冷やしてきなさいっ！ 浮き輪はあげない！」

ばぎゅんっ！ チュインッ！

叫び声と共にベランダから放たれたアリアの銃弾にワイヤーが切断され、俺は落下防止柵にがしんと落っこちて、バウンドし、ざぶん。

気がついたら、その斜め下の東京湾に落っこちていた。

ボディーガードは――

依頼人と、深い関係になつてはいけない。

これは確かに基本中の基本で、強襲科アサルトの教科書にも書いてある。

依頼人となあなあになつてしまうと警戒が緩ゆるんだり、イザという時に冷静な判断ができなくなつてしまうからだ。

だが今回の任務は教務科の過保護から始まつた、言うなればボディーガードごっこみたいなもんだ。

魔剣という名前に目の色を変えたアリアだけが躍起やつきになつてゐるわけで、パートナーの俺はマジメにやれと怒られていい迷惑だよ。

元々ちよつと疲労がたまっていた上、シャワーの後にハダカで白雪しらゆきともみ合つた挙げ句、東京湾に落とされた俺は……

カゼをひいてしまった。

朝、クラクラしつつ体温計をくわえる俺にアリアは「だらしないっ」とおかんむりだったが……それ以上、いつものように手を出してきたりはしなかった。

白雪はものすごい勢いで俺を看病したが、り自分も学校を休みますとまで言ってきたが、それはさすがに悪いのでなんとか登校させてある。

で、その後、俺はベッドの上でひたすら手持ちぶさたな時を過ごしていた。

熱は、38度前後を行ったり来たりしてる。

そんなに辛い時もあるが、今はちよつときついな。

おそらくウイルス軍の最後の抵抗と思われる高熱に、意識が朦朧もうろうとする。

そして……

昼休みぐらいの、時間帯だろうか。

誰かが、家に入ってきた。

俺の様子を見に来たらしい……ってことは、白雪だな。

声を出すのもダルかった俺は、そのまま……寝に戻る。

ガンガンと痛む額ひたいに……

そつと熱を計る、誰かの手が当てられたような気が……した。
優しい、手、だった。

目が覚めると——午後2時。

体温計はまだ38度台を示していたが、体調は、熱に慣れたのか少しマシになっている。

「……」

ふら、と、誰の気配もしない室内で起き上がる。

ノドが乾いている。汗をかいたせいだろう。

水を飲もうと思った俺は、ふら……ふら。

寝室から出て、そのドアを閉めようとして……がさ。

ドアの取っ手に引っかかっていた、ビニール袋に触れた。

「？」

探さぐてみると、中身は大和化薬やまとかやく『特濃葛根湯とくのうかつこんとう』。

かなり古風なパッケージのそれは、薬があまり効かない体質の俺に唯一めざましい効果のあるカゼ薬である。

——白雪、か。

あいつは本当に、俺のことを何でもよく知ってるな。

でも俺、この薬のこと……あいつに話したことあったわけ？
まあいいか。

さすが特濃葛根湯。

おかげで次に目を覚ました時には、平熱に戻っていた。

時刻はもう夕方、居間に出るとちょうど帰ってきたところらしい白雪と出くわす。

「あっキンちゃん。カゼ、大丈夫？」

「ああ。熱も下がったし頭痛も取れたよ」

「よかったあ……よかったよ……ぐす……ひんっ……」

「だから何でもすぐ泣くなって」

「はい」

白雪は指で涙を拭くと、嬉しさいっぱい、という顔を上げてくる。

「……お前がくれた『特濃葛根湯』のおかげだ。飲んで寝たら、一発で治った」

「えっ？ 私……キンちゃんお薬キライだから、薬膳作ろうと思ってただけど……」

「ん？ あれ、お前がくれたんだろ？ 悪かったな。あの薬、アメ横の妙に入り組んだ角のキタナイ漢方薬の店でないと売ってないからさ。女の子が1人で入るの、ちよっと怖かったろ。ありがとうな」

「え……あつ」

と、白雪はその白くて細い指を口にあて……

何か……考えるような顔をし……

「……う、うん」

と。

ちよつと俺から目を逸らしつつ、言った。

体育館みたいな強襲^{アサルト}科施設の中で、いま俺は似合わないエレキギターを提^さげている。

今日はアドシアード閉会式の下稽古^{したげいこ}ということで、アリアに強制入隊させられたアルII

カタ音楽隊員こと俺も借り物のDC59^{インジャン}で軽音の練習をしているのだ。

「I'd like to thank the person…」

ボーカルは俺じゃないが、小声で歌いながら担当のイントロ・パートを繰り返す。

ギターは神奈川^{かながわ}武偵^{ぶてい}高付^{たけ}属中にいたころ変装^{マサス}潜入^{ケン}入の授業で少し習ったし、2分ちよいの

短い曲だし、もう1人のギター兼ボーカルの不知火^{しらぬい}が巧^{うま}いから、練習はそんなに大変じゃないんだが……

なんか違和感があるな、強襲^{アサルト}科の施設が平和利用されている光景は。悲しい事だが。

誰^{だれ}にいいところを見せたいのかノリノリでドラムを叩^{たた}く武藤^{むとう}の向こうでは、アリアたち

ポンポンを持った女子がチアのダンスを練習している。

ぴっぴっぴ。ぴっぴっぴ。

軽快な踊りに、ひらひら揺れる短いスカート。

くそっ。

どいつもこいつも、あんなカッコしやがって。

武藤は年に一度の眼福だとか言ってたが、俺にとっちゃ恐ろしい光景だよ。

何かを間違えてヒステリアモードになったらどうするってんだ。

視線は自分の手元に集中させとこう。

「はい、じゃあ今日はここまでにしますねー。お疲れ様でしたー」

先生みたいな言い方で監督の白雪が一同に言くと、女子たちははいなんて言いながら散らばっていった。

一安心した俺は何だか女ぐさいこの空間がイヤで……ギターを片付け、階段を上がり、屋上に出ることにする。

——天気は見事な五月晴れ。

暖かい陽射し。

これは絶好の昼寝日和だな。

そう思った俺は、ごろん。仰向けになった。

すーっ、と爽やかな春風を深呼吸する。

ああ……いい気分だ。

……五月の風は、値千金だな。

などと、ゴロ寝を満喫していたら——ふわ。

風に何だか甘酸っぱい、クチナシの花のような、いい香りが混ざってきた。
「？」

と思って薄目を開けると——

ぐしゃ！

天国から地獄へ。

俺の顔面に、白いスニーカーが落ちてきた。

「ぐっ!？」

がつし！ ぽかつ！

今度は連続して蹴ってくるちっこいスニーカーから、頭をなんとか躲す。
だんっ！

「なにサボってんのよ！ちゃんと白雪をガードしなさいこのボンコツ！」
俺の耳の脇にストンピングを落としたのは、チアガール姿のARIAだった。
ポンポンを持った両手を腰に当て、ぷりぷりと怒っている。

「あ、アリアっ？」

こんな所まで追ってきやがつてっ。

抗議の目線を送りながらの俺が、上半身を起こすと――

「――んっ！」

ぶうんっ。

アリアはチアとは明らかに異なる動作で、右脚を天高く、自分の頭上まで振り上げた。ぎら、と、太陽をその足がかすめる。

――ハッ、と俺は気付く。

これ、コイツ、俺に白刃取りをさせようとしてる――蹴り足を！

それに気付いた俺は、振り下ろされたカカト落としをキャッチしてやろうとするが――パシッ。

ごすっ！

俺の両手はアリアのスネの上空で情けなく柏手を打ち……

21センチのミニあんよのカカトが、俺の脳天を直撃するのであった。

……どてッ……

と、俺は再び尻モチをついてしまう。

もう……カンベンしてくださいよアリアさん。

蹴られたり殴られたりは強襲科の徒手打撃戦で慣れっこだが、こうも何度も入れられるとさすがに効くんだよ。

アリアはそんな俺の傍らで偽装胸を張ると、

「もうっ。白刃取り、いっぺんぐらいは成功させなさいよねっ！ 遊びじゃないのよ!?」
がお！ と犬歯をむいて見下ろしてきた。

「あ……あのなあ……」

俺は蹴られた頭を片手で抑えながら立ち上がる。

「……お前、パートナーなら相方のコンディションの事も少しは考えてくれよ。たまには休ませろ。俺は病み上がりなんだ。どっかのバカにベランダから、冷たくて、汚い、夜の東京湾に突き落とされたからなっ？」

と、クドめに嫌味を言つてやるとアリアは、

「そっ……それは悪かったわよ。あたしも、ちよつとやりすぎたかもって思ったから……」
紅い目を逸らしつつ、おい、とちよつとソツポを向いた。

その仕草が可愛かったので、俺も……

一応、フオローを入れておいてやろうかという気分になる。

「まあ、カゼのことはもういい。白雪がくれた『特濃葛根湯』のおかげで治ったからな」
「え」

俺の言葉に、アリアは急にこっちに向き直る。

見れば、その大きなお目々を驚きでまん丸にしている。
なんだ。

別に驚くことじゃないだろう。今のは。

「あ、あれは、あたし……」

何かごによごによ言ったので、「？」と眉を寄せてハッキリ言えと促す。

だがアリアは、わぐ、わぐ、と何かを言おうとして言わないでいる。

「……何だよ。あれはマイナーな薬だけど俺には効くんだよ。確かお前にも、このあいだ話したろ。白雪がなんでか知ってて、それを買ってきてくれたんだ」

一応説明してやると、アリアは……ちよっと口を尖らせて、

「……白雪がそう言ってたの？」

と、なぜか聞いてくる。

「ん？ ああ」

「……」

……

なんだ。

なんでそこで黙る。

「ま、まあ治ったんならいいわ。あたしは貴族だし、そういうことはガマンする」
「？」

今の話の中に、何かアリアがガマンするような点があったのか？
全くもってワケが分からん。

「貴族は自分の手柄を自慢しない。それは無様ぶざまなことだから。たとえ横取りされてもね」
「なんだよ。言いたいことあるんならハッキリ言えよ。お前らしくもない」

「なによ！ いいじゃない！ 言いたくないことは言わないの！」
「べー！ と、アリアはちっこいベロを出してきた。」

「よかったわね白雪に看病してもらって！ 白雪、白雪、あんたにいいことをしてくれるのはいつも白雪！ もうあんた、白雪と結婚しちゃえば!？」

アリアは犬歯けんしをキバっぽく剥むいて、いつもの3割増しの大声で俺に詰め寄ってくる。
なんだこの急激なヒートアップ。

明らかに俺の何かの発言が引き金だったっぽいけど、どれがそれだったのか分からない。

「お、おい！ なに急にキレてんだよっ！」

「うるさい！ キレてなんかない！」

「キレてるだろ！」

「あんたこそ！」

顔と顔がくつつきそうなぐらいに接近したアリアと俺は、ぐぬぬうー。
睨み合った。

身長差が30センチ近くあるので、アリアは俺を睨み上げ、俺はアリアを睨み下ろすような形になる。

ぐぬぬぬう——。

理不尽なキレ方をしたアリアに、俺も頭に血が上ってくる。

思い返してみれば腹の立つことばかりだ。最近のコイツには。

家は要塞化されるわ、白雪は連れてくるわ、それに今のこれにもな！

「この際だから言わせてもらうけどな、パートナーの方針だから付き合ってやってたけど

——真剣白刃取りの訓練なんて、もうやめだ！ あんなもん、達人技だろ！ そう易々と

できるもんじゃねーんだよ！」

「だめよ！ 続けるわ！ ウワサでは魔剣は鋼をも斬る剣を持つてると言われてる、だ

としたらナイフやジュラルミンの大盾でも防御できない！ 白羽取りの訓練は、今こそ重

要な意味を持つのよ！ いざ白雪が襲われた時、あんたを覚醒させて——」

「いざ、って、ここ数日白雪に張りついてたけど何も危ないことなんか無かっただろ！

こうなりやもういっぺん言ってやる！ 敵なんて、魔剣なんて、いねえんだよ！」

俺の言葉に、アリアはその紅い眼を見開く。

「お前が一刻も早く母親——かなえさんを助けたいのは分かってる。でもな、今のお前は
 そのために平常心を失ってんだよ！ 敵の一員かもしれない『魔剣』^{デュランデル}って名前を聞いた時、
 お前はその敵を『いてほしい』って思っちゃったんだ。それでいつの間にか、自己暗示つ
 てやつで、『いる』^{おちい}ような錯覚に陥ってんだよ！」

「——ちがうっ！」

びしっ、と片方のポンポンを俺に向けてアリアが犬歯^{けんし}をむく。

「魔剣^{デュランデル}は、いる！ あたしのカンでは、もう近くまで迫ってるわ！」

「そういうのを妄想^{まうそう}つつーんだよ！ 白雪は絶対大丈夫だから、どっかいけ！ アドシア
 ード終了まで、あとは俺が1人で白雪のボディーガードをやってやる！」

「なによそれ！ ——あつたまきた！」

アリアが、俺の顔の下で赤くなりながら怒鳴った。

「そうよねそうよね！ あたしはあんたたちにとつてジャマな、妄想女なんだもんね！
 依頼人とボディーガードのくせに！ ふ、ふ、服を脱がし合ったり……サイッター！」

「そ……その事だつてそうだ！ お前は何でも思い込みの独断で事を進めすぎなんだよ！
 ちよつといい家に生まれたからって、いい気になんない！ お前は天才かもしれねーけどな、
 世の中は俺たち凡人が動かしてんだ！ お前はズレてんだよ！」

カツとなった俺が怒鳴ると——

アリアは、ぐさつ……と、予想以上に傷ついたような顔をした。
反論、してこない。

それどころか……

とた、と、俺おれから1歩退しりぞいた。

2歩、3歩。

アリアらしくない力弱さで、離れていく。

「あんたも……そうなんだ。そういうこと言うんだ」

小さくなったそのアニメ声は、わなわなと震えていた。

その静かな声からは、逆に、アリアがいつも以上に――

本当に、心底、怒っているのが伝わってくる。

「みんな、あたしのことを分かってなんかくれないんだ。みんながあたしのことを、先走りの、独り決めの、弾丸娘――ホームズ家の欠陥品って呼ぶ。あんたも――そう！」

アリアは顔を伏せると、俺――と、誰だれにともなく叫んだ。

まるで、世の中の人間全員に向けて叫ぶかのように。

「あたしには分かるのよ！ 白雪しらゆきに、敵が迫っていることが！ でも、でも、それをうまく説明できない！ 偉大なシャーロック・ホームズ曾お爺ひいさまみたいに、誰にでも分かるように、状況を論理的に説明することができない！ だからみんな、あたしを信じてくれな

くて——あたしはいつも独唱曲で——でも、でも、直感で分かるのよ！　こんなにあたしが言ってるのに、どうして！　どうしてあんたは信じてくれないのよ！」

アリアは涙目になってチアのポンポンを地面に投げつけ、子供みたいにわめいた。

……ここで、優しい言葉の1つでもかけてやればよかったんだろう。

だが俺はアリアとの口ゲンカで興奮しきっていた。

素直になれなかった。

そしてつい、

「……ああ、分かんねえよ！　いもしない敵が迫ってるなんて、信じられるか！　主張があるなら証拠を出せ！　それが武偵だ！　何度でも言ってる！　敵なんかいねえ！」

と——

アリアに追い打ちをかけるようなことを——

言ってしまった。

「——この——この、どバカ！　バカバカバカバカバカ——ツ!!」

アリアは俺が自分の思い通りにならないことに、今度こそ完全にブチ切れ——

真っ赤になって、二丁拳銃けんじゅうを、抜いた！

「ちよっ……!!」

と、待て！　と俺が言うより先に、

ばきゅばきゅばきゅばきゅきゅ!!

俺おれの体の周囲スレスレに、無数の銃弾がバラ撒まかれる。

あまりの急襲に身をかがめた俺めがけて、たったった、むぎゅ!

「キンジのバカ! バカの金メダル! ノーベルどバカ賞ー!!」

顔を踏みつつ俺をブチ倒したアリアは、再装填さいそうてんしつつの拳銃けんじゆうをさらに妙な方向へ撃ちまくり、そのまま階段へと走り去ってしまった。

また大の字にぶっ倒されてしまった俺は……

自分の背後、貯水タンクからじよばーと水が出ているのを逆さまの視点で仰あおぎ見る。タンクには今の銃撃で無数の穴が空あいていて……

よく見ると穴はちゃんと並んでいて、列———というか文字になっていた。

『バカキンジ』

と書いてある。

おい……

どーすんだよあれ。消すに消せねーぞ。

ていうかなんて腕だ。

お前こそ、アドシアーダなら拳銃バカの金メダルだろ。

その後、自分の部屋に戻った俺は……少し冷静になって……アリアが帰ってきたらそれとなく謝^{あやま}ってやるか、などと思いいアリアを待ってみた。

だが、いつまでたっても帰ってこない。

俺が言った通り、本当にどこかへ行ってしまったのだろうか。

夜になっても帰ってこないの、一応、白雪^{しらゆき}に事情を説明しておく——

「じゃあ、これからはキンちゃんが1人でボディガードをしてくれるの？」

白雪は、逆に喜んだ。

「ああ。まあ、そういうことになるな」

買い直したソファに身を沈めて、俺は装備^{アムド}科のクラスメイトに改造してもらいたてのベレッタM92Fをプラモデルみたいに通常分解してメンテしていた。

アリアがいない。

それだけで、この拳銃さえもなぜか——非力に見える。

「アドシード終了まで、俺がお前をボディガードするよ。教務科とアリアがムリヤリ始めちゃった事だけど……まあ、約束だからな」

と言うと、白雪は俺の『約束』という言葉に感動したような顔になる。

「キンちゃんが、私を守ってくれる、約束……」

かみしめるように言った白雪は、少し顔をうつむかせて「うれしい……」と、続けた。

「お前……不安じゃないのか。Eランク武偵^{ぶてい}なんかボディーガードで。まあ、ないとは思うが、万が一『魔剣^{マケン}』が実在^{じざい}してて、襲^{おそ}ってきたりしたら——」

念を押すように俺^{われ}が言^いうと、白雪^{しらゆき}はふるふると首を横に振った。

「不安なんて、はじめっから感じてないよ」

「……」

「だって、私にはキンちゃんがついてるから。キンちゃんは本当は強い人だもん。誰^{だれ}にも負けない人なんだもん。私、信じてるから。キンちゃん、それじゃあ改めて私を……守^{まも}ってくださいね」

「あ……ああ」

ちよつと冗談めかした敬語で言う白雪と、反射的に答える俺。

白雪の声は、冗談でもお世辞でもなく、心の底から俺を信頼している声だった。

そう。白雪にからんでいたヤツらを俺がブチのめした、あの入試の日から——白雪はいつだって、俺に100%の信頼を置いている。

だが、信頼されているのは通常モードの俺じゃない。

ヒステリアモードだった、あの時の俺だ。

もし——

万が一。

魔剣^{デユラシタル}、が、実在^デしている。

億^ギが一。

諜報科^{レサド}やS研や……アリアが言う通り、白雪が、狙^{ねら}われていて。

兆^ギが一。

何か、あったら。

俺は……白雪を守るのか？

俺を信じて安心しきっている、その信頼に^{こた}応えられるのか？

……ムリだろうな。

……でも……まあ、気に病^やむことはない。

今まで何日張りついていても、白雪の周囲に危険の兆候はなかった。これから大丈夫だろう。そうさ。そうに違いない。

と、俺は整備を終えたベレッタをテーブルの上に置いた。

「キ、キンちゃんさま」

俺の作業が終わるのを待ってたらしい白雪が……例の妙な呼び方をしつつ、おもむろにこっちに向き直る。

「なんだ」

「じゃあ、ゴールデンウィークもジャマも……じゃない、アリア抜きだね」

「ああ……そうだな。どっか行きたいのか？」

「う、ううん。私はおうちでのんびりお勉強でもするよ」
慌あわてて両手をばたばた振る白雪しらゆき。

「……それじゃあヒキコモリじゃねーか。勉強なんてお前いつもしてんだから。たまにはハネを伸ばさないと後で後悔するぞ？ 『ああ、若い頃ころ遊んでおけば良かった』って」
「で、でも……」

しゅんとなる白雪を見て、俺おれはピンとくる。

「――星伽ほとぎ、か？」

「……」

白雪は否定しなかった。

神社や学校から出ることを許されない……
かごのとおり。

その言葉が頭に浮かんだ俺は、元々ARIAとのケンカでクサクサしていたこともあり、イラッときてソファアを立つ。

そして、どかつ、とPCの前に陣取った。

俺に背を向けられた白雪は、それだけで慌てた様子になる。

「き、キンちゃんごめんね。ごめんね。でも、私……」

なんで俺がヘソを曲げたのかも分からず、とにかく条件反射的に謝^{あやま}ってくる。

そんな白雪には何も答えず、俺はカチカチッ……と東京ウォーカーを検索し――
ウィーン……

急に動き出したプリンターに白雪は一瞬びりつつ、出てきた紙を取った。
そして、ちゃんと上下を俺が見やすいように向け直して差し出してくる。

「はいどうぞ……キンちゃん。急に、どうしたの？」

「ちがう。それはお前用だ」

「？」

白雪はキョトンとして、紙を自分に向け直した。

「……5月5日、東京ウォルトランド・花火大会……一足お先に浴衣^{ゆかた}でスター・イリユー
ジョンを見にいこう……？」

と読み上げた白雪が、「？」と俺の方を向く。

「行け」

「えっ！」

「そんな驚くことじゃないだろ」

「だ、だめだよ、こんなに人が沢山^{たくさん}いるところ……私……」

「心配するな。ウォルトランドには入らなくていい。少し遠くなるが、葛西臨海公園^{かさい}から

見ればいいだろ。1日ぐらい、外出のトレーニングだと思って学校から出てみる」
外出にトレーニングが必要というのもおかしい話だが、おかしい子なんだからしょうがない。

「で、でも……私……」

思った通り流る白雪に、俺は立ち上がってポンと肩を叩いてやる。

「……俺もついてってやるよ。ボディーガードとしてな」

「キ……キンちゃんも、一緒に……?」

「ああ。一応それ、アドシールド前だしな」

なんでか急に目をキラキラさせ始めた白雪にダメ押しで言うと。

白雪は——こくり。

ぱっつん前髪を揺らして、うなずくのだった。

4弾 人工なぎさ

強襲科でのケンカの後、アリアは雲隠れしてしまっていたが――

まあだいたい行き先は予想できた通り、レキの部屋に仮住まいしていた。

ので、ゴールドデンウィーク中も白雪のボディガードはちゃんとできている、と、ファミレスでレキに報告しようと思ったのだが……

スマートな狙撃銃^{そげきじゅう}を背負ってやってきたレキは相変わらずの無口・無表情で、人の話を聞いているのかいないのか分からないいつものレキだった。

なので、内容が把握できてるのかいちいち確認しながら話すのにやたら時間がかかる。一応、だいたい全部話し終えた辺りで壁の時計を見ると……

「あ」

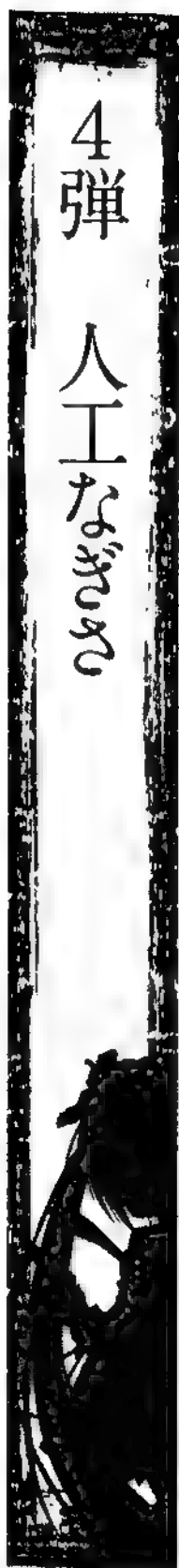
もう8時近い。

今日は確か、白雪と花火を見に行く約束をしてた日だ。

ていうか、7時に待ち合わせしてたハズだぞ。マズいな。

置物のように席についていたレキが、俺の様子に「？」という目をする。

「今夜は白……いや、ちよっと予定がある。帰らせてもらうぞ」



有無を言わず席を立つが、レキは特に文句も言わず、俺われに視線すらよこさない。結局1滴も飲まなかったストレートティーを前に……誰だれもいない前方を、人形のように見つめている。

「……………」

「……俺は、か・え・る・ぞ。いいな？」

念押しのためそう言うと、レキは、こくり。

無言のまま、あだ名の通りロボットっぽい動きでうなずいた。

そういえばレキには、まあ見て分かる通り友達はいないのだが、一部男子に熱狂的なファンがいるという。その物好きどもはレキを『レキ様』などと呼んで神様扱いしてるとか。

まあ……ロボットにせよ神にせよ、たしかに人間味のない子だよ。

と、背を向けた俺に――

「予定とは、外出ですか」

抑揚のない声で、唐突にレキが聞いてきた。

「だったら何だ」

「気をつけてください。ここ数日は、風に――何か邪よこしまなものが混ざっている」

なんだそりゃ。

頼むから人間語で喋しゃべってくれよ神様。

「うちの高校そのものが邪よこしまだろ」

言い捨てると俺は、例のでかいヘッドホンをかけ直しているレキを放置して会計を済ませ、ファミレスを出た。

白雪しらゆきに電話しておこうかとも思ったが……もう、直接帰った方が早いカンジだな。

白雪が怒ってたら、なんて謝あやまろうか。

自分で誘っておきながら大遅刻してしまった俺は、そつとりビングをのぞき込み……そこにいた白雪の姿に、目を見張った。

白雪は……どこで手に入れたのか、浴衣ゆかたを着ていたのだ。

柄がらは、清楚せいそな白地に撫子なでしこの花雪輪。鵲色ときいろの帯は高さも形も完璧かんぺきに——おそらく、自分で

——ちゃんと着付けてある。

珍しくアップに結った黒髪は、こちらで撫子そろで揃えた花かんざしで留とめてあった。

アリアは一言で言えば「かわいい」。

が、白雪は——「きれい」だ。

いや、それは知っていたし、武偵高ぶていこうの誰もが知ってることだ。白雪は国民的美少女コンテストとやらに出したって余裕で優勝できるような、美人なんだ。本当は。

だが、幼なじみの俺は、いつの間にかそこに意識が行かなくなっていた。

こうやって改めてガラリと雰^{ふん}囲^{いき}気を変えられると……その美貌^{びぼう}を再認識させられるな。
気^き恥^ぢずかしいことだが。

白雪^{しらゆき}は充電器に挿^さした携帯の前でお行儀良く床に正座し、こっちに背を向けている。
俺^{おれ}からの電話を待ってるんだろう。

窓に姿が映っているので、一応顔も見えているのだが……向こうはこっちに、まだ気付いていないらしい。

——ちよつと、イジリたくなってきたな。

「……」

俺は携帯を取り出すと、廊下から……ぴぴ、とメールを送ってみた。

『すまん、あと30分遅れる』

ぴか。

白いケータイが光ると、ぱっ！ 白雪は目にも止まらぬ速さでそれを取り、両手で目の前に持っていったメールを読む。

そして、かちかちかち、といそいそ返事を打った。

先手を打ってマナーモードにしていた俺は、返ってきたメールを読む。

『うんいいよ。待ってるから』

文末に笑顔の絵文字までつけてきやがった。

少しは怒ってもいいだろうに。

と思った俺は……

『やっぱ3時間遅れる。今日はやめにすつか』

と、試しに送ってみた。

すると白雪は充電器に挿しかけた携帯をまた開いてメールを読み、ガーン。
この世の終わりみたいな顔になった。

ぷぷぷ。

俺はここにいるのに。

『この世の終わりみたいな顔すんな』

と送ったら、「……」と、今度は目をぱちくりさせてる。

白雪遠隔操作。

おもしれーな。

さすがにちよつと罪悪感も感じてきたので、

「ほら、行くぞ」

と苦笑にがわらいしつつ声を掛けてやると、

「ひゃあ！」

白雪は正座したまま20センチぐらいジャンプした。

どうやったんだろうな。

「キ、キ、キンちゃん!? もおーひどいよ! 私をそこから見て笑ってたの!」
頬を赤くして立ち上がった白雪は、つやつやした前髪を揺らし――

そそ、と俺に歩み寄ろうとして、緊張してるのか、何もないところでつまずいた。

「きゃ」

「きゃじゃねーだろ。……あー、っていうかごめんな、遅れて」

「う、ううん! いいの! ぜんぜん遅れてないよ!」

ぱたぱたと手を振って笑顔になる白雪。

明らかに遅れていたんだが……まあ、待たされた方がそう言うんだからいいか。

俺と目が合うと、白雪は慌てて目を逸らし、あせあせ、と浴衣を手で軽く整えた。

「キ、キンちゃん。どうかなこの服。通販で買ったんだけど……ヘンじゃないかな」

「別に」

「よ、よかったあ……あ……髪は? これ、さつき学園島の美容院で結ってもらってきた

の……へ、ヘンかな?」

「ヘンじゃねーよ」

と答えると、白雪は見てるこっちが恥ずかしくなるほど安堵の表情になった。

なんだかむず痒くなってきた俺は、「そんじゃ行くか」と玄関に戻る。

靴を履いて振り返れば、「はい」と答えた白雪は、しやなりしやなり。

上品な仕草でやってくるのと、おろしたてっぽい女物の桐下駄きりげたをそつと履いた。

その動作は一挙手一投足、完璧かんぺきな日本女性のそれだ。

立てば芍薬しゃくやく、座れば牡丹ぼたん。歩く姿は百合ゆりの花——っていうんだっけ。こういうの。

夜の外出は——

キライじゃない。

アサルトアサルト インケスタインケスタ
強襲科から探偵科に移ったばかりの頃は……なんだか虚むなしくて、夕食を終えたあと何の

目当てもなく夜中に街をうろついたもんだ。

「……涼しいな」

トコトコと俺の少し斜め後ろについてくる白雪に、ちよつと振り返る。

俺の後ろ姿をうつとり見ていたらしい白雪は、

「う、うん」

そそくさと視線を下に逸らした。

——見てたんじゃないんです、いま目が合ったのはたまたまなんです——

と、言い訳するみたいに。

「白雪も、夜たまに散歩したりするか？」

「ううん。私、キンちゃんじゃなきゃ、こんな時間に出歩かないよ」

「そうか」

……。

……………。

なんか、会話が続かないな。

そもそも女子と二人っきりで話すなんてよっぽど理由がない限り避けてきた事だし……米軍の閃光弾せんこうだんがどうの、ドイツの最新ナイフがどうのとうるさく喋りしゃべかけてくるアリアの話話を聞き流すを流すクセがついているせいもあるのか、うまく話せない。

道端の自販機が、俺たちを冷やかすようにチカチカと蛍光灯を点滅させていた。

「あ、あの」

ありがたいことに白雪しらゆきから話しかけてきた。

「何だ」

「こ、これ……その、な、な、なんだか……デ……ト……みたい、だったり……したり、しなかったり……やっぱり、したり……」

「何だ？」

何を言ってるのか、日本語の文法的におかしくて分からないぞ。

「デート……してる、みたい……だね」

「デート？」

喋ってくれたと思ったら、妙なことを言い出した。

これは、しっかり否定しておかないとな。

誤解させて、後々ヒステリアモードに追い込まれるような事態になっても困る。

「これはデートなんかじゃない。外出する依頼人を、ボディーガードが護衛してんだよ。それだけだ」

武偵憲章5条。行動に疾くあれ。武偵は先手必勝を旨とすべし、だ。

「ボディーガード……」

白雪はその整った眉尻をちょっと悲しげに下げてから、

「そ、そうだよ。護衛なんだよね。ヘンなこと言って……ごめんなさい」
と、作り笑いつばい笑顔で謝るのだった。

その後……

俺が遅刻したせいもあり、モノレールの武偵高駅に着いた頃には——もう、遠い花火の音が聞こえ始めていた。

間に合うかな。

白雪はモノレールのキップを買う——つまり武偵高から出ることをまだためらっているようだったから、「じゃあ俺がお前の分も買ってやるよ」と言ったら、

「そんな、キンちゃんに買わせるなんて悪いよつ。自分で買うから」

と、ようやくキップを買うのだった。

聞けば今まで武偵高からは、星伽の使いがよこした車でしか出たことがなかったとか。ていうか電車というものに乗ったことが、覚えてる限り、ないと言う。

……どんだけ箱入りなんだよ。

ただまあ、とりあえず俺は——かごのとりを、かごから出してやることに成功したわけだ。まだ、手の中にそっと入れてやったままだけど。

モノレールで台場へ。ゆりかもめで有明。そこからりんかい線で新木場。最後に京葉線。ほいほいと乗り換えて目的地の葛西臨海公園駅に着くと、白雪はそれだけで俺を尊敬の眼差しで見てくる。

こんな事で尊敬されてもなあ……

と後ろ頭を掻きつつ、俺は白雪を連れて駅から海の方へと歩いた。

ちよつとした森みたいになつて葛西臨海公園に入ると、電柱が点々と海の方へ続いている。いかにも夜の公園といった風情があるな。

俺は一応ボディガードなので周囲を確認するが、夜とはいえここは売店も開いてるし、ぼつぽつと人も見かける。危険はそんなにないだろう。出るとしたらカップル狩りのヤン

キーぐらいだが、あいつらも帯銃している武偵ぶていを襲うほどバカじゃないしな。

「……月がキレイだね」

「そうだな」

まだ見えない花火の音の中、公園の道を海に向けて歩く。

ここを進むと、見晴らしのいい人工なぎさに出るんだ。

「……本当にキレイだね」

「そうだな」

「キンちゃん……その……今、つまらなかったり、しない？」

つぶらな黒い瞳ひとみを不安そうに向けてきた白雪に、首を横に振ってやる。

「別に」

「あの、私……男子とあんまり喋しゃべったことないから、男の子が面白いと感じる話題、知らなくて……ごめんね」

「気にすることねーよ。あとなんでもすぐ謝あやまるな。よくないクセだぞ」

「ご、ごめんなさい」

「だからそれだよ」

「あっ……ごめ……」

反射的に謝る白雪がおかしくて、俺は小さく笑った。

白雪は少しうつむいたが、おかしそうに、うれしそうに、頬を緩めている。相変わらず特に話題は無いわけだが、家を出た頃とは、だいぶ違う空気が流れているな。引き続き海へ向けて歩く中……白雪は、いつものクセで少し顔をうつむかせ、

「夢みたい……」

と、とても幸せそうに小さく呟くのだった。

人工なぎさに出た。

案の定、誰もいない。

ここは文字通り人工の砂浜だが、海水浴や釣り、バーベキューまでもが禁止されているので、人けがないのだ。

ウォルトランドの花火を見るなら、ここが穴場だろうと思ったのだが……

「……終わっちゃったんだな」

東京湾岸のウォルトランド上空に見えるのは、雲みたいな花火のケムリだけだった。ここまで連れ出してきたのに、ばつが悪い。

「……悪い。俺が遅刻したせいだ」

「う、ううん。キンちゃんが悪くないよ。私の足が遅かったからいけないの」

白雪はいつもの白雪理論で俺のことを悪くないと言うが……

その目が、ちよつと淋^{さび}しそうだった。

「それに私、歩いてる時に……昔のこと思い出してたからいいの。音を聞いただけで十分だよ。花火、心の中で見えた」

白雪は俺を慰^{なぐさ}めるように、けなげな笑顔をつくる。

「昔の……こと？」

「ほら、青森の花火大会のこと」

「あ、ああ。俺がお前を連れてって……あとで怒られたあれか」

5歳だったかの時……俺が白雪を神社から強引に連れ出したときのこと。

そういえばあれも、花火がキツカケだったな。

無意識に同じことをしちまつたのか。俺は。

「……あの時も……キンちゃん^{はとき}が、私を屋^はから出してくれた」

そう言う^はと白雪は、さく、と砂を踏んで海の方を向く。

歩きにくい砂浜でも、その姿勢は常に美しい。

夜風に――

結った黒髪が、慎^つましく揺れる。

「あの花火を覚えてるから、いいの。今日も……ほんととちよつと楽しみだったけど……でも、花火があってもなくても、いいの。月夜の海でも、おうちでも、いいの」

言う^{しらゆき}と白雪は、星を背に振り返った。

「キンちゃんが、そばにいるから……」

その笑顔は、本当に、俺^{おれ}のことを心から思っている表情で。

白雪……

俺は……俺なんか……

武偵^{ぶてい}にもなれない、普通の高校生にもなれない、中途半端なヤツで。

遅刻したあげく、お前をリモコン操作して笑い、しかも、花火の一つもちゃんと見せてやれなかったような、そんな男なんだぞ。

なのにお前は、一言も文句を言わない。

怒るところか……心からの笑顔で、俺を許してくれる。

なんでそんなに優しいんだよ。

これじゃあ……

逆に、何かせずにはいられなくなっちまうだろ。

「白雪」

「はい」

俺がちよつと呼ぶように言ったので、白雪はいそいそと近寄ってきた。

「寒くないか。寒いだろ。寒いよな。よし。これを着て少し待ってろ」

俺は上着を脱ぐと、有無を言わず白雪の肩へそれをかける。

「キンちゃん？ キンちゃんは寒くないの？」

「逆に暑くなる予定だからいいんだ。少し走ってくる」

なんだか分からずにいる白雪が、何か言い出す前に――

俺は砂を蹴^{けた}立てて、駅の方へ走り出した。

本当は護衛対象をだだっ広い場所に置いていくのは良くないのだが、まあ、どうせ敵な
んかないんだ。大丈夫だろう。

思った通り――ここは安全で。

ひとつ走りして戻ってくると、白雪は砂浜から少し離れたベンチに座って、俺の上着を
ちゃんと着ておとなしく待っていた。

「白雪。待たせたな」

と呼びかけるが……あれ。

反応がない。

「おい」

と白雪が袖^{そで}を抱きしめるようにしていた俺の制服越しに、肩^たを叩く。
すると白雪は、ハッ――と振り返った。

オニキスのような黒い瞳ひとみに、怯おびえたような色がある。

……なんだよ。

「どうした。なんだ、怖こわかったのか？」

「う、ううん。なんでもない。大丈夫だよ。これがあつたから……平気」
白雪しらゆきは何かをごまかすように、俺おれの制服の袖そでを少し掲かかげた。

「この服、キンちゃんのおいがするから……キンちゃんがそばにいるみたいだった」
俺おれは苦笑にがわらいする。

「俺の服なんだから当たり前だろ。火薬くさくなかったか」

「ううん。いいにおいだよ」

「ヘンなヤツだな。それより、ほら」

言いながら、ぐい。

と、俺は白雪に――

さつき、ギリギリまだ開いていた売店で買ってきた線香花火を差し出した。

「……？」

「花火、やるぞ。大きさは千分の一ぐらいになっちまったけどな」

パチ……パチ。

砂浜にしゃがんで、俺たちは花火をやっている。

白雪だから和風に線香花火がいいだろうと思ったんだが……

ちよつと、地味すぎたな。ちつとも盛り上がらない。

だがそれでも白雪は心底嬉し^{うれ}そうに、カミナリのミニチュアみたいな火を見つめていた。ちよつと垂れ目ぎみの、まつげの長い、優しげな目が——その火でちかちかと照らされて、星明かりの薄闇^{うすやみ}に浮かんで見える。

こうして見ると、やつぱり……美人だよな。

「キンちゃん」

「ん、ん？ 何だ」

「きれいだね、花火」

「……ああ」

パチ……

パチ……

「キンちゃんは……火って、好き？」

火？

なんか漠然とした質問だな。

「こういうのはいいけどな。でかい炎とかは怖いだろ。それが人間の本能だ」

「そ……そうだよ。ね。あつ……」

……ぼと。

しらゆきにがわら白雪の線香花火から、火玉が落ちた。

苦笑いしてこつちを向いた白雪と、目が合つて……

ちよつと俺おれの指先が動いたせいかな、
ぼと。

こつちの火玉も、落ちた。

人工なぎさに打ち寄せる、波の音――

「……終わっちゃったね」

「あと1本あっただろ。お前がやっていいぞ」

と、さつきついでに買ってきた100円ライターを出してやると……

白雪は線香花火のビニール袋を胸に抱くようにして、ふるふると首を横に振った。

「ううん。これはとっておきたいの」

「なんでだよ」

「キンちゃん gave くれた物だから、持っていきたい。燃やしちゃうの、もったいないよ」

「どこに持ってくんだよそんなもん。花火は火いつけるもんだろ」

「でも……」

「記憶の中に永久保存するんだよ」

適当なことを言っていると、白雪は……こくり。

うなずいてから、最後の花火をそっと取り出して……火をつけた。

パチ……パチ。

本当にちゃんと記憶しようとしてるのか、ずいぶん真剣に見つめている。

俺は特にすることもないから、その様子を眺めていた。

「……」

ふと見れば、和服というヤツは色っぽい構造をしていて……

前屈みにしゃがんでいる白雪の——胸元が、かなり広く開いてしまっていた。

パチ……パチ。

線香花火の灯り^{あか}で、その肌が点滅するみたいに照らされている。

(……って……おい……)

いま、すき間から見えてしまった。

コイツ。

なんでか知らないが、また、黒をつけてるぞ。

たしかあの引き出しで、『勝負』に区分けされてたレースの下着だ。この、黒雪^{くろゆき}め。

そ……そういえば武藤^{むとう}が昔言ってたな。

和服とは、世界で一番脱がせやすい服だとかなんとか。

あ——こらキンジ。

余計なことを考えるな。

こんなところでヒスったりしたらどうする。

何か別のことを考えて落ち着くんだ。頭の中で素数を数えたりしろ。2、3、5——

「キンちゃん……本当にありがとう。私、今夜は嬉しくて眠れなさそう」

花火を見つめながらの白雪しらゆきが言ってきたので、俺おれは顔を上げる。

そうだ、会話だ。簡単な方法を忘れていた。何が素数だ。

会話に集中すれば、黒いレースの下着のことから意識を逸そらせるだろう。

「眠れなさそう……って。大げさだな。ただ電車乗って公園ブラブラ……って……」

言葉の選択をいきなりミスった俺がちよつと言いよんだので、白雪はきょとんと首を傾かしげる。

「ぶら？」

「あ、いや。うろついて……だ。それで、花火やっただけだろ。大したことじゃない」

「……でもね。私にとっては特別なこと。奇跡みたいなことだったの」

パチ……

パチ……



線香花火の火は、もうだいぶ小さくなっている。

「キンちゃんはいつも、私に奇跡をくれる人だったんだよ。受験の日だって、ワルモノから助けてくれたし……」

「あれは、その、ちよつとケンカしただけだろ」

「それに子供だった頃も、今夜も、私を……外の世界に出してくれた……だからね、私は……武偵高で、キンちゃんにご恩返しをしたいって思ってたの」

「恩なんてない。ないから、返す必要もないって」

適当に言うと、白雪は——また、あの幸せそうな笑顔になる。

「キンちゃんはやっぱり、キンちゃんだね」

「なんだそれ」

……ぼとり。

最後の火玉が、落ちた。

ジジ……と、砂の上で消えゆく火を2人で見つめる。

白雪はその様子を心に録画するかのよう、1つ、長いまばたきをした。そして、すっ——と、溜息が出そうなほど気品のある物腰で立ち上がる。

俺もそれに合わせて、立った。

さん……

ざざん……

人工なぎさに打ち寄せる、波の音――

「この間、巫女占札でキンちゃんを占った時、ね……」

波打ち際の方を向いた白雪に、か細い声で唐突に言われて……俺は、思い出す。たしか『総運、幸運です』とかって、なおざりに言ってたあれか。

「本当は……キンちゃんは……『いなくなる』、って出たの」

「……いなく……なる？」

「いまいる場所から、いなくなる――それも、数年以内に」

「それは――一般校に転校するってことだろう。念願が叶うんだよ、来年あたり」

「……私、それ……アリアがどこかに連れてっちゃうんじゃないかって思ってた……」

「はっ」

白雪の言葉に、俺は短い笑い声で応えた。

だが、白雪の態度は何かに囚われているかのように弱々しいままだった。

「アリアは、キンちゃんを変えたから。アリアと出会ってから、キンちゃんは明るく……」

「俺、が？」

意外――かというと、心のどこかで、そうではないカンジもした。

その感覚の方が、意外だった。

アリアが、俺を、変えた……？

「……そんなことない」

否定する俺の声は、自分が思ったより小さい。

「……いいの……」

「何が」

「キンちゃんが幸せになれるなら……アリアのこと、好きなら……アリアと一緒にでもいいの。私は陰からでもいいから、キンちゃんを支えて……ご恩返しがしたかった」

「お、おい。何を——」

「だから今までも、いろんなこと努力してきたつもりだった。お勉強も生徒会も部活も頑張って、自分を高めようとして……でも、そんなこと結局、何の役にも立たなかった」

白雪が……俺の言葉を遮って、言った。

何だこの白雪は。いつもと違う。

何か……今まで隠していた胸の内を、駆け足で俺に伝えようとしているみたいだ。

「……ヘンな事ばかり言うな。アリアとはただのパートナーだって前言ったろ。それに何でさっきから過去形なんだ。ひょっとして……先月の『武偵殺し』の事を言ってるのか？」

直接聞いたわけじゃないが、白雪の性格から考えて……

白雪は、自分が『武偵殺し』の一件で俺を何一つ手助けできなかった事を気に病んでいたのかもしれない。

イザという時、俺と一緒にいたのは——白雪と犬猿の仲の、アリアだったわけだしな。

「ちがうの……」

急に振り返った白雪は……暗くてよく分からなかったが、その瞳を涙に潤ませているようだった。

そして、ぼすっ。

「キンちゃん——っ」

「お、おいっ」

俺の胸に、飛び込んできた。

この間は隣に座って距離を詰めるだけでも数分かけていた白雪が、いきなり、だ。ど、どうしたってんだ。マジで。

「キンちゃん、ごめんね。本当に本当にごめんね——」

顔を上げた白雪が何に対して謝あやまっているのかは、分からなかったが——潤んだその瞳に、何も言えなくなる。

月明かりに浮かぶその顔は、ああ、最初から分かっていたが……
本当に、キレイで。

少し季節外れの浴衣ゆかたも、アップに結った髪も、この大和撫子やまとなでこには完璧かんぺきに似合っていて。幼なじみ——小さい頃ころから友達のように接してきた、水のように大切な、しかし余計なものものの介在を許さなかった関係……

その関係に今、何か蜜みつのようなものが滲にじみ、混ざっているのが分かる。

——狂おしいほどに甘い、飲み干さずにはいられなさそうなものが——

「キンちゃん……突然、ごめんね……今まで、きらわれるのが怖こわくて言えなかった……私わたしのわがままを1度だけ、夢を1つだけ、叶かなえてください……」

唇を震わせて言う白雪しらゆきは、もう、次の一言を言ったら死んじやいそうならにいつばいいっぱい、という表情をして……

「今だけでいいの、今だけでいいから——私を、私だけを見て……」

まだ夏には早い涼しい夜風が、ふつ、と俺たちを撫なでたその時——

静かに、ぱつつん前髪の下したの、穏やかな、愛らしい目を——

つむった。

「……キス……して……」

聞き間違い——じゃない、だろう。

小声は小声だったが、こんな至近距離だ。

なんで……

なんで、そんなこと、急に……

驚きに心臓が大きく鳴ったので——とつさに、自分の血の流れを確かめる。
だが……この感覚は少し違った。

ヒステリアモードになる性質の流れじゃない。

これは通常のトリガー——性的興奮——というのは、少し違う……
たぶん、白雪があまりに切なげにしているからだ。

言葉が……出なくなる。

気付けば俺の手は、俺の意思とは別に、本能のままに——白雪を止めるためなのかどうなのかも分からないままに、その浴衣の背にそっと触れそうになっていて——

——どん。

遠い、爆発音。

「——？」

何よりも原始的な、危険からお互いを守ろうとする本能。

驚きに肩をすくめた白雪と、ハッ、と意識を取り戻したかのように顔を上げた俺が、揃そろって顔を向けると……

ウォルトランドの上空に、どん。どどん。

大輪の花火が、次々と打ち上がったのは咲いていた。

さつき終了したと早とちりしていたが、どうやらただのインターバルだった……らしい。

「……っ……」

習慣とは、どうしようもないもので……

俺おれは今の一瞬で、無意識にボディガードの依頼人——白雪しらゆきの左胸を音源から守るよう

な位置に、自分の右肩を割り込ませていた。

手も、いつの間にか念のため帯銃してきていたベレッタに触れている。

強襲科アサルトにいた頃ころの訓練のせいだな。

花火の音にすら、身構えちまった。

思いつめた感じの白雪の前で見せてしまったマヌケな勘違いがきまり悪くて、振り返り

ながらも、白雪の顔がマトモに見られない。

俺たちの足は、さつきは爪先つまさきと爪先が触れあうくらいに近かったのに……

今の動きのせいで、半歩ほど離れてしまっている。

その40センチほどが、なんでか、取り返しをつかないほどに遠い距離に見えた。

「……ごめんね」

何かをあきらめたかのような声に顔を上げると、白雪は花火を見つめていた。

どこか虚ろな、まるで、自分がここにいないかのような目で。

仕方ないので、俺も――

まるで魔法のように上がる、色とりどりの花火に視線を向けた。

海に浮かぶような東京の夜景を彩る、夏先取りの花火。

俺たちはまるで魂が抜けたように、2人してそれを見続けていた。

――それが、別れの時になるとは思いもせず。

5弾 銀氷

ダイヤモンドダスト

連休が終わり、アドシアードが始まった。

俺がアルカタの演奏をやるのは閉会式なので、これからしばらくは短縮授業とちよつとした手伝いぐらいで日々が進んでいく。

昨日あのと、白雪は学園島に戻ると……忘れ物がどうか言つて、自分が元いた女子寮に帰ってしまった。

そしてその後1通、メールを送ってきている。

『キンちゃん、今夜は本当にごめんなさい。怒ってるよね。合わせる顔がないから、このまま自分のお部屋で寝ます』

もう正直、いもしない敵に休みなく備えるバカバカしさには辟易していたし……

実際あれだけ無防備に夜遊びしてたのに結局なにも無かったわけだから、俺は、

『怒ってねーよ。さっきの件はもう終了な。引っぱるなよ？ あと、教務科に任務中断で内申点を下げられてもアレだから、一応ボディガードは継続する。明日、委員会の仕事が終わったら電話くれ』

とだけ返して1人で横になっている。



だが、昨夜はなんでかうまく寝付けなかった。

後味の悪い人工なぎさの件もあったし、何だか……妙な胸騒ぎがしたのだ。その胸騒ぎの正体は何なのかまでは、分からなかったが。

……おかげで今日は、完全に寝不足だ。

今の俺は眠気に耐えつつ、武藤と2人、アドシアード開会式場となる講堂のゲートでモギリをやっている。

ゲートは幾つかあるのだが、講堂はそもそも武偵高のかなり奥にあるためセキュリティの役割を必要としない。

しかも俺らが担当しているゲートは報道陣の控え室に続くだけの出入り口。これがヒマでヒマでしようがない。

開会式前にはそこそこカメラやマイクを持った記者たちが通ったんだが……昼も3時を回ると、今さら来るやつはもういないのだ。

「……俺らの演奏するフー・シヨット・ザ・フラッシュって、原曲のカバー・バージョンの、さらにコピーの、しかも替え歌だろ？　ここまでするともう笑い話だよなあ」ヒマをもてあました武藤が、パイプ椅子に座ったままぼやく。

「なんであの曲になったんだ？」

することがない俺も、話につきあう。

「バン・バババンって歌詞。そこは変えてないだろ？ あそこが銃声っぽいからだだよ」

「はあ……武偵高らしい、つつーかなんつーか……」

俺はアクビをかみ殺しながら、今日も晴天の青空を窓から眺めていた。

「で、結局、アルⅡカタのチアって……星伽さんは出ないのか？」

「白雪？ 出ないつつてたぞ」

「そうかあー」

と武藤は、なぜかやたら残念そうに語尾を伸ばす。

「そういえば……キンジお前、星伽さんのボディガードしてたんだよな」

「ああ。アリアと一緒に」

「警護される星伽さんって違和感なかったろ。守ってあげたくなるタイプだもんなあ」

「守られる必要性を感じなかったぞ」

あれはアリアと互角に戦えるしな。

「……で……キンジ。どっちなんだよ」

「何がだ」

「星伽さんと、アリア。どっちがお前のタイプなんだよ？」

「は？」

俺は眉を寄せる。

どっちもありえん、と俺が答えるより前に……

武藤は、がちゃ、とパイプ椅子いすをこっちに向けてきた。

「アリアだろ」

「なんでアリアなんだ、よ」

なんでそこでギクツとする、俺よ。

「えーっと……ほら、なんかお前は、年下っぽい子が合う気がする」

「合わねえよあんな仔こライオン。俺は人類なんだ」

「こないだ、アリアが一般校区でクラスの女子と喋しゃべってたけど……あいつ、キンジのことはつか話してたぜ？ やっぱ、両想いりようおもなんだよお前ら」

「ありえん」

「じゃあ、その、キンジは……もしかして、星伽さんとうまくいつてんのか？」

「……あのなあー。なんで武藤までそういう下らない勘ぐりすんだよっ？」

昨夜の白雪とのことを思い出した俺は、ムスツとする。

「え、あー……それはほら、武偵ぶていなんて、そもそも知りたがり屋の何でも屋だろ」

「……好奇心ネコを殺す。武偵が書いた本に載ひつてたぜ」

俺はそれだけ言いうと、机に肘ひじをついて答えずにいた。

「答えろよ。答えなきや4トントラックで轢ひくぞ」

「おうおう轢ひきにこい。ベレベレッタ・キンジモデルで迎撃してやる」

俺おれは強襲アサルト科的な受け答えをしつつ、武藤無視むとうモードに入った。

だがそれでも武藤はあきらめない。

なーんーかー言ーえー、というカンジで、こっちを見続けている。

1分。

2分……

3分ほどすると、武藤はツンツン頭をこっちに向けるように顔を伏せ……

「――すまんっ！」

「んだよ急に。声がでかいぞ」

「オレは、危あやうく卑怯ひきようもの者になるところだった！」

「？」

「アリアを勧めすすめたりして、な。お前は……お前の好きな子とうまくいくよう、祈るっ」

ぐい、と腕を組み、キリッと斜め上を見上げる武藤。

……分かん。

どいつもこいつもワケが分からん。

もうその話を引っぱるのもイヤだったし、武藤もそんな空気を流していたので、俺らは音楽や映画やバイクの話に戻りつつ時間を潰つぶした。

4時には、武藤のシフトが終わった。俺は引き続き誰もこないゲートに1人残されて、やることもなく、ただボケーツと時を過ごすしかなくなる……

……うと……うと、と。

陽射しの中で、俺はパイプ椅子に座ったまま……連休ボケと、睡眠不足にやられて……とうとう、うたた寝をしてしまっていた。

坂道を転がるもまんを泣きながら追っかけ、マンホールにすぽっと落ちるアリアの夢なんかを見てたら……

「おいキンジっ——！」
がばっ！

と、武藤に肩をつかまれて目を覚ます。

「——？」

いかん、完全に寝てたらしい。

壁の時計がずいぶん進んでるな。

もう5時だ。

武藤はここまで走って引き返してきたのか、息を切らしている。

居眠りしてたのを怒ってる——というカンジじゃないな。何だ？

「どうした」

眉まゆを寄せると——

武藤むとうは、俺おれがポケットにしまっている携帯を指で示した。

「ケースD7だ、ケースD7が起きた」

——一気に、目が醒さめる。

ケースD——とは、アドシールド期間中の、武偵高内での事件発生を意味する符丁ふちようだ。

だがD7となると『ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者のみに行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。武偵高もアドシールドを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』——という状況を表す。

携帯を取り出すと、寝ていた間に確かに武偵高からの周知メールが来ている。しくじった。

マナーモードにしていたから気付かなかった。

武藤からの着信も何度かあった。

何が起きたんだ。

と、俺おれがメールを読むより先に——武藤が声を潜ひそめて伝えてくる。

「星伽ほとぎさんが失踪しっそうしたらしい。昼過ぎから連絡が取れないみたいだ」

「——失踪？」

慌あわてて、武偵高からのメールを確認しようとする——

白雪しらゆきから1通、新着メールが届いていた。

その内容に——

血が、凍り付く。

『キンちゃんごめんね。さようなら』

——おかしい。

幼なじみの俺には分かる。この文面はおかしい。

昨日のことで気まづくなつて家出した、とか、そういうことじゃないだろう。

人工なぎさでの件は、昨夜の俺のメールで終わったことになっている。

白雪の本心がどうなのかは知り得ないが、アイツはとにかく従順なやつだ。俺が終わりと言ったら終わりにする。それ以上その件を引っぱったりしない。無かったことにする。

それに白雪は責任感が強い。自分の仕事——アドシアードの仕事は、閉会式まで確実にやり遂とげるハズだ。それが突然姿を消したから、武偵高もケースDを発令したんだろう。

俺には分かる。

こ・れ・は・た・だ・の・失・踪・じ・や・な・い・。
ア・イツの身に何か、良くない事が起きた——！

今となつては——何もかも、言い訳だ。

白雪しらゆきも俺おれも、危険なんかこれっぽちも感じていなかった。

はじめあれだけ周囲を警戒していたアリアでさえ、最終的には任務を放棄した。

だからって——

迂闊うかつだった。

油断しすぎた。

白雪は、本当に狙われていたのかもしれない。

俺は先日アリアに怒鳴った、自分のセリフを思い出す。

『お前は敵がいた方がいいと思ってる、だから、それがいつのまにか「いる」に変わって
るんだ！』

あれは、逆だったのかも。

俺の『いない方がいい』……それがいつの間にか、『いない』に変わっていたんだ。

武偵高ぶていこうの路地に出た俺は——

何の手がかりもないただの道路を、見回すことしかできずにいる。

武藤とは手分けして探すことにしたが、一体、どうやって探せばいい？

全く見当もつかない——今の、俺には！

しかし状況はD7だ。無闇に聞き回っては、逆に白雪の身に危険が迫る可能性もある。

白雪への電話が不通なので、今度はアリアに電話をかけるが——こっちもどういいうわけが繋がらない。コール音は鳴っているハズなのに。

（アリア……！）

最初の予定通りアイツと2人で白雪をきちんとガードしていれば、こんな事にはならなかったかもしれない。

だが、アイツがいなくなったのも俺のせいなんだ。

俺がアイツの話を真に受けず、アイツの直感を信じず、結果的には追い出してしまったようなもの——

（俺が……最低最悪に、バカだったんじゃないか！）

白雪は——そんな俺を『信じてる』と言った。俺が1人で白雪を守り始めた夜に。信じてるから。

そう言われていたのに……

俺は、その信頼を、裏切ってしまった——！

犬のように道路を走り回って、路地に出ては周囲を見回す。

時間だけが、10分、20分——無意味に過ぎていく。

俺は……何もできないのか。

今の俺は——

女の子1人、守れないのか。

俺は——なんて——無力なんだ！

(でも……それでも、何とかしないと！)

こうなれば学園島を隅から隅まで走ってでも、手がかりを探すしかない。

探すんだ、それしかない。それしかできない。

白雪。

俺は、お前が言ってくれたようなヒーローじゃないんだ。

お前のピンチに居眠りしてたようなクズ野郎なんだよ。

でも、このクズ野郎な俺でも、それでも、信じてくれたお前の気持ちにだけは応えな

と！

——そうじゃなきゃ、本当の本当にクズ以下だ！

武偵高ぶていこうの南側を、息を切らして走っていた俺に——電話が入った。

むしり取るように出ると、

『キンジさん。レキです。いま、あなたが見える』

——レキ！

『D7だそうですね。狙撃競技のインターバルに携帯を確認しました』

「あ、ああ」

そういえばレキは、アドシアードに日本代表として出るとかいう話だったな。

携帯からは『何やってるんだレキ！』『世界記録目前だったのに！』などというがなり

声が漏れ聞こえてくる。

何かを言ったレキの声が、その外野の声に遮られた。

「レキお前、今どこにいるんだ!? うるさくて、今の話が聞こえなかった!」

『狙撃科の7階です』

「狙撃科——」

言われた俺は、北を向く。

狙撃科には、地下にある細長い狙撃レーンと、学園島の北側に飛び出た地上棟がある。

雑音、すみません。白雪さんとは関係ありませんから、落ち着いて下さい』

「何だ、どうしたんだよッ!」

『狙撃競技の競技中にレーンを離れたので、私は失格になりました。それで皆さん、怒っ

ているようでして』

携帯から、ガラッ、という窓の開く音。

そして、タンッ！

銃声が響いた。

わあっ、と電話の向こうの騒ぎがまた大きくなる。

レキ——!?

と俺おれがその名を呼ぼうとした次の瞬間、パリンッ！

俺のそばにあった街灯が、1つ割れた。

ウロウロしていた俺は、驚いてその場に静止する。

『キンジさん、落ち着いて下さい。冷静さを失えば、人は能力を半減させてしまう』

い……今のこれ、レキが撃ったのか。

スナイプとろ狙撃科棟からここまで、ほとんど2キロあるんだぞ？

『今のあなたが、まさにそれです。落ち着きましたか』

「あ……ああ」

がちやつ、という弾倉再装填マガジンリロードの音が聞こえてくる。

携帯で電話なんかしながら——

しかもあの古びたドラグノフ狙撃銃そげきじゆうで、よくこんな精密な狙撃ができるな。



『白雪さんクライアントは見当たりませんが——海水の流れに違和感を感じます。第9排水溝の辺り』
人工浮島である学園島の外周には、28の排水溝がある。

雨などで島内に不規則に入り込んだ水を、ポンプで排出するための穴だ。

「ど、どっちだ」

と聞くと、

『私は……一発の銃弾——』

レキが集中する際のクセ——呪文じゆもんのような、その言葉が返ってきて。

ビシッ。

俺おれの足元から少し離れたアスファルトに、狙撃銃そげきじゆうの弾たまが傷をつけた。

続けて、ビシッ。

ビシ、ビシッ、ビシッビシッ。

な……なんだ？

ドラグノフの速射能力を活かし、レキはアスファルト上に何かを点描てんぴようしている。
できあがったそれは——

『その方角です。調べて下さい。私は引き続き、ここから白雪さんクライアントを捜します』

——30センチ四方に収まるほどの、矢印、だった。

排水溝から出る水の流れには、何も不審なところは見て取れなかったが……

第9排水溝のフタは、一度外されてムリに繋ぎ直されたような跡があった。

こんなわずかな事で生じる海面の異変を、あの距離から見抜いたのか……などと、レキの超人的な視力に感心している場合ではない。

俺はこの排水溝がどこに繋がっているのか、武偵手帳で調べる。

「地下倉庫——!?」

呟いた自分の言葉に、汗が流れる。

これは走ったせいじゃない。冷や汗だ。

隅から隅まで物騒な東京武偵高でも、強襲科・教務科と並んで、3大危険地域の1つに

数えられている……地下倉庫。

地下倉庫とは対外用の、柔らかい言い方に過ぎない。

そこはつまり——

火薬庫。

なのだ。

マズイ。

マズイぞ。

アリアじゃないが、よくない予感がする。

この武偵高に、いつの間にか、何かが起きている。

白雪はそれに巻き込まれた——！

武偵高の地下は船のデッキみたいな多層構造になっていて、地下2階からが水面下になる。俺はそこまで階段を駆け下り、さらに下の立入り禁止区画に続くエレベーターに飛びついて、緊急用のパスワードを打ち込むが——

エレベーターが、動かない。

おかしい。

普段通りじゃない。それは確定だろう。

俺は変圧室に入り、その片隅にある非常ハシゴから固い保護ピンを抜いた。

マンホールのように床に設置されているハシゴ用の扉は浸水時の隔壁も兼ねており、3重の金属板で出来ている。

パスワード認証、カードキー、それと武偵手帳に内蔵されている非接触ICコンタクトレスを使って扉を開け、ハシゴをおろして下の階へ——！

降り立ったボイラー室でも同様にハシゴを使い、地下3階、4階、5階と降りていく。ハシゴは錆びており、それを急いで降りる俺の手の皮は擦りむけ、傷ついていく。

……痛い。

痛いぞ。

でも、そんなこと、気にしているヒマは無い！

白雪がここにいる可能性が1%でもあるんなら、全速力で降りるんだ。

あいつを、俺のことを信じてくれたあいつを——助けるために——！

そうしてようやく降り立った地下7階——

ジャンクシヨン
地下倉庫。

ここは、武偵高の最深部だ。

第9排水溝はここに繋が^{つな}っている。

無論、排水溝を伝ったところでそう簡単に入れる場所ではないのだが……やれば、できてしまう。よく学生同士の会話にも挙^あがることだが、武偵高はそのだっ広い構造上、外部からの侵入に対してそれほど堅牢^{けんろう}ではないのだ。ただ、武偵が何百人もうろついている島に不法侵入しようというバカがそんなにいないだけで。

地下倉庫の片隅、今はもう使われていないらしい資料室に着いてから……俺は気付く。

——暗い。

音を立てないように扉をそっと開けて廊下を見るが、やはり真っ暗だ。

電気が落とされている。

点^ついているのは、赤い非常灯だけだ。

武藤^{むとう}やレキを呼ぼうと思つて携帯を出すと——屋内^{インハウス}基地局が破壊されたのか、圏外になつている。

クソッ。

こういう事態を想定できなかったマヌケな自分に、腹が立つ。

ゲームみたいに都合よく、ライトや通信機が落ちてたりはしない。

かといつて今さら地上に戻るのも時間のロスだ。

今は通信より、光より、時間だ。

これが正しい判断なのかは分からない。

でも、白雪^{しらゆき}が、今まさに傷つけられようとしてるかもしれないんだ。俺^{おれ}がマヌケだった

せいで。それなら急ぐ！ それ以外ないんだよ！

できるだけ足音を殺して通路を走り、白雪の姿を探す。

廊下は広く、左右に弾薬棚^{つら}を連ねている。

武偵^{ぶてい}手帳を携帯の灯り^{あか}で確認すると、この先は大広間みたいな空間になっている。

地下倉庫^{ジヤンクシヨ}の中でも最も危険な弾薬が集積されている、大倉庫と呼ばれる場所だ。

そこから……

「……………」

人の、気配が、する。

言い争っている。

言葉までは聞き取れないが、誰かがいることだけは確かだ。

俺はベレッタに手を伸ばし――

グリップに触れて、眉を寄せた。

赤色灯で薄暗く照らされた周囲には、『KEEP OUT』や『DANGER』などの

警告があちこちに書かれている。

ここは火薬庫だ。

もしマズいものに跳弾が当たりでもして、誘爆を起こしたら――武偵高が、吹っ飛ぶ。
比喩表現じゃない。

本当に、魚雷の直撃を受けた戦艦みたいなことになる。ここにはそれだけの量の火薬が保管されてあるんだ。それも、見たところかなりズサンな置き方で。

もし誘爆が誘爆を呼んだら、武偵高の教員、生徒、アドシアードの選手――世界各国の優秀な青年武偵たち――に、多数の死傷者が出る。

それだけじゃない。アドシアードの競技には報道陣も来ている。報道されるぞ。何百人もの高校生がバラバラになって吹っ飛ぶ、未曾有の大惨事が。

……とにかく銃は使えない。

俺はポケットからバタフライ・ナイフを取り出し、音を立てないように開いた。

赤色灯の下で、刃が赤く——赤く、光る。

バタフライ・ナイフは音が出やすい構造上、潜入時に使うには不向きな武器だ。

不用意に振り回したり、振動させたりしないようにしなければ。

そう思いながら、刃を即席の鏡にしてそつと角の向こう側をチェックした俺は……息を呑んだ。

赤い光の下、俺から50mほど離れた壁際、山積みになった弾薬の脇に——

巫女装束の、白雪がいたのだ。

かなり不規則に並んだ……もしくは並べ替えられた……火薬棚の向こう側に潜んでいるらしい、姿の见えない誰かと会話しているようだ。

俺はすぐさま飛び出ていきたい衝動にかられたが、なんとか自分を抑えた。まずは状況を把握しなければ。その誰かは、いま白雪に銃を向けているかもしれないのだから。

曲がり角ギリギリまで体を寄せて、耳をすます。

「どうして私を欲しがるの、魔剣。大した能力もない……私なんかを」
怯えきった、白雪の声。

——魔剣——！

実在していた、のか……！

「裏を、かこうとする者がいる。表が、裏の裏であることを知らずにな」

少し時代がかった、男喋りの——女の声。

「和議を結ぶとして偽り、陰で、備える者がいる。だが闘争では、更にその裏をかく者が勝る。我が偉大なる始祖は、陰の裏——すなわち光を身に纏い、陰を謀ったものだ」

「何の、話……？」

「敵は陰で、超能力者を錬磨し始めた。我々はその裏で、より強力な超能力者を磨く——その大粒の原石——それも、欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは、自然な事よ。不思議がることではないのだ。白雪」

「欠陥品の、武偵……？ 誰のこと」

白雪の声に、怒りの色が混じる。

対する女は、少し嘲るような声になった。

「ホームズには少々手こずりそうだったが——あの娘を遠ざける役割を、私の計画通りに果たしてくれたのが遠山キンジだ。ヤツが欠陥品でなくて、何だと言うのだ？」

「キンちゃんは——キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「だが現にこうして、お前を守れなかったではないか」

「それは……それは、ちがう！ キンちゃんはあなたなんかには負けない。迷惑をかけたくなかったから……私が、呼ばなかっただけ！」

フンツ、という笑い声が白雪しらゆきの叫びを遮る。

「迷惑をかけたたくない、か。だがな白雪。お前も、私の策に一役買ったのだぞ？」

「私……が？」

「電話を覚えているだろう？」

と言った陰からの声に、俺おれは心臓が止まりそうになった。

俺の——声じゃないか！

今の、コイツ、俺の声をマネやがったのか！

「すぐ来てくれ白雪！ 来い！ バスルームにいる！」

「——っ！」

白雪が、息を呑むのが分かった。

その反応が面白かったのか、女は楽しそうに言葉を続ける。

「ホームズは無数の監視カメラを仕掛けていたが——お前たちの部屋を監視していたのは、私の方だ。お前はリビングの窓際にいて、遠山とやまが入っていたバスルームの灯りあかが消え……そこちちょうど、神崎かんざきアリアが帰ってきた。私は、そういう好機を逃さない性格でな」

「キンちゃんのフリをして私を動かして——キンちゃんと、アリアを……仲間割れ、させた……の？」

「あとは転がる石のように、だ。数日も経たずして、アリアはお前たちから離れた」

見て、いたのか。

忍び寄って、いたのか。

魔劍デユラントは。

俺たちに。俺とアリアと——ターゲットの、白雪に。

そして、まず守りの要となるアリアを遠ざけ。

俺に隙すきが出来ろのを待ち。

そして今、白雪を連れ去ろうとしている……！

「私フォーロー・ミーに続け、白雪。だが……お前は我々の一員になる前に、まず遠山に幻滅げんめつするべきだ。

お前のような逸材が身も心も捧たかげるべき人物は、別にいる」

女の次のセリフに、俺の頭の中は真っ白になった。

「私が今から、連れて行ってやる——イ・ウーにな」

イ・ウー。

神崎かなえさん——アリアの母親に懲役864年ちようえきもの冤罪えんざいを着せ、そして『武偵殺し』

こと峰みね・理子りこ・リュパン4世を使つて——

俺ノ兄サンヲ、殺シタ——！

兄さん。

小さかった頃からの、俺の憧れの人で。

誰よりも強く、賢く、そして優しかった——兄さん。

ソの兄サンヲ、あいつラガ……！

頭に、血が上って行くのが分かる。

握りしめた拳が、兄さんの形見のバタフライ・ナイフを震わせている。

カチ、カチ、……と——

「それともう1つ」

女の声が、少しだけ明瞭になった。

「今回の事に、1つだけ誤算があった。お前の性格を読み違えていたようなのだ。約束は、守るタイプだと思っていたのだがな」

「……何のこと……？」

「『何も抵抗せず自分を差し出す。その代わり、武偵高の生徒、そして誰よりも遠山キンジには手を出さないでほしい』——お前は確かに、そう約束した。私は確かに、聞いた。だが、その裏で——お前はヤツを呼んでいる」

最後の一言は、声を放つ方向が変わっていた。

明らかに、こっちに向かって言っている。

——気付いてやがったか——

そう思った次の瞬間、俺は。

「白雪逃しらゆきげろ！」

叫ぶと同時に、白雪たちの方へと駆けていた。

キレた、というのなら、まあ半分はそうなのだろう。

だが全く、何の考えもなかったわけじゃない。

声の位置から——敵がどこにいるのかは大体分かっていた。

それならいきなり飛びかかって、取り押さえてしまえば一気にカタがつく。

それにここは火薬庫。

俺もだが、敵も銃は使えない。

敵まで50m。俺の足で7秒。

たった7秒で走る俺の武器を把握し、逃げるか戦うかの判断をし、何らかの武器を用意し、体勢を整え——そこまでの事が、そこまでの事が、できるものか！

「キンちゃん！」

驚いた白雪の声が、大倉庫に響く。

「——来ちゃだめ！ 逃げて！ 武偵は、超偵に勝てない！」

悲鳴のようなその叫び声に続いて、

俺おれの足元に――

ガツツ！

目にも止まらぬ速さで飛来した何かが突き刺さる。

「うおっ!？」

ダンッ！ と倉庫に音を響かせ、俺はつんのめってブツ倒れた。

足元の床には、優美に湾曲わんきよくした銀色の刃物が突き立っている。

強襲科の教科書で見た事があるから知っている――これはヤタガンと呼ばれる、フラン

スの銃剣。細長い古式銃の先端につける、サーベルのような小剣だ。

「『*l'Anse de la Pucelle*』――罪人とされ枷かせを科される者の屈辱を少しは知れ、武偵ぶていよ」

女の声に続いて、銃剣を中心に何か白いものが広がっていく。その白い何かは、パキ……

う、動けない。

「――うっ!？」

起き上がろうとした肘ひじにも、その白いものが広がっていく。

なんだ、これは……!？」

冷たい。

……氷……!？」

銃剣にはなんの仕掛けも見当たらない。足元だって、ただのリノリユームの床だ。

何を、どうやったんだ。

体を起こせない。

——氷に、縫い付けられた。

「我が一族は光を身に纏い、その実体は、陰の裏——策士の裏をかく、策を得手とする。その私がこの世で最も嫌うもの、それは、『誤算』でな」

未だ姿を見せない敵の声に続いて、フツ——

と、室内の非常灯が消えた。

周囲は完全な闇に包まれる。

「……い、いやっ！ やめて！ 何をするの！ ——うつ……！」

ちやりちやり……！

という金属音が、白雪の方から聞こえる。

敵が動いている。

「——白雪！」

俺の叫びに、白雪は——答えない。

何だ、何をされた！

焦る俺だが——

氷に縫い付けられた今となつては、何もできない。

いや、今回だけじゃない。

また何もできなかったんだ。

俺は白雪を助けるどころか、事態を悪化させたただけだ。

初めっから、そうだった。白雪のボディガードを始めた時から。

正しい状況の判断ができず、なんの準備もせず無意味に時間だけを過ごし、イザという時が来ても結局……こんな所までノコノコ出てきて、アイツに迷惑をかけただけ。

白雪の身に迫る危険を目の当たりにしながら、それでも何もできずにいる。

ただ、悪化していく事態を傍観することしかできない——！

シャツ！

という、次の銃剣が空を切る音。

暗闇の中くらやみでも分かる。

あれは俺を——殺す刃やいば——！

ぶんっ——もう1つ、刃が飛ぶ音が後ろから上がり——ギンッ！

空中に一瞬、火花が散った。

俺は……

まだ、生きてる。

何だ？

何だったんだ、今のは——？

「じゃあバトンタッチね」

俺の真っ暗闇を切り裂くような、ア・ニ・メ・声。

ちか、と、部屋の片隅の天井で電気が灯った。

その光が——パツ、パパツ、パパパパツ。

体育館のように広い大倉庫を一周するように、次々と灯っていく。

漆黒の闇が、純白の光に塗り替えられていく。

「そこにいるわね、『魔剣』——！ 未成年者略取未遂の容疑で、逮捕するわ！」

ぎゅ、ぎゅむ、と俺の背中と頭を踏み越えて前に出たのは——武偵高のセーラー服姿の、

「アリア!？」

だった。

「ホームズ、か」

どこからともなく、また、姿無き女の声。

そして白雪も……姿が消えている。火薬棚の裏側に引きずり込まれたらしい。

その火薬棚の、隙間^{すきま}から。

シャシャッ！ と、アリアめがけて銃剣が2本飛来した。

アリアは、ぎぎんっ！

その場で風車^{ふうしや}みたい^にに日本刀を振り回したかと思うと、それを2本とも撥^はね飛ばす。

「何本でも投げてくれば？　こんなの、バッテリーセンターみたいなモノだわ」

アリアが刀をバットみたい^にに構えると――

がちゃん……

と、どこかの扉^かが閉まる音がした。

……しばらく、静寂^{せいじやく}があつてから……

「逃げたわね」

アリアはクルッとこつちに振り返り、俺^{おれ}のそばに突き立っていた銃剣を引っこ抜いて、

ぽーいと投げ捨てた。

そして俺の頭の脇^{わき}で、きゅ。しゃがむ。

「まあ、少しは役に立ったわね。バカキンジも」

「な、なんだそれっ」

「勇を使え、蜜を使え、賢を使え、愚を使え――って言うでしょ。バカキンジモードのバカキンジには、バカキンジなりの利用法があるのよ」

出てきたと思ったら、またバカバカ言いやがって。

ていうか目の前でしゃがむな。

プリーツスカートの内側を見ないよう、俺は唯一マトモに動く首を横に向けた。

アリアは膝を伸ばし、とてと走って白雪の様子を見に行こうとし――きゅきゅつ。

と、スニーカーを鳴らして急停止した。

ふあ、と、長いツインテールが身体からだの前方に流れている。

「……？」

俺がその様子を見ていると……

一歩退いたアリアは刀を空中に突き出し、ぷつん。

見えない何かを、切った。

「……どうした」

「ピアノ線。正確にはたぶん、T N Kワイヤー。あたしの首の高さにあった」

きよろ、と周囲を見回したアリアは、もう一度、ぷつん。

「これはあんたの首の高さね。まっすぐ走れば頸動脈けいどうみやくを切れるよう、うまく斜線に張ってある。投げナイフで仕留められなければ、これで殺るつもりだったんでしょ」

「よ、用心深いヤツだ……白雪を攫さらおうとしつつ、トラップを仕掛けるなんて……！」

「でも、むだむだ。あたしの目はごまかせないわ」

自信満々に言うと、アリアはさつき俺おれを助けた時に投げた刀を拾いつつ、改めて白雪しらゆきの方へ向かった。

——そして、すぐ戻ってきて俺の傍かたわらにひざまずく。

「白雪は」

「ケガはしてなかった。でも縛られてる。助けるの、あんたも手伝いなさい」

言いながら俺に片膝かたひざを乗つけたアリアは、ざく、ざくざくつ。

凍り付いた俺の手足を、刀を使って床から剥はがしてくれる。

「アリアお前……途中でいなくなってから今まで、何やってたんだ」

「魔剣デュランダル」は白雪を見えないところから監視してた。それも、距離をどんどん詰めている

感覚があったわ。でも、あたしやレキがいる内は決して襲って来ようとはしなかった。だからあたし、わざとボディガードから外れたの」

「強襲科アサルトの屋上でケンカしてから……姿を消してたのは、作戦だったのか」

「武偵憲章2条ぶてい。依頼人との契約は絶対守れ。あたしは絶対、任務クエストを投げ出さない。まあ屋上で寝てたあんたにはマジギレだったけど、これもいい機会かなって思ってたね」

べり、とアリアは俺の肘ひじを床から剥がす。

「魔剣デュランダル」は、イ・ウーでも指折りの策士だわ。でもあんたが適度に白雪のそばにいてくれたおかげで、ヤツにようやくあたしの動きから目を逸そらせる事ができた。何よ、その

不満そうな目は。なんか文句ある？」

ようやく身動きが取れるようになった俺は、アリアにバカバカ言われたことにも……相変わらずの危険なやり口にも、一応、不平を言わないでおく。

結果だけ見れば、コイツに助けられたんだからな。

「敵の——気配がしなくなったな。逃げたのか」

さつき手帳で確かめた見取り図によれば、ここからは上の階にしか移動できないはずだ。「敵が複数いる場合は、まず距離を置いて、遠くからうまく敵の戦力を分断して——1人ずつ、1対1で片付けようとする。これは魔剣デユラントルの戦術パターンなのよ」

そうか……それで、俺と白雪もモノの見事に分断サブさせられたわけか。

「ただ、ああいう策士は計画に狂いが生じると全てを『無』にしようとする傾向があるわ。だとしたら改めて戻ってきて白雪を殺す可能性もある。まずは、白雪を解放するわよ」と、アリアは立ち上がった俺の袖そでをつかんで白雪の方へと引っぱっていくのだった。

倉庫の壁際にいた白雪は、立ったまま鎖で縛られていた。

口を布で縛られ、んーんー！ とノドを鳴らしている。

布を外してやると、

「キンちゃん大丈夫!? ケガしなかった!」

と自分の事はさておき俺の心配をしてくる。

「俺は大丈夫だ。お前こそ……」

と言いながら俺は、白雪の胸の下に巻き付いた鎖を手を取った。

鎖は1つ1つの環がハンバーガーみたいに巨大で分厚く、壁ぎわを伝う鋼鉄のパイプに繋がれていた。錠前はこれまた置き時計のように巨大な『ドラム錠』と呼ばれるシロモノで、3箇所もロックされている難物だ。

俺とアリアは武偵手帳から解錠キーを取り出し、鍵の解除にかかるが——
よっぽど複雑に出来ているのか、1つも開かない。

「キンちゃん……ごめんなさい……私、ここにこの服で、誰にも内緒で来ないと……学園島を爆破して、キンちゃんの事も殺すって言われて……」

それを聞いて、また苦いものが胸の内に滲む。

俺——が、いつの間にか取引材料に使われていたのか。

「いつから言われてたんだ」

「昨日……キンちゃんが線香花火を買いにいつてくれた時に、脅迫メールが来て……私、キンちゃんが傷つけられるのが怖くて……従うしか、なくて……ふえ……え……っ」

「いいから、今は。泣くな」

あの時——か。

どうりであの後、白雪の様子がおかしかったワケだ。

「アリアも……ごめんね。私、アリアにあんなヒドイことばかりしてたのに……助けにきてくれたんだね……」

白雪に言われたアリアは、「え」とか言いつつちよつと赤くなる。

「あつ、あたしは……依頼を引き受けたからあんたを守ってるだけ。あたしの本当の目的は、魔剣を捕まえることだけなのつ。だから感謝なんてしなくていい」

と言いつつ、うーん、と鎖を引っぱり白雪を解放しようとするアリア。

言ってることとやってることがちよつと矛盾してるが、まあ、それも今はおいておこう。それにしても……この鎖、取れない。

白雪の超人的な剣術を使えば、あるいは——という気もするが、縛られているのは当の白雪だ。見ればその刀も取り上げられている。

壁のパイプの方を切断すればとも思うが、これも大型の工具を使わない限りビクともしないカンジの太いやつだ。

どこか鎖の継ぎ目の弱そうな所はないかと調べつつ……

アリアが、白雪に訊く。

「魔剣の姿は見た？」

「ううん……敵はずっと柵の陰に隠れてた。そこの扉から逃げた時も、影しか見えなかつ

たよ」

上階へ伝わる天井扉を目で示す白雪に、アリアがそうでしょうねという顔をした。

「……仕方ないわ。魔剣は、決して自分の姿を見せない」

と語るアリアは、どうやら日々の調査の甲斐あって魔剣についてかなりの予備知識を持っているようだった。

そこで俺は、さっきから気になっていた事を尋ねてみる。

「アリア。さっきの、あの氷……」

俺を床に縫い付けた、氷。

液体窒素でも使われたのかと思ったが、多分違うだろう。強襲科にいた頃、液体窒素で時限爆弾を凍らせたことがあるが……あんな凍り方はしなかった。

アリアは――

「超能力よ」

できれば言っただけで済まなかった答えを、サラツと言ったのけた。

「うん、あれ……国際分類で言えばⅢ種超能力者――たぶん、魔法使いだと思っ」

白雪の補足説明に、俺は眉を寄せる。

魔法使い……かよ。

「ありえねえ……」

「ありえなくないの。最近じゃ、一流の武偵ぶていはもう驚かないものよ。うちにだって超能力S 捜査研究科Rがあるでしょ」

そりゃあ……知ってるよ。頭では理解してたつもりだ。

超能力捜査研究科S R。

白雪も在籍しているそこは、確かにサイコメトリーだのダウジングだの、怪しげな捜査手法を大マジメに研究している。だがS研は武偵高ぶていこうでも特に秘密主義な専門科の1つで、関係者以外で詳しいことを知る者は少ないのだ。

特に、普通人になりたいと願っていた俺は、あの最も普通じゃない世界を避けて暮らしてきた。あんなゲームに出てくるような魔法が実在するなんて、噂うわさに聞いたこともない。

「恐れることはないわ、キンジ。超能力者あいつらの能力はあたしの経験上——手品師や大道芸人みたいなモノだったわ。鉛弾なまりだまの敵じゃない」

「でも、超能力だぞ。予想外の攻撃をしてくるかもしれない」

「だつらない。そういうキンジはキライ。でも……まあ、安心していいわよ。あんたをうまく『覚醒かくせい』させる訓練が仕上がってないから——あんたは戦わなくていい。アイツはあたしが1人でやる」

というアリアの言葉に返すようにして……

ズズン——！

と、くぐもった音が地下倉庫に響き渡った。

俺たちが周囲を見回すと――

ごぼ、ごぼぼ……と。

床にあった排水穴から、排水ではなく――逆に、水が出ている。

水量はみるみるうちに勢いを増し、1分も経たずにまるで噴水のようになった。

俺たちの足元に、その水が広がっていく。

「……海水だわ」

ふんふん、と小動物みたいに鼻を鳴らしたアリアが言う。

「ああ。どこか排水系を壊しやがったな」

靴から……足首へ。足首から、脛へ。

水位はどんどん増してくる。

マズいぞ。

この勢いだ、いくら体育館のように広い大倉庫とはいえ――水没まで10分、といったところだろう。

俺とアリアがハシゴを伝って天井の穴から逃げるには十分な時間だが、白雪しろゆきを置いていくわけにはいかない。

策士……か。

「……確かにヤツは策士みたいだな、アリア。お前、バレてるぞ」

と言った俺に、アリアは——何も答えず、迫りくる水を不安げに見つめていた。

「バレてる……って、何……？」

白雪の問いに、アリアは、かああ。

赤面しつつ、『言っちゃダメっ』という上目遣いになる。

だが……今は状況が状況だ。許せ。

「アリアは泳げないんだ。このあいだ綴が言ってた」

「ちっ違う。う、浮き輪さえあれば……！」

「そんな都合のいいモノは無い。アリア、お前は先に上へ行け」

「だ……ダメよ！ あんたたちを見捨てて逃げるなんてできない！」

「違う、これは回避じゃなくて攻撃なんだ。上に行つて、魔剣から鍵を奪ってきてくれ」

——この鎖は、ここでこうやつてても取れそうにない。お前にも分かるだろ」

「……で、でもっ」

「戦闘力の高いお前の方が、敵を早くブチのめせる！ 俺には超偵との戦闘経験が無い、

これはお前にしかできない事なんだ！ ……行け！ 今は1秒でも時間が惜しい！」

強襲科にいた頃のノリを思い出しつつ、俺は敢えて強く言った。

アリアはまだ白雪を心配そうに見つめていたが、膝まで上がってきた水をもう一度見て

から——ようやく、自分の解錠キーを俺おれに渡した。

「……分かったわ。でも、ダメだと思ったら絶対、あたしを呼ぶのよ!」

呼んだところでこの鎖はどうしようもないだろう——

それは、この場の全員が分かっていたが。

悔しそうにこっちに背を向けたアリアに、俺は、ああ、とだけ答えておいた。

水の勢いは、激しさを増している。

白雪しらゆきの鎖はまだビクともしない。

大倉庫の水没まで、あと5分あるかないかだ。

俺は何か工具が無いかわ水を掻くかようにして倉庫を探したが……何も見つからなかった。

水位はもう、俺の肩の辺りまで来ている。

俺より少し背の低い白雪は、首まで水に浸ひかっている。

どうすればいい……

どうすれば、いいんだ……!

「キンちゃん……もう行つて」

途方に暮れた顔の俺に、白雪が、言った。

「私は、もう……いいの。キンちゃんを危険な目に遭わせたくない」

けなげに、ぱつつん前髪の下でむりやり笑顔を作っている。

こんな時まで、俺を心配させまいとして――

「……バカ言うなっ」

「星伽の巫女は、守護り巫女。誰かのために身も心も捧げ、投げ打つのが定め。キンちゃんはどう、避難して。私の事は、もう、いいから……」

「――お前を置いて行けるか！」

叫んだ俺に、白雪は答えようとして――

とうとう口まで来た海水に顔を一瞬しかめ、ぷは、と上を向いて息を継いだ。

「いいの、私は――私が死んでも、きっと誰も泣かない。私は先生とかみんなにもてはやされてたかもしれないけど、私のことを本当に好きな人なんて……誰も、いない――ぷはっ、私じゃ……なくて、星伽の巫女の超能力が、持ち上げられてただけ……あぶっ……」

と、白雪はその顔をほとんど真上に向けて喘ぐ。

俺の爪先も、とうとう床から離れた。もう泳がないと移動できない状態だ。

「し……白雪！ 今にアリアが鍵を持ってくる！ 1秒でも長く持ちこたえろ！ 息を大きく吸え！ 依頼人はボディーガードの言うことに従え！ 鎖だって俺がなんとか――」

「ボディーガードの、依頼は――！ もう、取り消します！ キンちゃん――！ 逃げて――生き、て……！」

「白雪……！ ああ、チクシヨウ……俺のせいで……こんなことに……！」

「キン……ちゃんは——悪く、ない——！」
その言葉を最後に。

白雪は——

ぎゅつ、とその目を閉じたまま、水面下に沈んでしまった。

「白雪い——ッ!!」

水の中で、白雪の黒髪が——力なく、ゆらゆら揺れている。

もう覚悟を決めたのか、白雪は俺から顔を逸らすようにうつむいてしまった。

「白雪……！」

死ぬ、つもりなのか。

俺が逃げやすいように。

依頼も解除して——最後の最後まで俺のことを『悪くない』って、かばって——

「悪くないワケ、ねえだろ……！」

がん！ 俺は壁を殴りつける。

悪くないワケがない。

悪いのは俺だ。

こうなったのは、全部、全部、俺のせいだ。

警告を聞かず、敵に備えず、動き出してからも事態を悪化させてはっかりの――

俺のせいに決まってるんだろ!!

事ここにいたって……俺は。

とうとう、腹を決めた。

――白雪。

お前はいつも、俺の言うことを従順に聞いてくれたよな。

思えば俺もけっこう身勝手なことばかり言いつけたもんだよ。

だから今度は俺が、お前の言うことをまとめて聞く番だ。

お前は俺に3つ言った。

1つは、今さっき。

『生きて』と。

ああ。

生きてやるさ。

こんな所で死ねるかよ。

生きて、生きて、生き延びて、魔剣デュランデルなんか、アリアの敵なんかみんなブツ潰つぶして。

それから平々凡々と、のうのうと、生き続けてやるさ。

——それとな。

お前が俺おれに言った、2つ目のこと。

お前は言った。たしか俺が、1人でお前を守るようになった夜。

『守って』と。

あの時はお前も敵の存在に気付いてなかった。だから、軽い気持ちで言ったのかもだ。でも、俺は確かに応こたえたんだ、ああ、と。

俺は——お前を守る、最後の切り札を——持もつていいる。

ずっとずっと、逃げてきたけど。

幼なじみのお前にすら、隠してきたけど。

最後の最後に、まだ1枚、俺の身体からだの中に最後の力を持ってるんだ。

ハイジャックの時は半分以上、自分の意思じゃなかった。敵に見つからないためにアリアを黙らせる。それが先にあった。使わなければ俺が死ぬ。そういう状況だった。

でも、今は——

俺がこの力を使う理由は、責任の上では、ない。

アリアは俺に戦わなくていいと言った。白雪しらゆきを護衛する任務も、いま本人に解かれた。だから俺は、責任上、逃げたければ逃げていい。

生涯悔やむことになるうと、俺は、この力を使わなくてもいいんだ。
だが、俺は。

兄さんが死んでから初めて、自分の意思でこの力を使う。

自分の奥底に隠された、最後の切り札。

ヒ・ス・テ・リ・ア・モ・ー・ド・を！

白雪。『ボディーガードの依頼は、もう、取り消します』——だって？

「ふざけんな！」

叫びざまに大口を開けて、大きく、大きく、息を吸う。

顔が真っ赤になるまで。肺が破裂する寸前まで。さらにギリギリ寸前まで。

吸って、吸って——吸い、込ん、で——！

ザブンっ。

潜った。

半ば脱力していた白雪の両肩をつかむと、白雪はその大きなお目々をさらに大きく見開

いて、首を左右に振った。

そして水中で、ぱちぱち、とマバタキ信号を送ってくる。

“死なないで そんな償い方 つくな しないで”

俺が心中するつもりだと思っただけらしい。

しらゆき 白雪らしい発想だな。

違う。違うんだよ白雪。

お前が俺に言った3つのこと。

お前、もう1つ俺に言っただけ。

昨日、花火のあと。

『キスして』——って。

こんな形で悪いけどな。

言うこと——聞いてやるよ！

俺は白雪に、2文字だけマバタキ信号を返す。

“吸え”

それを伝えてすぐ——

俺は、白雪を抱きしめ。

「――」

口と口を、合わせた。

白雪の唇は――

比較するなんて本当に罪なことだが、アリアのそれより――柔らかくて。

すうつ、と吸い込まれた息と少しだけ入れ違った白雪の息は、甘い、桃のような香りで。

……ああ。

分かる。

白雪が、息を継ぐのが分かる。

そして――

ドクン、ドクン……という、

俺の、高鳴る鼓動も。

この唇を起点に、昂ぶった血液が身体中を巡り――芯に、集まっていく。

まさか幼なじみと、こんな事をするなんて。

その想いが激しい興奮を伴って、俺を滾らせる。

白雪と過ごした子供の頃からの時間がそのまま詰まったような熱が、俺の中心・中央を、ずきずきと疼くほどに灼けつかせて――！！

ああ……

なつていく。

ヒステリアモード、に……！！

ぷくぷく……ぷく。

と、白雪しらゆきが、唇の端から息を吐く。

息ができている。

俺おれは唇を合わせたまま、さらにもう一呼吸、二呼吸させてから——口を離し。

白雪の胸の下に食い込む、ドラム錠に手を伸ばした。

意識を集中させ、解錠キーを改めて差し込む。

天井まで水が上がってしまったら、息継いきつぎすらできなくなる。

俺の見立てでは、それまで3分——いや、もう3分を切ってるハズだ。

通常モードでの俺の全防連認定錠ぜんぽうれんていとうに対する鍵開かんけの所用時間は、平均12分。

だが、今の俺には指先に伝わる微かすかな感触から鍵かぎの内部構造がまるで透視するように分
かり——

——ガチャツ——

わずか10秒で、アリアですら難儀なんぎしていた1つ目の鍵が開いた。

2つ目。これも同様に開ける。一度息継ぎして——また白雪にも空気をやりつつ、その

巫女服の胸元に持っていた武偵手帳から抜いた解錠キーで――

3つ目。

ガチャッ――！

という音と共に、白雪を縛めていた巨大なドラム錠は解け。

重い鎖も、がらがら、じゃりん……壁のパイプをずり下がっていった。
俺と白雪は上昇し、

ぷはっ！

揃って水面に顔を出す。

よかった、間に合った。

天井に頭がぶつかりそうな状態だが、大倉庫はまだ水没しきっていない。

「キンちゃん！」

白雪は、ざぶ、と水をかいて俺に抱きついてくる。

「――白雪。さっき、言ったな。『依頼は取り消します』、って」

あ、バカ。俺。

低い、渋い声で喋るんじゃねえよ。

あと目つきを鋭くするな。きめえんだって。

「は……はい」

答えた白雪の顔、耳から頬にかけてを——俺は、濡れた手でそつと撫でてやった。

同時に親指で、顔に張りついていた一房の黒髪を払ってやる。

「依頼なんて関係ない。俺は、白雪を守る。白雪だから、守りたいんだ——どうしても俺のこの熱い、熱い、想いを……白雪に、受け入れてほしい」

低い声で囁くように、しかしハッキリとそう言う——

白雪は感激しきった顔に、どこか驚きの感情を交えつつ——
こくり。

うなずいた。

その頭が、ごち。

とうとう天井にぶつかる。

おっと。甘い言葉で安心させてる場合じゃなかったな。

これはヒステリアモード時の悪いクセだよ。

今は一刻も早く、上の階へ移動しなくては。

「で、でもキンちゃん。相手は魔法使いだよ。私も戦うつ」

「勇敢な子だ」

形のいい眉を吊り上げて言う白雪に、俺は小さく苦笑した。

これ以上白雪を危険にさらしたくはないが、女性の意志は尊重しなければな。

「そんな事はないと願いたい——じゃあ、どうしようもなくなったら手を貸してくれ。俺とアリアが前衛^{フロント}。白雪は——後衛^{バック}だ。伏兵^{アンブッシュ}を頼む」

さあ、これでこっちのカードは全てオープンになった。

あとはアリアと合流して、強襲。そして逮捕するのみだ。

未だ姿すら見せない——魔剣^{デュランダル}を。

相手は策士、しかも超能力者だ。並の武偵^{ぶてい}が勝てる相手じゃない。

だがそれも並の武偵^{ぶてい}ならの話。こっちには双剣^{カド}双銃^ラのアリア、ヒステリアモードの俺、さらに援護の白雪がいる。

この3枚のカードなら——いかに魔剣^{デュランダル}が相手でも互角、いや、それ以上のハズだ。

そんなことを考えながら俺は、上階へ続く隔壁を開く。

もう水は天井ギリギリまで来ている。

ガキン、と3重の扉を開け、いきなり狙い撃ち^{ねらい}にされないよう、ナイフを鏡代わりにして様子を窺^{うかが}う。大丈夫そうだと判断した時——扉に何かスイッチでも仕掛けられていたのか——ずうん、と、また地下倉庫^{ジャンクシヨン}全体に鈍い音がした。

「……チッ！」

水の勢いが、急激に増してくる。

水位はみるみるうちに地下倉庫の天井に達し、俺たちを押し流すようにして上階の床に吹き出した。

「きゃあっ——！」

地下6階のフロアに上がった白雪が水流に足を取られて、キユキユツ！ と音を上げながらリリユームの床を滑って押し流されていく。

「——気をつける白雪！ 補助刀剣サブエツジを出しておくんだ！」

「はっ……はい！」

物陰に流されてしまった白雪を追いたい——今は、まずこの水を止めなければ。この階も水でいっぱいになったら、また同じことの繰り返しになる。

床の扉から手を離さずにいた俺は、それを猛烈な水圧に逆らって閉めにかかる。

「う……おおおっ！」

満身の力を込め、扉を押し返し——ゴウンツ。なんとか、閉ざす。

ふう……

なんとか——水は、止まった。

これも、普段の俺ならどうしようもなかっただろうな。

「——白雪」

呼ぶが、声は返ってこない。

「……」

もしかしたら……

敵の姿を見つけて、場所を悟られないよう声を潜めて（ひそ）いるのかもしれない。

白雪の役目は今、伏兵だしな。

周囲を見回すと、足元が水浸しになったこの階は——壁のように巨大なコンピューターが無数に立ち並ぶ、HPCサーバー——俗に言う、スーパーコンピューター——室だった。ちかちか、と、あちこちでアクセスランプが点滅している。

だが……『DANGER』だの『CAUTION』といったサインボードは無い。

俺はベレッタを抜き、銃弾を引き抜いてから、薬室の水を息で吹き飛ばした。

現代の銃は、水に浸された（ひた）ぐらいで撃てなくなることはない。

インフォオルマ（情報科）コネクト（通信科）には悪いが、拳銃（けんじゅう）も解禁だな。

大型コンピューターが衝突（ついた）のように立ち並ぶこの部屋は、まるで迷路だった。

火薬棚と違い隙間（すきま）から飛び道具で狙（ねら）われる危険性はないが、どこに誰（だれ）がいるのか分から

ない。

集積回路とシリコンの壁に挟（はさ）まれた通路を——足音を殺しつつ、駆ける。

屋内戦の授業で習った通りに銃を構えたまま、特殊部隊のように移動する。

2つ、3つ――

警戒しながら曲がった、電腦の壁の脇で。

「――キンジ」

アリアと、はち合わせした。

さつき俺おれと白雪しらゆきの声を聞いて、奥のエレベーターホールの辺りから引き返してきていたらしい。

「よかった、無事だったのね……」

アイコンタクトして小さくうなずいた俺は、構えていた銃を逸そらす。

自分だけ先に大倉庫から移動したことに罪悪感を感じていたらしいアリアは、俺が無傷なのを見て安心したような顔をしていた。

だが、俺のそばまで来るとツリ目でこっちを睨にらみ上げてきながら、

「――なんで逃げなかったの。『戦わなくていい』って言ったでしょ」

小声で命令違反をたしなめてくる。

「可愛いアリアを置いて逃げられるほど、俺は理性的なタイプじゃないんでね」

「……な、なによそれっ」

がお、と犬歯けんしを剥むいたいつものアリアに安堵あんどして、俺も囁ささやき声で返す。

「アリアが俺に会いたがってるだろうって思ったら――体が止まらなくなったんだよ」

「な、なななに言ってるのこんな時にっ」

不知火しらぬいばりの笑顔を作った俺に、アリアは、ぼぼぼぼ。

いつもの赤面癖を発揮した。

素面しらふから赤面まで、0・5秒。新記録おめでとう、アリア。

「それよりアリア——魔剣デュラントは？」

「……まだ見つからない。あの臆病者おくびょうもの、あたしと戦うつもりがないみたいだわ」

「——そうか」

「でも、この部屋のどこかにいるのは確かよ。上に続く扉の鍵かぎはみんな壊されてたし、エレベーターの扉も鉄板で塞ふさがれてた。ぜんぶ内側から、ね」

と気を取り直して説明するアリアは、確かにまだ敵と交戦してはいないようだった。

「ねえ、さっき声が聞こえたけど……白雪は救出できたのね？ ケガとか、しなかったのね？」

やはり俺たちのことを相当不安に思っていたらしいアリアが、真摯しんしに確認してくる。

責任感の強い、いい子だな。

「ああ。だが、ここで見失ってしまったんだ。戦力を分散させたまま各個撃破されては、敵の策通りになる。まずは白雪と合流——」

と言った時、

——けほっ、けほっ

という、微かな咳の音が聞こえた。

ヒステリアモードの俺にもなんとか聞き取れた程度の、小さな音に——野生動物なみに鋭敏な聴覚を持っているらしいアリアが、くるっ、と振り向いた。

「白雪だわ。あっちにいる」

「行こう。だが、どこから魔剣が襲ってくるか分からない。アリア、盾にならせてくれ」

と、俺はアリアとすれ違うように一歩先へ出てから、通路を進み始めた。

すれ違う時、視界の端で——

アリアの紅い目が、俺の何かに気づきかけているように見開かれていた。

白雪は、すぐに見つかった。

このHPCサーバー室の奥にある唯一の広い空間——エレベーターホール。

そのそばの通路まで迷い込み、3m近い高さのコンピューターの陰にへたり込んでいたのだ。

ぺたん、と人魚姫みたいな姿勢で座っていた白雪は——

さっき押し流された時に海水を飲んだのか、両手を口にあてて咳き込んでいた。

「……けほっ、けほっ……て、敵、は……？」

「姿が見えないわ。白雪、私たちから離れないで」

その背中をさすってあげながら屈かがんだアリアに、白雪はこくりとうなずく。

「キンちゃん……」

白雪は弱々しく半べそをかきつつ、甘えるような視線でこっちを見上げてきた。

その濡ぬれた巫女装束みこしやうそくは全身にべったりと張りつき、高校生らしからぬ色っぽいボディラインあらが露あらわになっている。

ヒステリアモードの俺には、女性の衣服を形・色・材質、飾りの隅々まで写真のように思い出せる。

だが——今日の白雪は例の黒い下着ではなく、薄い、甲冑かっちゆうのようなものを身につけているようだった。

「唇、大丈夫か。さっきの」

「うん、大丈夫」

一応聞くと、白雪はこくりとうなずいた。

「血が出てたろう。見せてみる」

「ううん。大したことなかったよ。口の中を切っただけ」

——やっぱりか——！

「アリア逃げろ！」

叫ぶと同時に、俺はその白雪めがけて発砲した。

白雪も——それは予想済みだったらしく、バツ——！

「！」

濡れそぼった白小袖で俺の腕を弾き、初弾を外させた。

床に当たった跳弾が、近くの巨大コンピューターに当たって火花を散らす。

「キンジ!？」

驚くアリアの側面に、白雪が——目にも止まらぬ速さで回り込む。

バツ！ バババツ！

瞬時にフルオートに切り替えた俺のベレッタが、マズルフラッシュを閃かす。

が、銃弾が捕らえたのは緋袴の裾だけだ。

裾を弾かれたその勢いをむしろ活かして、白雪は、ぐんっ。這うような動きでアリアの

背後に回り込んだ。

そして、がしゃ、と、コンピューターラックの下に隠してあった刀を取る。

エレベーターホールの方に投げ捨てられた朱鞘から抜かれたのは、白雪がいつも帯刀し

ていた日本刀だ。

その白雪を——俺は、もう撃てない。

アリアの体を盾にされた。

アリアは状況を頭では理解できないまま、しかし動物的な本能で危険を察したらしく、

「——!?」

反射的に両手で銃を抜き、白雪に振り返ろうとした。

その首を——

「うっ!?」

白雪が、背後から左腕で絞め上げる。

右手で抜いた刀の刃は、ピタリ——と、アリアの耳の下、首筋に当てている。

頸動脈。

ほんの数センチ切り込めば、数秒で人を失血死させられる急所に。

「しら……ゆき！ 何よ！ どう、したの！」

喚くアリアの、拳銃を握ったままの右拳に——

白雪は、フツ！

肩越しに息を吹きかけた。

「うあっ！」

びびんっ！ と、アリアが焼きゴテでもあてられたかのようにのけぞる。

そして自慢のガバメントから手を放し、落としてしまった。
 ぱき……ぱきつ。

落ちた銀色の拳銃けんじゅうの周囲が、氷に包まれていく。

「アリアー！ 違うんだ！」

俺おれは叫ぶ。

「……そいつは白雪じゃない!!」

——ヒュッ！

さらに白雪しらゆきが、アリアの左手にも息をかけた。

「きゃあっ!？」

またのけぞったアリアは漆黒しつこくのガバメントも放し、両手を胸の前に寄せた。
 その手には——霜しもが降りたように、氷が張りついている。

超自然的なその光景に、本能的な恐怖が背筋を走る。

今の——やったのか、この白雪が。

超能力——で！

「——只ただの人間ごときが」

もう白雪のものではない、声——

「超能力者ステルスに抗あらがおうとはな。愚おろかしいものよ」

何かがおかしい……とは勘付いていた。

この白雪は、俺の言うことを聞いていなかった。補助刀剣サブエッジを出しておけ、と言ったのに何も持たず咳き込んでいた。

だから敢えて『唇は大丈夫か』などと言って、反応を見ようとした。

さっきの——水中での出来事を覚えている本物の白雪なら、あんなに平然と「大丈夫」などと答えるワケがない。

それに、あいつは俺の前で口にケガなんかしてない。

なのに、したような答え方をした。

そうやって確認しなければならぬほど——このニセ白雪は、よくできていた。

まさに生き写しなのだ。

洞察力が普段の何倍にもなるヒステリアモードでなかったら、幼なじみの俺でさえ完全に騙されたまま殺られていただろう。

「……魔剣……！」
デュランデル

ようやくその正体に気づいたアリアが、凍らされた手の痛みには震えながらうめく。

「——私をその名で呼ぶな。人に付けられた名前は、好きではない」

「あんた……あたしの名前に、覚えがあるでしょう！ あたしは、神崎・ホームズ・アリ

ア！ ママに着せた冤罪えんざい、107年分は——あんたの罪よ！ あんたが、償うのよ！」

「この状況で言うことか？」

フンツ、と『魔剣』が囚われのエリアを嘲笑う。

「それに、お前の名——ただか150年ほどの歴史で名前を誇るのは、無様だぞ。私の名はお前より遥かに長い——600年にも及ぶ、光の歴史を誇るのだしな」

そして白雪の顔のまま可笑しそうに目を細め、エリアの耳元に唇を寄せた。

「なるほど、お前は『双剣双銃』が——リユパン4世が言った通りだ」

今……リユパン4世、の名を出した。

——理子のことだ。

やっぱりコイツは——武偵殺し、峰・理子・リユパン4世の仲間か。

ここまで完璧な変装は、アイツの技術がないとできないだろうと思っていたところだ。

「エリア。お前は偉大なる我が祖先——初代ジャンヌ・ダルクとよく似ている。その姿は美しく愛らしく、しかしその心は勇敢——」

「ジャンヌ・ダルク……!？」

エリアが、呻くようにその名を繰り返す。

(……ジャンヌ・ダルク、だと……!?)

俺も——その名は知っている。一般教科の世界史で習った。

15世紀、イギリスとフランスによる100年戦争を勝利に導いた、フランスの聖女。

コイツの今のセリフは、自分が、その子孫だという意味だ。

……だが……

いま目の前にいる『魔剣』デユランダルがジャンヌ・ダルクの子孫である事はある事はないのだ。

なぜなら、オルレアンの聖女と呼ばれた彼女の結末は――

「ウソよ！ ジャンヌ・ダルクは火刑で……十代で死んだ！ 子孫なんて、いないわ！」

「あれは影武者だ」

フン、とまたアリアを鼻で嗤わらう声。

「我が一族は、策の一族。聖女を装よそおうも、その正体は魔女。私たちはその正体を、歴史の闇に隠しながら――誇りと、名と、知略を子々孫々に伝えてきたのだ。私はその30代目。

30代目――ジャンヌ・ダルク」

魔剣――
デユランダル

彼女の言に従えば、ジャンヌ・ダルクが、言う。

「お前が言った通り、我が始祖は危あやうく火に処しよせられるところだったものでな。その後、この力を代々探究してきたのだ」

ジャンヌの手が毒蛇のようにアリアの太ももに伸びると――また、アリアが激痛に体をねじった。

「きゃうっ！」

見れば、その小さな膝小僧に氷が張りついている。

もう疑いようがない。

コイツは俺たち武偵とは異なる、想像もつかない力を持っているのだ！

「私に続け、アリア。リュパン4世が攫いそこねたお前も、もらっていく。それとも死ぬか？　そういう展開も、私は想定済みでな」

「……アリア……！」

俺はベレッタを単射に切り替え、ジャンヌの頭を狙って威嚇するが——撃てない。

武偵法9条。

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

さっきの銃撃で分かったが、あの巫女装束は防弾製。アイツの体で露出している部分は他には刀を握る手ぐらいだが、そこを撃てば、アリアの首に当たる。

アイツはそれを分かって、あの体勢を作ったのだ。

どうする。

眉を寄せた俺と目が合ったジャンヌは——白雪の顔のまま、不敵にほくそ笑んだ。

「私の変装を見抜いたお前は、普段のお前ではないのだろうな。警戒せねばならないのは確かだが……今のお前の弱点は『女を人質にされること』、だろうか？」

さすが——策士を名乗るだけあるな。

そこまで調査済みか。

とおやま

「遠山。動けば、アリアが凍る。アリアも動くな。動けば、動いた場所を凍らせる」
言われて、俺は心の奥で舌打ちした。

コイツの言う通り、ヒステリアモードの俺は女性の身の安全を最優先させてしまう。

「キンジ……撃ち、なさい……！」

どこを撃てというんだ、アリア。

お前ごと撃つことはできない。

今の俺には、絶対にできないんだ……！

「喋ったな、アリア？ 口を動かした。悪い舌は、いらないな」

ぐい、と刀を持つ手でアリアの顎を強引に押さえたジャンヌは――

アリアの口に、自らの唇を寄せていく。

――あの、凍気を吹き込むつもりか！

「やめろッ！」

叫ぶが、手も足も出ない。

アリアを人質に取られては、何も……！

「――アリア！」

室内に響いた、俺のものではないその声は。

いつも慎^{つつ}ましく、どこか弱々しかったハズのその声は。

——勇敢で、力強いものにな変わって——

じやりっ！

ジャンヌの背後、3mはあるコンピューターの上から分銅^{ぶんどう}つきの鎖^{くさり}が伸び——アリアの顎^{あご}を押さえる際に緩^{ゆる}められた右手——その、刀の鐔^{つば}に巻き付いていた。

アリアの首筋に突きつけられていた刃^{やいば}は、ぐいつ、と引^ひつぱられて離^{はな}される。

「——!?」

白雪^{しろゆき}の顔のまま眉^{まゆ}を寄せたジャンヌが見上げたコンピューターの上には——

「キンちゃん、アリアを助けて！」

本物の、白雪^{しろゆき}がいた！

白雪は、ぐんっ！

鎖を引き上げ、自分のニセモノの手から刀を取り上げた。

そしてコンピューターの上で、釣り上げた刀をキャッチする。

さっきはアリアが白雪の命を助けたが——今度は、白雪がアリアの命を助けたのだ。

武偵^{ぶてい}憲章1条。

仲間を信じ、仲間を助けよ。

普段は占い1つ仲良くやれない2人でも、イザとなればお互いの命を助け合う——

アリア、白雪。

お前たち、立派な武偵だぞ！ よく凌いだ！

本物の白雪は飛び降りざまに――

ざきんつ！

アリアとジャンヌ・ダルクの間割り込むようにしながら、刀を斬り下ろす。

ジャンヌはそれに対応した。防刃巫女服を翻し、刃を白小袖でつかみ取ろうとする。

その動作を、放されたアリアが妨害した。

離れ際に、まだ無事だった片脚でジャンヌの膝へカンガルークックを叩き込んだ。

ジャンヌは大きくバランスを崩し、後退せざるを得ない。

――ヒステリアモードの眼が、その、わずか1秒ほどの交錯を全てとらえていた。

だんつ、ごろろつ、と転がったアリアは、俺の足元で片膝立ちの姿勢になる。

そのアリアを守るように、白雪が立つ。

ちゃき、と刀を八相に構え直した白雪に、ジャンヌは――

「白雪――貴様が、命を捨ててまでアリアを助けるとはな」

と、白雪に変装するために着ていた緋袴の裾から、筒のような何かを落とした。

シューウウウウウ……！ 筒から、白い煙がみるみるうちに広がっていく。

発煙筒――煙幕か！

ばっ。

ばっ、ばっ。

煙を感じした天井のスプリンクラーが、次々に水を撒き始める。

白雪はジャンヌが身を隠した煙を避けるように、じりじりと退がってきた。

「ごめんねキンちゃん。いま、やつつけられると思ったんだけど……逃げがしちやったよ」

「上出来だよ、さすが白雪だ。アリア、大丈夫か」

「や……やられたわ。まさか、白雪が2人とはね……」

屈んだままのアリアは、ぐっ、ぱっ。ぐっ、ぱっ。手を、むすんでひらいてしている。

だが、その握力はまるつきり弱まっていた。

戦闘は、もうできないだろう——おそらく、ジャンヌの狙い通りに。

そしてそれとは別に……心なしか、室内が寒くなってきた気がする。

「白雪——2つ、思い出してくれないか」

「はい」

「アリアのロッカーに、ピアノ線を仕掛けた覚えはあるか？」

「ロッカー……？ そんなこと、誓ってしてないよ」

「あともう1つ。白雪はこの間、花占いしてるところを不知火に見られたか？」

「え、あ、うん……」

少し恥ずかしそうに答えた白雪に、俺は舌打ちする。

「俺は同じ時刻に、もう1人の白雪とすれ違ってる。あの女は今までずっと、白雪に化けて武偵高に潜んでいたんだ。だから俺たちを細かく監視し——分断できた。アリア。お前のロッカーにピアノ線を仕込んだのも恐らくジャンヌだ。さっき下の階に仕掛けてあったピアノ線を覚えてるだろう。木を隠すなら、森——白雪のアリアへの嫌がらせの中に、奴が殺人罠を紛れさせてたんだ」

俺が素早く推理を語ると——アリアは赤紫色の瞳を丸く見開いた。

「キンジ……あんた、また……なれたのね!？」

——そうだ。

今の俺は、ヒステリアモード。

お前が言うところの、覚醒状態だよ。

俺は何も答えないことで、アリアの問いかけを肯定した。

アリアはそれを受けて少し強気になったのか、そのキバっぽい犬歯をむいて叫んだ。

「魔剣!——あんたがジャンヌ・ダルクですって? 卑怯者! どこまでも似合わない

ご先祖さまね!」

挑発するようなアリアの声に、煙の向こう、だいぶ離れたところから——

「お前もだろう。ホームズ4世」

声が、返ってきた。

だいぶ離れた所、エレベーターホールの辺りだ。

俺たちはそっちに向き直りつつ——気付く。

心なしか、ではなかった。この部屋の室温は急激に下がっている。

煙の向こうでは、スプリンクラーから撒かれる水が空中で氷の結晶となり、雪のように舞っている。

ダイヤモンドダスト、という現象だ。

宝石が舞うような、超常的なまでの美しさ。

それが逆に、言いしれぬ恐怖を募らせる。

アイツは——ダイヤモンドダスト銀 氷の、魔女だ——

「キンちゃん……アリアを守ってあげて。アリアは、しばらく戦えない」

刀を右手に持ったまま、白雪が退がってきて——かたひざ片膝をつき。

アリアの右手を、左手でそっと包んだ。

「魔女の氷は、毒のようなもの。それをキレイにできるのは修道女か——みこ巫女だけ。でもこの氷はG6からG8ぐらいの強い氷。グレード私の力で治癒しても、元に戻るまで……5分はかかると思う。だからその間、キンちゃんが守ってあげて。敵は、私が1人で倒すよ——

「——何を言うんだ白雪。お前を1人で戦わせるなんて、できない」

俺はジャンヌが攻勢に出ることに備え、2人を守るような位置に立った。

「キンちゃん……そう言ってくれるの、うれしいよ。でも今だけ、ここは超偵の私に任せ
て。アリア、これ、すごく……しみると思う。でもそれで良くなるから。ガマンして」

言うと白雪は、小さく、何か呪文のようなものを呟いた。

精神を集中させているのだろう。

目には見えない力が、白雪の手からアリアの手に、伝わっていく。

「……あつ……！ んくつ……！」

白雪の治療に痛みが伴うらしく、しかしアリアは敵に見つからないよう声を殺した。
その痛々しい声に——ヒステリアモードの俺は振り返らずにはいられない。

「んうっ！」

制服の袖を噛み、くぐもった声で喘いだアリアが、びんつ、と痛みへのけぞって。

前髪が跳ね、その下に隠していた……×字の、傷跡が見えた。

それは先月、アリアが身を盾にして俺を守った時についた傷。

女の子の顔に残った、一生消えない、痕。

——胸の奥に、痛みが走る。

その脇で、アリアの治療を終えた白雪は小袖からロウ紙のようなものを出した。

それを壁のようなコンピューターに貼り付けると——周囲が、今度は暖かくなってくる。

見ればそれは、長方形の和紙に何やら漢字と記号が朱色で書かれた御札^{ふだ}だった。明瞭^{めいりよう}になった視界の中に、白雪^{しらゆき}がすつくと立つ。

その白雪の周囲からは、まるで悪霊が退散していくかのように、氷混じりの煙が流れていく。

気がつけば、俺^{おれ}たちの服もいつの間にか乾いてしまっていた。これも超能力の一種か。

「白雪……」

それを見た俺は、やむを得ず決めた。

白雪を1人で戦わせたくは、ない。

だが。

アリアを放^{ほう}つておくことも、できない。

——この戦い、まずは超能力者の白雪に任せよう。それが彼女の意志でもあるし。

俺が少しアリアに寄って退^さがったのを見て、白雪は——

「ジャンヌ」

入れ替わりに敵の方へ一歩出て、俺とアリアに背を向けた。

「もう……やめよう。私は誰^{だれ}も傷つけないの。たとえそれが、あなたであっても」
ハッキリと伝えた白雪に、フン、という笑い声が煙の向こうから聞こえてくる。

「笑わせるな。原石に過ぎぬお前が、イ・ウーで研磨けんまされた私を傷つけることはできん」

「私はG17の超能力者スーパースタイルなんだよ」

という白雪の言葉に、今度は――

笑い声が、返ってこない。

俺には分からないが、今の白雪の言葉は超能力者には相当の威嚇いかくだったらしい。

「――ブラフだ。G17など、この世に数人しかない」

「あなたも感じるハズだよ。星伽ほとぎには禁じられてるけど……この封じ布を、解ほどいた時に――

「……仮に、真実であつたとしてもだ」

ジャンヌの声には、今度は少し緊張感が籠こもっていた。

「お前は星伽を裏切れない。それがどういふことを意味するか、分かっているならな」

「ジャンヌ――策士、策おほに溺れたね」

白雪の声が、強まる。

「それは今までの、普段の私。でも今の私は、私に星伽のどんな制約おきてだって破らせる――
たった1つの存在の、そばにいる。その気持ちの強さまでは、あなたは見抜けなかった」

白雪の不思議なセリフに、ジャンヌは――黙った。

策くわを弄するタイプは、予想外の展開に弱い。

そして今、敵の計画には誤算が生じているのだ。

この、以前とは違う白雪しらゆきによつて。

室温は既に、常温にまで戻っている。

発煙筒の煙も消え、スプリングカラーが、1つ、また1つと止まってい

「——やってみろ。直接対決の可能性も想定済みだ。Gのグレイド高い超偵ちやうていはその分、精神力を早く失う。持ち堪えれば私の勝ちだ」

意を決したように言ったジャンヌの姿が、晴れていく煙の向こうで……

とうとう、明らかになる。

緋袴ひはかまと白子袖しろこそでを脱ぎ捨てた下には——やはり——部分的に身体からだを覆おおう、西洋の甲冑かちゆう。

「リュパン4世による動きにくい変装も、終わりだ」

べりべりつ、と、被かぶっていた薄いマスクを剥はいだその顔——

刃やいばのような切れ長の眼めは、サファイアの色。

2本の三つ編みをつむじの辺りに上げて結った髪は、氷のような銀色。

どこか古めかしい日本語とは裏腹に、ジャンヌ・ダルクはまさに西洋の歴史映画に出てきそうな——美しい、白人だった。

「キンちゃん、ここからは……私を、見ないで」

俺おれに背を向けたまま、白雪が、微かすかに震える声で言った。

「……白雪……？」

「これから——私、星伽に禁じられてる技を使う。でも、それを見たらきつとキンちゃん
は私のこと……怖くなる。ありえない、って思う。キラ伊に……なっちゃう」

言いながら、白雪は頭にいつもかけていた白いリボンに手をかける。

その指も、小刻みに震えていた。

俺は、半歩だけ退きながら……

「白雪——安心しろ。ありえない事は、1つしかない」

これから始まるであろう超偵同士の戦いから、アリアを守る位置に立った。

「俺がお前のことをキラ伊になる——？ それだけは、ありえない」

低い俺の声に、押されるようにして。

しゅらり。

白雪はムリに微笑んだ顔を半分だけ振り返らせながら、その髪に留めていた白いリボン
を解いた。

「すぐ、戻ってくるからね」

そして、かつん、と赤い鼻緒の下駄を鳴らし、刀を構え直す。

その構えが——普段の八相とは違う。

柄頭のギリギリ先端を右手だけで握り、刀の腹を見せるように横倒しにして、頭上に構
えている。

剣道ではおよそ一切の流派に存在しないであろう、奇怪な構えだ。

「ジャンヌ。もう、あなたを逃がすことはできなくなった」

「——？」

「星伽の巫女ほとぎみこがその身に秘める、禁制鬼道きんせいきどうを見るからだよ。私たちも、あなたたちと同じように始祖の力と名をずっと継いできた。アリアは150年。あなたは600年。そして私たちは……およそ2000年もの、永い時を……」

くッ——と、白雪しらゆきがその手に力を込めたかと思うと——

刀の先端に、ゆらっ——と、緋色ひいろの光が灯るとも。

それがみるみるうちに、バツ！ と刀身全体に広がった。

室内を明るく照らしあげたそれは、焰ほのお——！

この期に及んで、揮発油や可燃性ガスを使ったトリックでない事は疑うべくもない。

あれは——あれこそが。

白雪の、切り札の超能力なのだ！

『白雪』っていうのは、真の名前を隠す伏せ名。私の諱いみな、本当の名前は——『緋巫女ひみこ』

言い終えると共に、カツ！

白雪は床を蹴けって、火矢のようにジャンヌに迫った。

白雪の術に、瞬目を奪われていたジャンヌはその場に低く屈かがむと、ガキンッ！



背後に隠していた華麗な洋剣で、その、渾身こんしんの一撃を受け止めた。

じやりんっ！ と、通常なら火花のところを——宝石のようなダイヤモンドダストを散らしながら、そしてその氷を瞬時に蒸発させながら、2本の剣が鎬しのぎを削り——

さっ——いなされた白雪しらゆきの刀が、傍らかたわのコンピュターを音も立てず切断した。ざっ、と、ジャンヌは白雪から距離を取る。

明らかに、今、後退した——！

「炎……！」

見ればその美貌びぼうには、僅わずかな怯えの色が冷や汗と共に滲にじんでいた。

ヒステリアモードの俺おれには、分かる。

アイツは、炎が怖いのだ。

ジャンヌの一族は、初代ひあぶが火炙りになりかけてからあの技を開発し始めたと言っていた。それはきつと、怖おそかったから。

自分を殺めあやかけたものが、恐ろしかったから。

あの一族は代々、その恐怖心と共に、氷の秘術を研究してきたのだ。

「いまのは星伽ほとぎ候天流そうてんりゅうの初弾、緋炫毘ヒノカガビ。次は、緋火虞鎚ヒノカゲツチ——その剣を、斬きります」

白雪は再び、緋色ひいろに燃えさかる刀を頭上に掲かかげる。

まるで松明たいまつだ。

なるほど、あれは立ち上る炎が白雪自身を傷つけないようにするための構えだったのか。

「それで、おしまい。このイロカネアヤメに、斬れないものはないもの」

「それは——こっちのセリフだ。聖剣デュランドルに、斬れぬものはない」

対峙するジャンヌが、勇気を振り絞るように胸の前に掲げた幅広の剣は——

古めかしい、しかし、手入れの行き届いた壮麗な洋風の大剣。

鍔に飾られた青い宝石が、白雪の炎に照らされて輝いている。

カツッ！ 再び駆けた白雪は——

俺の目には、どこか、勝負を焦っているようにも見えた。

ギンッ！ ギンッッ！ 2人の刀剣は何度かぶつかり合って、激しい音を上げる。

白雪の刀、ジャンヌの剣が掠めた室内のものは、全てが冗談のように切断されていく。

巨大なコンピューターがキャビネットごと。防弾製のエレベーターの扉。リノリウム

の床も、壁も。

だが、唯一斬れていないものがある。

白雪の刀・イロカネアヤメと、魔剣——ジャンヌの言い分では、聖剣・デュランドル。

斬れない物がないと謳ったお互いの刀剣だけは、何度切り結んでも傷1つつかずにいる。

「これが一流の超値の戦い……なのね……！」

俺の足元から、ようやく顔を上げてきたアリアが言う。

「アリア」

俺は屈おれかがんで、囁ささやいた。

「動けそうか」

「もう……大丈夫そう。でも銃が床に凍り付いてるし、剥はがしても使えない。あたしの銃は寒冷地仕様じゃないの。完全分解して整備しないと、多分生き返らないわ」

アリアは悔しそうに、氷漬けのガバメントを見下ろす。

「作戦を立てよう」

俺が言うのと、いつも独断専行のアリアが顔を上げ——こくり。

素直に、うなずいた。

ヒステリアモードの俺のことは、きちんとパートナーとして扱ってくれるらしい。

「——どこかで白雪しらゆきに加勢したいが、タイミングを間違えれば白雪の足を引っぱるようになる。アリアはああいう超能力者を逮捕してきたんだよな。何かキツカケをつかむ方法はないか」

「ここまで高度な超能力者ステルスには……正直、当たったことがないわ。でも、あの戦いは……長くは続かないと思う」

「長くは、続かない？」

「超能力者は使う力が大きいほど、精神力をたくさん消耗するの。武偵ぶていと戦う時は勘所かんどころで

最小限の力を使おうとするものなんだけど……同類が相手の時は、ああやって全力を出し続ける。だからすぐガス欠を起こすのよ。その瞬間がチャンスだわ」

「その瞬間が分かるか」

「経験則で、たぶんね。半分はカンだけど——信じてくれる？」

アリアの声は、ほんの少し不安そうだった。

俺がこの間……『信じられるか！』と言ってしまったことが心の傷になってるんだな。これは良くない状態だ。

信頼関係がなければ、武偵同士の連携はままならない。タイミングを誤る。

そう思った俺は膝を伸ばし、ピンクの髪を、優しく撫でてやった。

「この間の俺はバカだった。許してほしい。俺はアリアを——生涯、信じると誓うよ」

「しょ、しょーがい？」

「たとえ世界中の誰もがアリアを信じなくなつて、俺だけは一生、アリアに味方する」
赤紫色の瞳を、覗き込むようにしながら言う……

生来の赤面癖ですでにかなり頬を赤らめていたアリアは、ぼ……んっ。

イチゴみたいに、真っ赤になった。

その驚く顔はどこか嬉しそうでもあったので、

「嬉しいのかい？」

「……バ、バカキンジ……！ あ、あんた……スーパーモードでもバカ……バカ……！」

「答えて。アリアの気持ちを確かめたい」

と促す^{うなが}。

「………ちよ、ちよつと……ちよつと嬉しい。で、でもちよつとだからねっ！」

「アリアが嬉しいと、俺^{おれ}も嬉しいよ。じゃあ——アリアも、俺を信じてくれるか？」

「………う、うん」

こくり。とうとうアリアは子供^{おとな}が大人を見るかのような視線で俺にうなずいた。

ヒステリアモードの俺に、もう、なされるがままという感じだな。

「俺たちは、信じ合ってる」

トドメに言つてやると、アリアは——きゅん、と——

心の奥で何かが鳴ったように、緩く握^{ゆる}った手を胸に寄せた。

「だから自信を持って、攻撃のタイミングを教えて欲しい。魔剣^{デュランダル}を——逮捕するぞ」

俺がアリアと信頼関係の再構築をしている間に——

初め、炎……白雪^{しらゆき}有利に見えた炎と氷の戦いは、互角のような雰囲気^{ふんいき}になっていた。

「——ッ！」

白雪はまるで息を止めているかのように、歯を食いしばりながら刀を振るう。



体当たりするようなその一撃に、とうとう、ジャンヌが。

だんっ。

半ば尻餅をつくような姿勢で、壁際に倒れた。

だが……

「はあ、はあ、はあ……！」

グロッキーなのは、押し倒した白雪しらゆきの方のように見える。白雪の息が上がっているのを象徴するように、刀を包む炎も今はだいぶ小さくなっていた。

「剣を捨てて、ジャンヌ——もう、あなたの、負けだよ」

「ふ……ふふ」

ジャンヌは不敵な笑いと共に——サアアッ。

流れる霧霞きりがすみのように、一瞬、自分の周囲に微細な氷の粒を発生させた。

そしてその霞かすみに隠れるようにして、回転受け身みたいな動作で白雪の脇わきに逃げる。

白雪が慌あわてて難ないだ、ほとんど炎の切れてしまった刀は——
がす。

壁に突き立つようにして、止まる。

もう明らかだ。

白雪からは、さっきの力が失われている——この、数分で。

アリアが言った通りだ。

超偵^{ちやうてい}は強い。人智を超えた強さを誇る^{ほこ}。だが、長く戦い続けることはできないのだ。ゲームの魔法でもそうだ。強力な魔力を使うキャラクターは——それが、切れると——

「はあ、はあ……はあっ」

柄^{つか}を右手で握ったまま、白雪はその場に膝^{ひざ}を突いた。

まるでフルマラソンでも走りきったかのような疲労困憊^{こんぱい}ぶりだ。

ざしゅ、と壁から抜けた刀の切っ先を床に落とした白雪は、そばに落ちていた朱鞘^{しゆざや}を左手で探^{さぐ}り当てると……ず、ずず、と、なぜか刀身をそれに収めてしまった。

「甘い——お前はまるで、氷砂糖のように甘い女だ。私の肉体を狙^{ねら}わず、剣ばかりを狙うとはな。聖剣デュランダルを斬^きることなど——絶対、不可能だというのに」

姿勢を直したジャンヌは、魔剣^{デュランダル}の切っ先を、白雪の首に向ける。

まだか……まだかアリア。

俺^{われ}たちが加勢^{かせ}する瞬間は、まだなのか。

「くっ……！」

鞘^{さや}に収めた刀を体の後ろに隠すように構えた白雪が、齒を食いしぼるのが見えた。

白雪——！

衝動的に飛び出しそうになった俺を、アリアが手で制する。

「まだよキンジ……！ 白雪は——たぶん、あと1撃分だけ、力を残してる……！ でもそれを使うのに時間が要る……何か、力を圧縮チャージしてるみたい……見えるわ……！」
 小声で言いながらのアリアも、駆け出したいのを必死に自制しているようだった。剣を構えたジャンヌの周囲に、再び——ダイヤモンドダストが、舞い始める。そしてそれが、見る間に吹雪のように室内に吹き荒れた。

室内が、再び、一気に氷点下の寒さに——！

「見せてやる、『オルレアンFleur de la glace d'Orléansの氷花』——銀氷となって、散れ——！」

細氷の向こうに見えるジャンヌのデュランダルが、見る間に青白い光を蓄たくわえていく。

——その時——！

「キンジ、あたしの3秒後に続いて！」

叫んだアリアが、じゃきじゃき！

背中から寸詰まりすんづまりの日本刀を2本抜きつつ、まるで銃弾のように飛び出した。

——1秒。

白雪との戦いに集中していたジャンヌが、ハッ、と振り返る。

——2秒。

「ただの武偵如ぶていごときが！」

怒りに身を任せるように剣を横薙よこなぎに払ったジャンヌより、早く——

アリアはさつきジャンヌが脱ぎ捨てていた巫女服みこふくを、右手の刀で——バツ！
払い上げるように飛ばして、敵の視界をほんの一瞬塞ふさいだ。

「——！」

ずざあああつ！ と、アリアはサッカーのスライディングの要領で身を低くする。
だが、ジャンヌの腕は止まらなかった。

アリアがまるで合気道のような格闘技術バトリツで、相手の動きを先読みして動いていたからだ。

カッツツ！！

空中の巫女装束しやうぞくを押しのけ——アリアの上空を——青い光の奔流ほんりゅうが巻き上がった。
それはもはや、本当にゲームのような光景で。

光る氷の結晶の渦が、蒼い砲弾あおとなって天井にまで届いた。

天井はまるで、巨大な氷の花が咲いたように広く氷結していく。

——3秒！

「今よキンジ！ ジャンヌはもう超能力ちからを使えない！」

アリアに言われるまでもなかった。

ダイヤモンドダストを掻き分けるようにして、駆ける。

ガガガンッ！

3点バーストに切り替えたベレッタで、ジャンヌの正中線を銃撃する。

ジャンヌはその3発を、既に引き戻していたデュランダルで弾いた。

それは予測できていた。アイツは白雪と互角に戦える剣術の達人だ。だから。

俺は——さらに床を蹴って、ジャンヌに肉薄していく。

近接拳銃戦——強襲科で、習った。

授業の時は機動隊の楯みたいな物を使ったが——敵が何らかの方法で銃弾から身を護れ

る場合は、至近距離から銃弾を浴びせて倒すのが武偵の戦い方なのだ。

「ただの武偵の分際で！」

俺に対し、ジャンヌは——逆に、突っ込んできた。

その足元を、アリアが二刀流で払う。

バッ！ 当然それも予測済みだったジャンヌが、跳躍して俺に飛びかかってくる。

迎撃する俺の銃弾を剣で受けながら——受けるだけではなく、その力を使って剣身が大

きく回転させ——俺の脳天めがけて、斬り下ろしてくる。

「——！」

魔力を失ったというのに、なんという超人技だ。

この斬撃は、俺が想定していたジャンヌの運動力以上のスピードだった。

デュランダルの軌道は、俺の脳天を完全に捉えていて――

――その瞬間。

ヒステリアモードの俺に。

全てが、スローモーションのように見え始めた。

この状況に対抗できる技が――
1つある。

その技には両手が必要だ。

だが、この右手の拳銃は離せない。

チェスでいえば、チェックメイトに必要なコマの1つなんだ。
だから俺は、拳銃を握っていない左手だけで――

「ッ――！」

魔剣、デュランダルを受け止めた。

――真剣白刃取り――

の――片手版。

やれるかどうか少し怪しかったが、できたな。

ヒステリアモード、そしてアリアとの特訓のおかげだ。

「――！」

ズシヤッ——！

と、ジャンヌは劍の柄つかを握ったまま、俺おれの真横に着地した。

「……なんて、ヤツ……」

自慢の劍、その切っ先が俺の人差し指と中指に挟まれて止められているのを見たジャンヌは……予想通り、それでもまだ闘争本能を失っていないようだった。

彼女の首筋に、俺は左手で劍を抑おさえたまま右手の銃を突きつける。

「——これにて一件落着だよ、ジャンヌ。もう、いい子にしておいた方がいい」

子供に諭さとすように言った俺に――

「武偵法9条」

ジャンヌが、返す。

俺は少し視線を逸そらしながら、小さく苦笑にがわらいしてしまう。

その通り。

法に従えば、俺はジャンヌの首を撃つことはできない。

「よもや忘れたわけではないな。武偵は、人を殺せない」

「ははっ。どこまでも賢いお嬢さんだ」

「お、お嬢……？」

ジャンヌは呼ばれ方が恥はずかしかったのか、少し赤くなる。

「だ……だが、私は武偵ではない、ぞ！」

言いながら、ぎり、と剣に力を込めてくる。

こら、こら。

お嬢さん。もうきみは詰んだ。

勝負はついてるんだよ。

なぜなら――

カツ！ カカカツ――！

という、赤い鼻緒はなおの下駄げたを鳴らす音に続いて――

「キンちゃんに！ 手を出すなああああッ!!」

絶叫と共に駆けてきた白雪しらゆきが――俺とジャンヌの間にあつたデュランダルめがけて。

――「緋ヒ緋ヒ星伽神ホトギカミ――！」

鞘さやに収めていた刀を抜きざまに、下から上へ、居合い抜きのように奔はしらせた。

鞘から――緋色ひいろの閃光せんこうと共に刀が奔り――切り上げた刃やいばは、デュランダルを通過して。

そのまま、触れてもいない天井にまで、巨大な曳光えいこう焼夷弾しょういうだんのような焰ほのおの渦が噴き上がり

ドガアアアアアアンツツツ!!

凍り付いた天井を、氷ごとグレネードランチャーで爆破したかのように砕いてしまおう！
がらがら……

と、ガレキが降ってくる中でジャンヌは、自らの呼び名でもあったデュランダルが断ち切られた事実**に**呆然**として**いた。

「……………」

最後の最後にまた訪れた**想定外の出来事**。

それに弱いジャンヌは、サファイアみたいな瞳を見開き――

ただ、立ちつくすことしかできずにいた。

デュランダル
「魔剣！」

その隙、アニメ声と――がちゃん！

ジャンヌの右手首に、手錠が掛かる音。

「うっ――!?」

ジャンヌが視線を向けた手元には、対超能力者用の手錠が掛かっていた。
言うまでもない。

アリアが白雪をボディガードし始めた初日に買った、銀の手錠である。

「逮捕よ!!」

アリアは肉食獣のようにジャンヌに襲いかかると、がちやん！ 左手首にも手錠をかける。

俺は――

「だから言っただろう？――『いい子にしておいた方がいい』って」

鐐つばの辺りで斬きられた魔剣デュランデルの上半分を一回しして手に取ると、しがみついたアリアに今度は足首に手錠を填はめられているジャンヌから、目を逸そらしてやった。

彼女は、その行動とは裏腹に――アリアと同じ、ずいぶん誇ほこり高き家柄のお嬢さんみたいだからな。

しかし、その自信が落とし穴になったわけだ。

ジャンヌ。きみは最後の最後まで、俺とアリア――『武偵ぶてい』を侮あなどっていた。それが、きみの敗因だ。

なぜならここにいる武偵は、ヒステリアモードの俺と――パートナーが機能している状態のホームズ4世、双剣カトドラ双銃のアリア。ただの武偵じゃないんだよ。

ふう、と俺は鼻で一つ息をつきつつ……

力尽きてガレキの山にへたり込んでいた白雪の方へ、歩み寄った。

俺と目が合った白雪は、そそくさと火の消えた日本刀を鞘さやに収めて隠す。

「キ、キンちゃん」

ごめんね、と言出しそうだったので。

俺おれは人差し指を立てて、「ちがうだろ？」という顔をしてやる。

「……あ……ありがとう」

ありがとう、か。

まあ及第点かな。

「白雪しらゆき。よく頑張ったな。白雪のお陰で——魔剣デュランゲルを逮捕できた」

「こ……怖くこわ……なかった？」

「何がだい」

「さ……さっきの私……あ、あんな……」

ぱっつん前髪の下で、うるつ、と黒い瞳ひとみを潤うるませる白雪。

どうやら、俺がさっきの白雪の超能力を恐れていると思ひ込んでいるらしい。

はは。

そんなこと、気にしてたのか。

俺は、俺に嫌われたんじゃないかと怯おびえる白雪に、優しい笑顔で答えてやった。

「怖いもんか。とてもキレイで、強い火だったよ。この間の打ち上げ花火より、ずっと、ずっとな」

「キンちゃん……う……うあ……」

あーん……と泣き始めてしまった白雪が抱きついてきたので――

俺はそっと彼女を抱き返し、その背中を撫でてやった。

何時間でも、こうしていてあげるよ。

泣き虫さんが、落ち着くまでな。

優しく、優しく……撫でてあげよう。

子供のころ、花火大会のことでひどく怒られて泣いた白雪に、してあげたように。そう。

白雪は何も変わらない。こういうところは。

でも――強くなった。

星伽ほときの鳥籠とりかごから飛び出し、その炎の翼を広げ、自分の意志で戦えるほどに。

ひん、ひん、と泣きながら見上げてきた白雪を安心させてやるように、俺は――

「もう……勝手に俺の前からいなくなるんじゃないぞ、白雪」

もう一度、笑顔を見せてやった。

最終弾 あの閃は、誰が？

感謝させてほしいよ
「I'd like to thank the person...」

イケメン不知火のボーカルと、俺がかき鳴らすギターのFマイナー和音で、アドシード閉会式のアルカカタが始まる。

こないだの地下倉庫でまた、しかもアリア・白雪の前でヒステリアモードになってしまった俺の音は……かなり、ヤケクソ気味である。

ああ。

……あれは、イタかった……

何が『勝手に俺の前からいなくなるんじゃないぞ、白雪』だ。

アリアに対しても、何かとんでもないこと言っただけだったか。生涯がどうか。思い出そうとしただけで……衝動的に死にたくなるぞ。

それ以上に問題は、あの場では仕方なかったとはいえ……アリアと白雪の前でジャンヌの変装を見破ったり、閃いた作戦をべらべら喋ったり、白刃取りまでやってのけたり……曲がりなりにも、活躍してしまったことだ。

アリアと白雪が俺の実力を誤解する原因を、また自ら作ってしまった。



あんたもやればできるじゃない、とか、キンちゃんはやっぱりスゴイよ、とか、あの後2人に絶賛された事は……思い出したくもない。

これから面倒なことにコキ使われそうな予感が、予感というか確信レベルでするぞ。それもドンパチ系の面倒事にな。

「Who shoot the flash…」

ていうか武偵高なあ……予算ケチしないで、ちゃんとバンドぐらい雇えってんだよ。

などと今さら八つ当たり気味に思いながら、俺はずいぶん手に馴染んだDC59を会場の第2グラウンドに鳴り響かせる。Bb、Gm、Cm 7。

ちくしょう、いい天気だ。

「Who flash the shot like the bangabangbang'a?」

曲が急にアップテンポになると同時に、左右からポンポンを持ったチアガール姿の女子どもが笑顔で舞台上がってきた。

「で、でもやっぱりこんなの……」

という声を横目で見れば、舞台袖でまだモジモジしていた白雪も――

「あーもう！　ここまで来てなに言ってるの！　ほら出る！」

と、アリアに蹴り出されるようにして舞台、それも中央に出てくる。しゃ、と真っ赤になった白雪がポンポンを掲げたその脇には、アリア。

このチア、運動神経が一番いいアリアと、アリアの強力な推薦すいせんによりドタン場でメインのペアに抜擢ばつてきされた白雪しらゆきがリードすることになったのだ。そもそも、白雪は準備委員会にチアに出るよう待望されてたわけだし、話はトントンと進んだらしい。

いきなりの出場で演技は大丈夫かとちょっと心配だったが、そこはさすが優等生。舞台上でひらひらと、完璧かんぺきなチアを披露ひろうしている。

あの衣装でみんなの前に出るのが恥ずかしいのかまだ少し表情は硬いが、まあ白雪よ、アリアに目を付けられたのが運の尽きだと思え。あいつは一度くつついたら離れない、人間電磁石みたいなヤツなんだ。しかもその電源は原発つなに繋がってる。

敵の真つっつ止血に出たって、逃げ隠れ逃げかくれなんか絶対しない
 「Each time we're in frooooooout of enemies! We never hide'n sneak away!」

白雪にとつて、こうやって人前おれに出る勇気が出たのも、あの戦い以降。

俺おれと学外へ出た上に星伽ほときに禁止されていた技の使用という制約違反を積み重ねてしまった白雪は、3度も4度も同じ！ というアリアの押し文句に押されてか、もうやぶれかぶれになってか、このチアへの参加を了承したのだ。

なにせよ、あの魔剣デニラントルを退けた経験しりぞはアイツにとってプラスになった——と、俺も思う。まあやってることはただのチアだが、白雪。俺には分かるぞ。

お前はもう、『かいつのとり』なんかじゃない。

まだおっかなびつくり近所を飛んでるだけだが、自分の翼で羽ばたく立派な鳥……そう、えっと、ツルだ。タンチョウヅルになったんだよ、お前は。

などとにかく余計なことを色々考えているのは、先日のヒステリアモードの件を考えたくないこともあるが――

その起伏に満ちたプロポーションにぴっちりと密着したチア衣装を着た、白雪の肢体しだいに意識が行かないようにするためでもある。

しかし、照れを隠しきれずながらもぼんぼん跳ねたりクルッと回ったりする白雪は――
ゆさつ。ぷるんつ。ぽよんつ。

双子の富士山を……大鳴動、させて……いる……！

い、いかん。ヒスるつ。

とはいえ大勢の観客がいるわけだし、練習の時みたいに顔を伏せるわけにもいかない。緊急避難だ。白雪の隣のエリアに視線を移そう。

――よかった。

こっちの小さなお山は、飛んでも跳ねても地盤がしっかりしている。

しかし油断はならない。

ちっこカワイイこっちはこっちで、チビすぎて衣装と肌の間に隙間すきまがあるのだ。

どちらにせよ危険な活火山だ。ここは俺にとつちやあの地下倉庫以上に難所かもしれないぞ。こんな女子だらけの環境で、またヒステリアモードになったら一大事だ。

とにかく他のことを考えよう。

えーつとだ。

まあ、地下ではあんな事件も起きていたわけだが、こうして武偵高が吹っ飛ぶこともなく、無事、アドシアードは閉会式を迎えることができたわけで……えーつと。

「Who flash the shot like the bangabangabanga?」

そう、ジャンヌ。30代目、ジャンヌ・ダルク。アイツは警視庁と東京武偵局の取り決めに従って、まずは尋問科で綴先生の取り調べを受けている。

つーん、とソツポを向いて黙秘を決め込むジャンヌを引き渡した時、綴が「イジメ甲斐がありそうだなア」と笑ったのは不気味だったな。初めて見たぞ。アイツのあんな笑顔。

「Who was the person, I'd like to hug the body.」

女子たちが、ぼーん！

とポンポンを天高く投げ捨てると、会場が一気に盛り上がった。

ヤツらはみんなポンポンの内側に拳銃を持っていたのだ。そして空砲を歌詞の通り、空に向けてバンバンぶっ放してる。ウケたのが嬉しいのか、練習より多めに撃ってるな。

あーあ……だから、そういう物騒な仕込みをするなって。



世間様のイメージアップのためにやってるのに。

後はテレビ局がこの辺を編集でカットしてくれることを祈るのみだ。

そして――

アリアと白雪しらゆきを中心にした女子たちが、一斉に組体操みたいなポーズを決めて。

舞台上にセツトされていた銀紙の紙吹雪が、その女子たちの周囲にバツと巻きあがり――
それが私の人生を、変えたんだから！
 「It makes my life change at all dramatic!」

アドシアードは、これにて一件落着となった。

激しいアルカタのチアに息を切らした白雪は、今はもう屈託くつたくのない笑顔を会場に向いている。その周囲を、きらきら、きら……と、紙吹雪が舞う。

それはまるで彼女の新しい人生を祝福する、白い――雪のように。

打ち上げがファミレスってのはどういうことだ。

俺たちバンドの男衆は、一次会もここだったんだぞ。お前らチアをやった女子は台場だいばのクラブ・エステラだったそうじゃねーか。せめてそっちにしろ。

という俺の抗議はいつもながら全く無意味で、俺、アリア、白雪の3人による二次会は、学園島で唯一のファミレス、ロキシのボックス席で行われている。

魔剣マユランタルを逮捕できたことで、その濡れ衣ぬれぎぬを着せられていた母親――神崎かんざきかなえさんの刑期

を一気に短縮できる流れとなったアリアが上機嫌で「あたしのおごりよ！」と宣言してくれたのはせめてもの救いだ、お前、貴族なんだからもう少しいい店に招待しろよ。

と言いかけたがあまり言う風穴なので、一番高いステーキセットを頼むことでささやかな不満の意思表示をしておく。

各人の注文が終わり、おしほりで手を拭いていると……

アリアと白雪の様子が、ちよっとおかしい。

お互いを見つめ合って、何か言い出そうとして、やめている。

……なんだこの空気。

「あ、あの」ね

白雪とアリアがハモった。

「あ、アリアが先でいいよ」

「あんたが先に言いなさいよ」

「……外すか？」

隣の白雪に言うと、白雪はふるふると首を横に振って顔を伏せた。

「え、えっと……あのね。キンちゃんにも聞いてほしいの。私……どうしても、アリアに言っておかなきゃいけないことがあるから」

……俺にも聞かせたい、アリアに言うべきこと？

「あの……このあいだ、キンちゃんがカゼひいた時……私、ウソついてました」
「ウソ？」

「うん……あのね……あの時キンちゃんが飲んだお薬……私が買ってきたんじゃないの。あれは……アリアが、お部屋に置いてったんでしょ？」

え。

こないだ俺おれが熱で朦朧もうろうとして学校を休んでた時……

『特濃葛根湯』とくのうかつこんとうをわざわざ買ってきてくれて、こっそりドアノブに掛けてったのは……

「アリア、だったのか？」

「……」

無言のアリアを見る白雪しらゆきは、本当に済まなさそうにしている。

アリアはそんな白雪を見て、俺を、その赤紫色カメリアの瞳ひとみでチラ見した。

……なんだよそのリアクション。

「な、なーんだ！ そんなこと！」

アリアはわざとらしく両手を頭の後ろにやり、大きく体を後ろに傾けた。
なんかちよっと赤くなって、また俺の方をチラッと見ている。

あ。

強襲科アサルトの屋上で、アリアが言ってたセリフ……

『貴族は自分の手柄を自慢しない。それは無様なことだから。たとえ横取りされてもね』
あれは……

こういうことだったのか？

『話がある』っていうから、もっと大変なことかと思って損したわ』
否定しないところを見ると、やっぱりあれはアリアだったらしい。

てことはあのとき、俺の熱を——優しく——計ってくれたのも、アリアだったのか。
「イヤな女だよね私。でも、イヤな女のままでいたくなかったから……ごめんなさいっ！」
ぺこっ、とアリアに頭を下げる白雪。

だがアリアはその白雪の顎に手をやって、ぐい、と姿勢を戻させた。

「別に気にしてないからいいわよ。はいこの話は終了。じゃ、今度はあたしの番ね」
「う、うん」

どうやらこの2人、ここに入る前にお互い「話がある」と前置きしあってたらしい。

「おほん」

アリアは咳払いせきばらいをすると、姿勢を正し。

「——白雪。あんたも、あたしのドレイになりなさい！」

びしっ！ と白雪を指さしながら放たれたそのセリフに――

白雪。俺。おれそして近くのボックス席の男子数人が固まる。こ、こら。こっち見んな。

「ありがとう、白雪」

おいアリア。

前後の文脈が完全におかしいぞ。

「魔剣を逮捕できたのは、3割はあんたのおかげよ。4割はあたし。2割、レキ」

……ん？

「あたし今回分かったの。あの魔剣、デユランタルジャンヌ・ダルクとの戦いは――あたしたちが1人1人だったら、きつと負けてた。3人がかりで、やっと倒せた。それは認めるわ」

それ以前に認めてもらいたいんだが、その3人に俺は入ってるんだろな？

「あたしたちの勝因は力を合わせたことよ。今までのあたしは――どんな敵が相手でも、自分と、自分の力を引き出すパートナーさえいればいいって思ってた。でも……2人じゃどうしようもできない相手もあるわ。つまり、あたしのパーティーに特技を持った仲間が増えるのはいいことなの。特に白雪みたいに、あたしにない力を持つてる仲間はね」

ふーん。

仲間、か。

まあ、元・独唱曲さんアリアもこの学校で少しはいいことを学んだってわけか。

ご指名を受けた白雪はというと、ド、ドレイって……そんなの……でも、キンちゃんのドレイなら……などとボソボソ言っていて、話を聞いているのかいないのかだが。

「というわけで契約は満了したけど、あんたもこれからキンジと一緒に行動すること！朝から晩までチームで行動して、チームワークを作るのよ！ はいこれキンジの部屋の鍵！ 今後、自由に入ってよし！」

「ありがとうございます！ ありがとうございますキンちゃん！」

「おおおい！」

超神速で偽造カードキーを胸ポケにしまう白雪と、ボックス席から床に転げ落ちる俺。

「ダメだダメだダメだ！ あそこはそもそも男子りよ」

「ドレイ1号、文句あんの!？」

「お前ら！ 俺の話を！ 聞……いてくれると嬉しいんだが、検討してくれないかな」

途中から俺の声のトーンが落ちたのは、アリアが二丁拳銃けんじゆうを抜いたからだ。

そこに、ちよつと怯おびえつつのウェイトレスさんが俺たちの料理を運んできた。

ミネラルウォーターと、ステーキセット。烏龍茶ウーロンチャと、炊き込みごはん御膳ごぜん。コーラと、

ももまん井どん……っていうのは何だ。メニュー開発者出てこい。

「はい！ じゃあドレイ2号の誕生にCheeeers!」

「かんばい！……うれしい！ うれしいよ！ 合い鍵……キンちゃんの愛の証あかしだよー！」

嬉し^{うれ}そうにツリ目を細めたアリアと、嬉し泣きしかけている白雪^{しらゆき}がグラスを上げたので――完全に流れを作られちゃった、俺^{おれ}ことドレイ1号は。

ああ、もう……

「勝手にしろ！」

俺は2人のグラスから飲み物がこぼれるような勢いで、がちん、と乾杯するのだった。

というわけでこの迷惑な2人は、引き続き俺の部屋へ勝手に出入りするようになった。

白雪はファミレスから出たその足でフロシキに包んだ私物を女子寮から背負ってきやがるし、アリアはこないだ録画したどうぶつ奇想天外2時間スペシャルを見て「かぁーわいいー！ キンジ見て見て！ らっこの大群！」などとソファでぼすぼす跳びはねている。靴は玄関にぶちまけ状態。黒ニーソも床に脱ぎ捨て状態。元々ここは俺の部屋だったってことを忘れちゃいませんかアリアさん。

「ていうかアリア、さっきのファミレスでの計算だが」

CMを飛ばしにかかったアリアの横に、俺は不満顔で座る。

「なによ」

「魔^{デュランダル}剣事件への、貢献度の割合だ。お前が4割。白雪が3割。レキ2割……ってことは俺は1割かよ」

と文句を言うと、

「あんた最後にちよつと動いただけじゃない！」

アリアはリモコンを操作しながら、俺の方を見すらせずに言い放った。

「……お前とのパートナー、本気で解消したくなってきたぜ」

「まあ、あの時のあんたは、ちよつとカッコよかったけど？」

らっこの大群とやらのお陰でハイテンションのアリアは、こつちを向いたかと思ったら

……ばちん。

ウインク、しやがった。

こ、この……

軽々しくウインクなんかするなっつてんだ。反則だろうそれは。可愛らしすぎだ。

いま、胸にミニな矢が刺さつちまった気がするぞ。

「パートナーさん、テレビを一時停止してあげるから、ちゃんと聞きなさいね。あんたも

……白雪と同じ。相変わらず調子に波があるみたいだけど、あんたはあたし、ホームズ家

の人間に必要な力をちゃんと持つてる。今回の戦いでそれも再認識した。だからあんたも、

あたしの穴を埋める——」

んしょ、と、アリアはソファの上に正座してこつちを向いた。

どうやら、最後の一言を言う前に、少しでも座高を俺と同じにして視線を揃えたかった

らしい。

「——大切な人よ」

赤紫色の目で、まっすぐこっちを見て言ったアリアに——俺は、黙ってしまふ。
ど……どこまでも自己中なヤツだ。

でも、なんでか逆らえないのは、今、俺のすぐ目の前でおすわりしてるこのチビが……
ちくしょう、カワイイからなのか？

いや違うぞキンジ。

そんなじゃない。これはあれだ。

コイツの子供じみたサイズのせいなんだよ。きつと。

子供には逆らえないってやつ。それだ、それに違いない。

「い・ま・な・ん・て・い・っ・た・の・！」

俺たちの背後から、ヒステリックな金切り声。
——い、いかん！

真っ青になった俺が振り向くと、ソファの背後には。

「『大切な人』！　って！　何！」

案の定、例のバーサーカーモードになった白雪が仁王立ちしていた。

だ、だから怖えよ白雪！

なんなんだその瞳孔の開いた、焦点の定まらない目は！

ていうか何がスイッチなんだ！ それだけでも教えてくれ！ 保安上！

「~~~~言っておきますけどね！ アリアー！」

「なっ、なによなに!? 何が気に入らないのよ！」

アリアも鬼みみたいな白雪の形相には後ずさって、どて。

ズリ落ちたソファに足を残した、V字みみたいな姿勢で床に落ちる。

「勝ったと思わないこと！ わ、わ、私だって、キンちゃんときスしたんだからあ——！」

どこからか、本当にどこから取り出した日本刀で、ソファを飛び越えながらアリアに斬りかかる白雪。

「な、何なのよそれ!?」

いきなりキスの件をむしかえされたアリアは、ぼんっ！ と赤くなりつつも巧みに側転を切って斬撃を躲す。

がしゃ！

ああ、またテーブルが壊れた……

「引き分け！ だから引き分け！ キンちゃんに！ とって！ 引き分けなんだから！」

私が、そこから一步！ リードすればいいの！ そういうことなの！」

どういふことか全く分からない理屈を喚きながら、白雪は、ぶん！ ぶん！ と刀を振り回す。ごしゃ！ がしゃ！ 室内の買い直した諸々が、また破壊されていく。

「こ、こらドレイ2号！ ドレイの分際で主人に何するのよ！ しずまれえーっ！」

なぎ払われた白雪の刀を避けながら、とうとうアリアは、バスンッ！

威嚇射撃。漆黒のガバメントで天井に穴を空けた。

すみませんね近隣の皆さん。

「そ、そ、そっちこそメカケの分際で——盗っ人ただけしい！」

白雪は全く怯まない。

ぱっつん前髪の下眉毛をぎぎんと吊り上げて、アリアに飛びかかっている。

ああ、もうダメだ。

もう止められない。

「き、キンジ！ 白雪にキスって何よ!? あ、あんた、依頼人にそんなことまでしてたの!? こ、このハレンチ武偵！ ていいうかなんとかしなさいコレ！」

アリアよ。

お前も、面倒なのをドレイ2号に取り立てちまったもんだな。

ていいうか俺にそんな怒りを向ける前に、目の前の武装巫女をなんとかした方が身のため

だぞ。

そう思いつつの俺は、とぼ、とぼ……と。

リビングを渡り、ベランダに出て。

がら。

扉を開けた。

防弾物置の、な。

「後かたづけは、お前らがするんだぞ」

この数日で、俺も1つ学んだことがある。

双剣^{カド}双銃^ラのアリア。武装巫女の白雪。コイツら^{がら}絡みの事件は^{すべ}全て、結局、俺は憎^につくき

ヒステリアモードで解決している。

ていうか、ヒステリアモードから逃げつつコイツらと行動を共にしていたら、命が^{いく}幾つ

あっても足りないんだ。この日々は。

そうなる……

俺も、もう、逃げ回ってる場合じゃないらしいな。ヒステリアモードから。

だが課題は多い。

ヒステリアモードは、そもそも自由自在になれるものじゃない。兄さんならそれができたものだが……あの方法は、俺にはムリそうだしな。

なった後の自分も問題だ。あのホストみたいな俺おれを女子に気に入られでもしたら悪循環、ヒステリアモードの繰り返しになって、中学の頃ころと同じになっちまう。

最大の問題は、トリガーの性的興奮。これは決してバレないようにしなきゃならない。

ああ、もう……

問題は山積みで、どこから手をつければいいのかすら分からない。

まあ、うまい解決法は……またヒステリアモードになれてしまった時にでも考えよう。

「キンジ！ あたしに加勢しなさい！ しないと——」

とりあえず今しなきゃいけないことは……

「風穴あけるわよ！」

アリアのアニメ声をスルーして。

ボタン、と防弾物置の扉を閉めて。

祈ることだろうな。

明日も、俺が生きてますように。

エピローグ

Go For The NEXT!!!

ふつう、自分の部屋ってのは安らぎの場だよな？

だが今の俺の部屋は相変わらず住みついていてアリアと勝手に出入りして堂々と家事をするようになった白雪しらゆきのせいで女ぐさく、ちっとも安らげなくなってしまった。

カンベンしてくれよ。全く。

というわけで最近の俺は登校拒否ならぬ下校拒否ぎみだ。今日も放課後、ヒマ人代表の武藤むとうと付き合いのいい不知火しらぬいの3人で自習室に籠こもりカードゲームの自習をしていた。

7時過ぎ……武藤の一人勝ちで（コイツはいつもヤケに強い。チートじゃねーのか？）つまらなくなってきた頃……ケータイに電話がかかってきた。

アリアだったらシカトしてやろうと思ったが、番号は03で始まって。ケータイじゃないな。誰だだれ？

「もしもし」

『キンジ？ アンタ、どこいんの』
げ。アリアだ。

「どこでもいいだろ。なんだよ」



『すぐ来なさい。女子寮、1011号室にいるわ』

「行きたくねーよ女子寮なんか」

『うるさい！ あたしがすぐと言ったらすぐ来る！ 来ないと風穴！』
がちゃ。

議論の余地ナシ。

ご主人様は一方的に電話をお切りになられてしまった。

仕方なしに、本っ当に仕方なしに女子寮の1011号室へ向かうと……カギは開いていた。

女子寮は男子寮より個室率が高く、ここもそうらしい。

ていうかここ、アリアの部屋なのか。

「おーい来たぞアリア」

「もー遅い。でも今日は許してあげる」

玄関に上がると、セーラー服姿のアリアが洗面所からとてと出てきた。

そして、ぎゅ。

いきなり俺の手を握ってくる。

お、おい。なんだよ。

「こっち。来て」

引っぱられて入ったりビングの光景に、俺は――

「うっ……？」

思いつきり引いた。

キャンドルポットで桃色に照らされた室内には、足の踏み場もないほどに様々な衣服が散らかっている。

――その衣類の数々が、フツーじゃない。

どこかのウェイトレスの制服。白雪しらゆきが着てるような巫女装束みこしやうぞく。いわゆるメイド服。大きめに作られた幼稚園のスモック。ネコのミミみたいな髪飾り、しっぽ飾り。リコーダーの飛び出た赤いランドセル。カボチャみたいな形状の、おそらく下着。その他ほかもろもろ。

「キンジ、どれがいい？」

「どれがって……何がだっ」

「んもーキンジ。アンタ、こういこと避けて生きてきたからって、ニブすぎよ？ どのコス着てほしいか、って聞いてんの」

この場の雰囲気ふんいきに完全に飲まれていた俺が、言葉を失っていると――

きゅっ、とそのツリ目を細めたアリアが、一歩、二歩、俺に近づいてきた。

「えい」

アリアは黒ニーソあんよで俺の爪先を踏むと、トン！と、テンパって棒立ちだった俺を突き飛ばし——ドサツ。

背後にあったでかいベッドに、仰向けに押し倒してしまった。

「キンジー？」

素早い動作で子供みたいに俺の胴にまたがったアリアは、そのまま、いきなり。

上半身を、俺の顔に覆いかぶせてきた。

自制する隙すら無かった。

——なってしまうッ——という嫌悪感は、ほんの一瞬で。

ブラウス越しに顔に押しつけられた、マシユマロみたいな胸の感触。腰にまたがるプニプニした太股の感触。甘酸っぱい、女の子の子したニオイ——に、包まれた俺は。

ほんの数秒で、いきなり、なってしまうていた。

——ヒステリアモードに——

「！」

その瞬間、俺の脳裏に閃くものがあつた。

同時に、全身の血が凍りつく。

失礼を承知で言わせてもらえば、アリアの胸はこんなに盛り上がっていない。寄せて上

上げるブラで偽装してはいるが、一度顔に押しつけられたことがあるから分かる。

そしてこれは、俺が体験で知っている、もう1人の女子の身体からだの感触——

あの子と、寸分たが違わず同じ——！

「——理子——」

鋭く、低く、言う。

「びんごおー！ やったやったー！ キーくんがヒスったあー！ クララが立ったー！」

アリア——の姿をしたソイツが、理子の声になって、上半身をがばっと起こす。

ゆさつ、と制服の下の大きな胸を跳ね上げるように揺らしたかと思うと、右手で顎あごの下を、左手でツインテールの片方をつかみ……

べりべりっ、ばさっ。

顔につけていた薄いマスクみたいな特殊メイクと、ピンクブロンドのツインテールを取った。

中身は、予想通り——

「りっこりっこりんでえーす！ くふふっ！ たっだいまあー！」

理子。

兄さんを殺し、俺おれのチャリや武偵高ぶていこうのバスに爆弾を仕掛け——ハイジャックで俺とアリアと戦った末に逃亡していた——『武偵殺し』ぶていころこと、峰みね・理子・リュパン4世。

どうして、コイツが、武偵高に——!?

キラキラと星でもまたたいてそうなふたえの目を嬉しそうに細めた理子は、ウィッグで巧みに隠していた、長い蜂蜜色のウェーブヘアをふあさつと下ろしてくる。

「キーくん、理子を助けて」

——ドキン、と、俺の心臓が跳ねる。

ヒステリアモードの、俺は——

女子を、何がなんでも助けたくなくなってしまった。

困っている女子、ピンチに陥っている女子を助けるためなら、求められるままに力を貸してやりたくなくなってしまったのだ。

理子は明らかに……それを、分かって言ってるな。

「ていうかそもそもねえ、せっかく理子がダブルスクールしてたのに——アリアとキーくんのせいで、イ・ウーを退学になっちゃったんだよ? ぶんぶんがおー」

イ・ウーを——『退学』……?

「理子、キーくんにお願いがあるの。だからお母さまが教えてくれた、男の子に言うことを聞かせる方法、初めて使っちゃう。くふっ。ここから先は、理子ルートパッチをお買い上げ下さったお客様専用の、甘い甘あーいイベントシーンなのでえーす」

興奮したケモノのように息に熱いものを交えて、理子が俺のネクタイを外してしまう。

この状況で、次に言われることは明らかだろう。
どうする。

理子は——ぐいっとその愛らしい童顔を俺の顔に近づけてきて、誘惑的な唇で——
言った。

「キーくん、えっちいいことしょ?」

どうするキンジ。

To Be Continued!!!

あとがき

『黒髪ロングはみんなのあこがれ!』

というわけでお待たせしました、『緋弾のアリアⅡ』では星伽白雪^{ほとぎしらゆき}が大活躍します!

白雪は清楚^{せいそ}で従順で優しい大和撫子^{やまとなでしこ}でありながら、主人公・遠山キンジ^{とおやま}に近づく女の子には鬼の武装巫女^{みこ}モードで日本刀をギラつかす……ちよ……ちよっと困った女子ですね(汗)ですがそんなコミカルな白雪も、実は見えない鎖に縛られていて——というドラマが、今回の物語には待ち構えています。

みなさんには、そんな白雪がほんの少しだけ成長する姿を見守っていただきつつ……でも最後には、

「でもやっぱりこえええええ!」

ってなっちゃうんでしょねえ、やっぱり(赤松涙目^{あかまつなみ})

ま、まあ……そんな・黒雪モードも含めて、白雪さんを愛でてやってください!それが、愛だよ!

さて今回の物語では……キンジとアリアの凸凹コンビ^{でこばい}が、そんな白雪を自宅に住ませて

ボディーガードすることになります。

キンジは、犬猿の仲のアリアと白雪が所構わずドンパチやかすものだから大迷惑。あなたは、そんなキンジの困惑に——ニヤニヤしていつてくださいね。

『緋弾のアリア』シリーズには、シリーズを通じてのテーマがいくつかあります。

その1つが、「チームワーク」です。

このテーマは特に、多様な人種・思想が入り乱れる欧米では1つの学問として意識的に研究されています。でも赤松は悲しいかな学問が苦手なので……

それをライトノベルの中に、楽しく、じんわり、交えていきたいと思っています。

このシリーズを読み進める内に、あなたは今いる、そしてこれから出会うお友だちとのチームワークをいっそう深めることができるようになることでしょう。きっと。

なのでお友だちにも、『緋弾のアリア』をどんどん勧めましょう！（笑）

日本中のキンジ君が、アリアや白雪や武藤^{むとう}やレキに出会い——

沢山^{たくさん}のすばらしいチームが、いろんな夢を叶^{かな}えていける日が来ますように。

2008年12月吉日

赤松^{あかまつちゆうがく}中学

アリア 2巻 ということぞ。

■挿絵を描かせて
いただいております
こぶいちです。
アリアも2巻ですよ！
めでたい。またこうして
アリア達を描けるのは
嬉しく有難い限りです。

■今回は白雪の色々な
表情を描けて楽しかった
です。チアリアも
チア白雪も。
ということで
サービスすごいな！
赤松先生。
チアは趣味ですか。

■今回の新キャラちゃん
本編では制服を着てる
イラストを描く機会が
なかったのでここで。
こう、割と色々と
マメな子だなあという
印象でした。
今回限り
なんでしょーかー
また出てくるといいな。
と思ったり



緋弾のアリアⅡ

ダイヤモンドダスト

燃える銀氷

発行 2008年 12月 31日 初版第一刷発行

著者 赤松中学

発行人 三坂泰二

発行所 株式会社
メディアファクトリー
〒104-0061
東京都中央区銀座 8-4-17
電話 0570-002-001
(カスタマーサポートセンター)

印刷・製本 株式会社廣済堂

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©2008 Chugaku Akamatsu

Printed in Japan

ISBN 978-4-8401-2600-7 C0193

MF文庫



ファンレター、作品のご感想は

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト
メディアファクトリー MF文庫J編集部気付
「赤松中学先生」係 「こぶいち先生」係

*この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは
一切関係ありません

第5回 MF文庫J ライトノベル新人賞 募集要項

MF文庫Jにふさわしい、オリジナリティ溢れるフレッシュなエンターテインメント作品を募集いたします。他社でデビュー経験がなければ誰でも応募OK！希望者全員に評価シートを返送します。

賞の概要

年4回のメ切を設け、それぞれのメ切ごとに佳作を選出します。選出された佳作の中から、通期で一位に選ばれたものを「最優秀賞」、二位に選ばれたものを「優秀賞」とします。

[最優秀賞] 正賞の楯と副賞100万円
[優秀賞] 正賞の楯と副賞50万円
[佳作] 正賞の楯と副賞10万円

応募資格

不問。ただし、他社でデビュー経験のない新人に限る。

応募規定

- ◆未発表のオリジナル作品に限ります。
- ◆日本語の縦書きで、1ページ40文字×34行の書式で100～120枚。
- ◆原稿は必ずワープロまたはパソコンでA4横使用の紙（感熱紙は不可）に出力（両面印刷は不可）し、ページ番号を振って右上をWクリップなどで綴じること。手書き、データ（フロッピーなど）での応募は不可。
- ◆原稿には2枚の別紙を添付し、別紙1枚目にはタイトル、ペンネーム、本名、年齢、住所、電話番号、メールアドレス、略歴、他賞への応募歴（結果にかかわらず明記）を、別紙2枚目には1000文字程度の梗概を明記。
- ◆メールアドレスが記載されている方には各予備審査メ切後、応募作受付通知をお送りいたします。また、一次通過者への通知を行います（メールアドレス記載者のみ）。
*受信者側（投稿者側）のメール設定などの理由により、届かない場合がありますので、受付通知をご希望の場合はご注意ください。
- ◆評価シートの送付（第5回より、80円切手の貼付が不要になりました）を希望する場合は、送付用として長3形封筒に、宛先（自分の住所氏名）を必ず明記し、同封してください。
*長3形以外の封筒や、住所氏名の記入がなかった場合、送付いたしません。
*なお、応募規定を守っていない作品は審査対象から外れますのでご注意ください。
*入賞作品については、株式会社メディアファクトリーが出版権を持ちます。以後の作品の二次使用については、株式会社メディアファクトリーとの出版契約書に従っていただきます。

選考審査

ライトノベル新人賞選考委員会にて審査。

2008年度選考スケジュール（当日消印有効）

- 第一次予備審査2008年 6月30日までの応募分＞選考発表／2008年10月25日
- 第二次予備審査2008年 9月30日までの応募分＞選考発表／2009年 1月25日
- 第三次予備審査2008年12月31日までの応募分＞選考発表／2009年 4月25日
- 第四次予備審査2009年 3月31日までの応募分＞選考発表／2009年 7月25日
- 第5回MF文庫Jライトノベル新人賞 最優秀賞 選考発表／2009年 8月25日

発表

選考結果は、MF文庫J挟み込みのチラシおよびHP上にて発表。

送り先

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト

株式会社メディアファクトリー MF文庫J編集部 ライトノベル新人賞係 宛

*応募作の返却はいたしません。審査についてのお問い合わせにはお答えできません。